

* 0004141000 *

0004141-000

特501-31

政治学

大山郁夫, 無産者自由大学・共編

南宋書院

昭和3. 9

ABB

102

安
60

學大由自者產

學 治 政

月報資料

安事禁止

編共 夫 郁 山 大
學大由自者產無

內務省
昭和 3.9.20 禁止
訓第1334号
東京



內務省
3.9.19
正本

學大由自者產無

座講九第

27

特

函 政 治
號 49
永久保存

函 政
號 60
永久保存

内務省
昭和 3.9.20 禁止
第 號

政 治 學

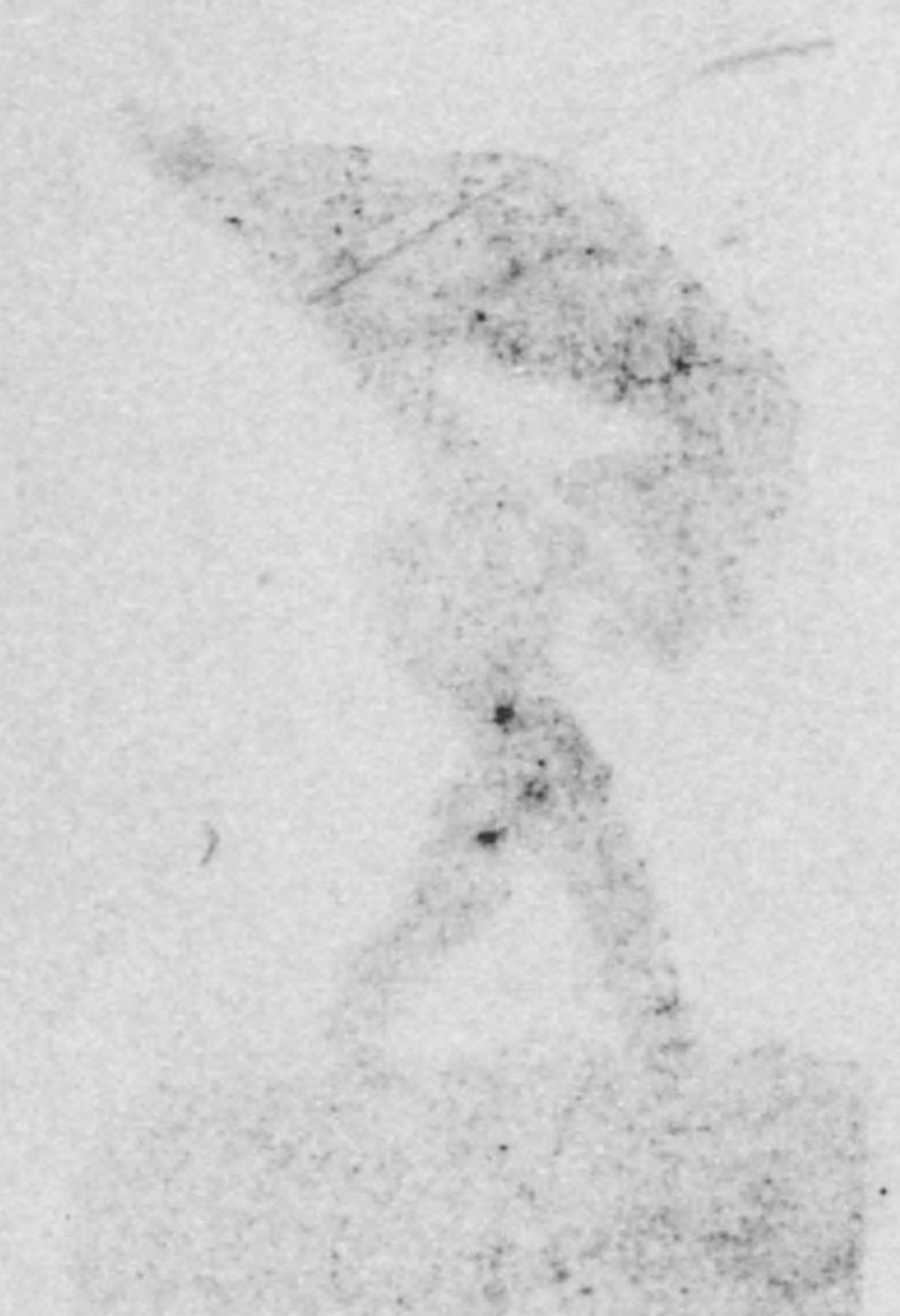
大 山 郁 夫
無 產 者 自 由 大 學 共 編



無 產 者 自 由 大 學
第 九 講 座

685801

政 治 學



無 產 者 自 由 大 學
第 九 講 座

特501
31

序論

第一章 政治學の意義……………三

一、政治學の發達の遅れた原因……………三

二、政治學進化の趨勢……………五

本論

第一章 國家……………九

一、國家の本質……………九

二、國家の發生……………三四

目次

一

學 會 誌
大 山 遊 藝 會 誌
滋 賀 縣 立 自 由 大 學



滋 賀 縣 立 自 由 大 學
國 會 圖 書 館

1082935

三、國家の歴史的變遷……………四八

四、國家の歴史的運命……………六〇

五、階級細論……………九三

第二章 政黨……………一二一

一、政黨の意義……………一二二

二、ブルジョア政黨……………一二四

三、無産階級政黨……………一二五

 A 前衛黨……………一二六

 B 社會民主々義政黨……………一二九

 C 大衆政黨―階級的共同戰線黨……………一三六

政治學

序論

第一章 政治學の意義

一 政治學の發達の遅れた原因

a 社會科學と自然科學

普通に、學問を二つに大別して社會科學と自然科學とする。社會科學とは人類の社會現象を對象とする學問であり、自然科學とは自然現象を對象とする學問である。

社會科學の中にはいろいろの科學が、即ち、經濟學、法律學、史學、哲學、政治學、社會學等々が之に含まれてゐる。

社會科學の諸部門は、自然科學の諸部門に比して、科學としての發達が非常に遅れてゐる。勿論、社會現象の觀察の方面に於ても、科學的研究が必要であるといふことは、既に古くから主

張されて来た處ではあるが、實際上に於ては、この必要はまだ甚だ僅かな程度にしか満足されて
るない。その理由は多々あるであらうが、その根本的原因は之を社會の級階的分裂に求むること
が出来ぬ。

科學の職分は、その對象の本質を、あるが儘の姿に於て認識することではなくてはならない筈で
ある。處が、社會が階級に分裂し、一定の階級が他の階級を排斥し支配して居る場合には、支配
する階級の意に満たない科學はどん／＼抑壓され、其反對に支配階級の利益になる科學は——そ
れは實は科學の名に値しないものであるが——凡ゆる手段を以て助成され獎勵される。これが、
社會科學が、最近まで科學としての實質を具有し得るに到らなかつた最大の原因である。

b 政治學と階級支配

斯くの如き理由から社會諸科學は自然諸科學に比して、なほ大體に於て幼稚の域を脱してゐな
い。その中でも、政治學の如きは特に甚だしい。この事は、右の理由を抜きにして考へるならば、
如何にも不可解の現象の様に思はれないでもない。といふのは、政治學の如きは、社會科學の諸
部門の中でも最も古くから成立してゐたものゝ一つであつて、それは、その原始的な形式に於ては

人間がどういふ形式かに於て國家を形成し、所謂國家生活を始めるやうになつた時から、既に存
在してゐたものだといふことが出来るからである。それは、さういふ古い時代から今日にいたる
まで、絶えず存在し續けて来た學問でもある。それにも拘はらず、今日に於ても、猶、所謂「政
治學」なるものが、科學的確實性に缺けてゐるものだといふことは、誰の眼にも、疑ひなき事實
として映せられてゐる。これは、右に述べた社會科學の發達の遅れた原因が、支配と被支配との關
係を取扱ふ政治學に於て、特に強力に作用したからに外ならぬのである。

二 政治學進化の趨勢

a 政治學と倫理觀念

政治學を學問として説き始めたのは古代ギリシヤ時代のことであつて、プラトンの「理想國家
論」や、アリストテレスの「政治學」等はその代表的文獻と見ることが出来る。特にアリストテ
レスは政治學の創始者とまで云はれてゐるのであるが、このアリストテレスと云ひ、プラトーンと
云ひ、又その他のものでも、その政治學説は倫理觀念と結び付けられてゐた。廿世紀の今日に於

て、國家は最高の道徳なりなどと云つて威張つてゐる先生たちは、未だにその域を脱し得ないのであるものである。それは却て措き、近世の初頭に於て、政治學說史上に一新時期を畫したと云はれてゐる、マキアヴェリの如きは、政治學を倫理學から引き離したといふので有名であるが、然し乍ら、彼も亦、民族國家創建の理想をその論策の根柢に置いた點から云へば、決して政治學を科學的基礎の上に引き据ゑることに成功したといふことは出来ない。更らに第十七世紀から第十八世紀に及んで全盛を極めた自然法學者の政治思想に於ても、倫理觀念若しくは功利主義的見解がその重要部分を形づくつてゐた。それからまた、この自然法學系統の政治思想に對する反動として起つて、そしてヘーゲルに於てその最も顯著な代表者を發見した理想主義的國家思想に於ては、あるがまゝの事實(Sein)の認識と、あらねばならぬ價值(Sollen)の測定との交錯が、一層甚だしくなつて來たことが見られるのである。ヘーゲルの國家論は、それがヘーゲル一流の進化論であつたと云へ、兎も角一種の進化概念の上に立脚せしめられてゐた點から云へば、それ以前の政治學に比べて、相當に現實味を帯びて來たものだと思ふことが出来る。だが、彼も亦、人間の實生活を超越した神秘的な「世界精神」(Weltgeist)を國家進化の指導原理として掲げるこ

とによつて、遂に彼の全學說を、奇怪な、空漠な、非科學的な極端なる國家禮讚の頌歌に終らしめたのであつた。

b 科學的政治學の成立

然し乍ら、社會現象の觀察を科學的基礎の上に置かうとする要求も、全然無かつたわけではない。この傾向は、非科學的な傾向を多分に持つてゐるアリストテレスの政治學說の中に於ても、既に相當の程度に於て示されてゐたのであつた。彼以來の各時代の政治思想の上に於てもそれは、時々々の事情に觸れ場合々々の必要に應じて、あちこちにその閃きを見せてゐる。殊にルネッサンス時代以來、自然科學がめざましい進歩を示してからは、その影響が、社會現象の觀察の方面へも、強烈なる勢ひを以て波及するやうになつた。その後、様々の波瀾曲折を経て、ついに、最近世に及んで、社會科學は、漸く科學としての曙光を見せるやうになつた。

だが、現在普通に行はれてゐるブルジョア政治學が、科學としての實質を具へるやうになつたといふことを、私は言ふとしてゐるのでは決してない。我々は、ただ、最近世の所産である、マルキシズムが、他の社會科學の領域に於てなし遂けたと同じやうに、政治學の方面に於ても、科

學としての實踐を擧げてゐる、といふことを言はうとしてゐるだけである。勿論、マルキシズムは「政治學」などといふシカツメらしい言葉を用ひてゐる譯ではない。しかし、事實上、政治學は、マルキシズムの研究によつて、初めて、科學としての實質を具へるに至つたと言ひ得るのである。マルクス、エンゲルス、レーニン等の名前は、こゝでも、最も輝ける名前である。

○ 本講の目的と範圍

紙數の極度に制限されてゐる本講座に於て、プロレタリア政治學の取り扱ふべきあらゆる問題を詳論することは、たしかに不可能である。だが、それかと言つて、極く簡単な説明を、あらゆる題目に亘つて試みるといつたやうな方法を探るならば、當然、諸君の理解を妨げるやうな結果になるに違ひないと考へられた。そこで私は、當面、わが無産階級に最も必要だと考へられる「國家論」と「政黨論」等の問題を取扱ふことにした。だが、それだけでさへ、かなり説明を簡単にせざるを得なかつた。しかも、取り扱つた問題の性質上、遺憾ながら、直裁明瞭なる表現を用ひることの出来なかつた場合が非常に多かつた。豫め諸君の御諒解を乞ふ次第である。

本論

第一章 國家

一 國家の本質

● 國家論の重要性

無産階級の闘争が、ブルジョア政權への闘争として、即ち政治闘争として、刻々、現實に展開されつつある今日、國家とは何ぞや、その本質如何、といふ問題は、無産階級にとつては、最早や、單なる理論上の問題ではない。それに對する明確なる認識なしには、現下の階級闘争は一步も進展せしめ得ないであらう。今では、闘争の凡ゆる場面に於て、國家權力に對する明確なる認識が、現實に要求されてゐる。

「一九一四—一八年の戦争は國家權力に關する問題を、のつびきならぬ問題として提起した。

戦争以前にはマルクス主義陣営内においてすら、比較的濃厚なマンチエスター的色彩を帯びた意見がはびこつてゐたのに引きかへ、帝國主義國家が數百萬の人間を歴史の渦巻の中に投じて國家自身が經濟的要因として非常な意義を有してゐることを一舉に暴露した瞬間から、國家權力の解剖が、理論的および實際的討議の當面の問題となつてゐるの見る。」(「プハリン」轉形期經濟學)

無産階級の政治學は、それ故に、當然この問題の究明から着手されねばならない。ところが、一方、支配階級の側からも、同一の社會的根據から、現在、この問題に關聯した様々のエセ社會科學が、續々として再生産されつゝある。それらは、大部分は古來の政治學說を當世風に焼直した様々の政治學說として現はれ、一部分は、外形のドエラさと内容の貧弱さとを、その最大の特徵としてゐる例の「新理想主義」の國家論として現はれてゐる。それらすべてのエセ社會科學の歴史的役割が、現下の帝國主義的ブルジョア政治の巧みなる合理化に在る事は、言ふまでもあるまい。それらのエセ社會科學は反動政治の武器として使用される。それらは、單に一個の「學術」として存在せしめられてゐるだけでなく、更に一層通俗化されて、不斷に民衆の間に散布さ

れてゐる。それらが、傳統的迷蒙と結びつくとき、一般民衆は、ブルジョア・イデオロギーの影響下に縛りつけられる。

○ マルクス主義國家論の徹底とエセ社會科學の克服とは、無産階級の政治闘争に不可欠なる一部分である。私は、先づ最初に、古來の様々の非科學的國家論を簡單に批判し、その後で、マルクス主義の國家論を、比較的詳細に説述したいと思ふ。

b 在來の國家論の性質とマルクス主義國家論の性質

國家は階級支配の機關として生れた權力の組織である。國家の最大の標識は、エンゲルスが明確に立證してゐる通りに、「公權力」の存在にある。古來幾多の國家論が産出されたが、それらの中心的努力は、常に、この階級支配のための「公權力」を、如何にして合理化するかの特點にあつたと云ひ得られる。國家論の歴史は、明かに、「主權」——在來の政治學では、支配階級の組織的權力をかう呼んでゐる。——の禮讚史である。

だが、かういつたからといふて、それは必ずしも、古來の國家論の凡てが、最初から、常に、その當時の支配階級の御用學說として生れたものだといふことを意味してゐるものではない。古

來の國家論の中には、勿論、その當時の支配階級への反抗思想として生れたものもある。たとへば、第十八世紀の「社會契約」の學說の如きは、明かに、封建君主に對する革命思想として展開されたものである。當時の革命家たちは、彼等自身の國家論を、「永遠の眞理」であり、全民衆を解放するための武器であると考へてゐた。問題は、それらの學說が、當時それを主張した革命家たちのさうした意志にも拘らず、結局、新たな階級支配を合理化するための武器となつたのは何故か？ といふ點にある。それは、最も簡単に言へば、凡ての思想が歴史の中から生れたものであつて、時代の制約を超越することを得ないものである、といふところから來てゐるのである。第十八世紀の革命家たちが、全人類の利益と考へてゐたことが、實は新興ブルジョアジーの利益であつたとしても、それは、勿論、當時の革命家たちの責任ではあり得ない。在來の歴史は階級支配興亡の歴史である。その間に生じた幾多の國家論が、たとへ、最初、如何にそれが、革命的性質を帯びて生れ出たものでも、結局、階級支配の合理化のために利用されざるを得なかつたのは、たしかに、歴史的矛盾である。

だが思惟と現實との間の、この歴史的矛盾の解決は、プロレタリアートの發生によつて、今や、可

能になつた。プロレタリアートこそ、自らの階級を解放すると同時に全人類を解放することを、自己の歴史的使命としてゐるところの唯一の階級である。これが、プロレタリアートの科學であるマルクス主義が、常に嚴重に階級利害に立脚しつゝ、しかも、階級支配を揚棄するための眞の科學であり得る所以である。國家論は、マルクス主義政治學に至つて、始めて眞の科學として歴史に登壇するに至つたのである。

○ 中世紀の國家論—神權說

古代の國家論は省略するとして、先づ、勃興期に於けるブルジョアジーの國家論に直接關係ある中世紀の國家論から始めることにしよう。

中世紀の國家論は、君主と法王との專制支配を合理化するための國家論である。普通に中世紀と呼ばれてゐるのは、第五世紀の中葉から第十六世紀の初頭までの期間である。この期間に於ける政治的支配は、地主の農奴にたいする支配である。その形式は、所謂封建的專制支配である。當時の大地主は、先づ第一に、各地方の國王である。彼は自ら老大なる土地を所有してゐた。國王の下には封建諸侯がゐる、大小の領地を所有し、更にその下には、多くの武士どもがゐる、そ

れらもまた、それぞれに領地を所有してゐた。それらの領地には、必ず多くの農奴が附屬せしめられてゐたのである。

一方、國王の外に、更にそれらとは多少毛色の異つた大地主がゐた。ローマ・カトリック教會（註）がそれである。それは、それ自身に於て、一種の封建王國を形成してゐたが、同時に他の諸王國に對しても様々の勢力を及ぼしてゐた。當時のローマ・カトリック教會の政治的地位をエンゲルスはかう、説明してゐる。

「封建制度の國際的大中心は、ローマ・カトリック教會であつた。それは、封建的西ヨーロッパを、内部でのあらゆる闘争にも拘らず、一の大政治組織として結合せしめた。それは、マホメット教地方と分離派のギリシヤ教會とに對立してゐた。ローマ・カトリック教會は封建制度に神聖なる後光を附與した。それは、封建的標本に倣つて自分自身にも位階制度を組織した。そして、特に、それは、カトリック教全土の優に三分の一を所有してゐたことによつてあらゆる封建君主の内の最大のものであつた。」（エンゲルス「空想的・科學的社會主義」序文）
これら二色の大地主の専制支配が、當時の學者達によつて、どう理由づけられてゐたか？

先づ國王側の學者連中の言ふことから聽かう。彼等はかう言ふ。

神は（先づ第一に神様だ！）全世界を作り給うた。國家も神の作り給うたものである。神は國家を支配せしめるために、その代理人をお遣はしになつた。それが國王である。されば國王の權力は神が與へ給うたものである。いやしくも神を信する以上は、國王の支配には絶対に服従すべきである。國王が如何なる政治を行はうとも、それに對して兎や角いふことは神に對する冒瀆である。國王の人民に對する支配は神に對してだけ責任を負ふものである。（註）大體かういふのが政治學史上に有名な君主神權説である。

（註）この説は、最初、諸國王の上に位してゐた神聖ローマ帝國皇帝の權力を説明するために用ひられたものであるが、皇帝の權力が衰へてからは、諸國王の權力に關して用ひられるやうになつた。

かうした思想に更に輪をかけたのが、法王側の學者達の主張である。彼等は、最初のうちは、かう言つてゐた。神は、人類の精神的生活を支配せしめるために法王を、肉體的生活を支配せしめるために國王をお遣はしになつた。法王も國王も共に神の代理人である。と。ところが法王の勢力が増大されて行くに従つて、彼等はかう言ひ出した。

神は、(萬事が神様だ!) 國家を作り給うた。だがそれは、多くの人間的罪惡が神の作り給うたものであるのと同じ意味に於て神の作り給うたものである。國家は、本來、罪惡的存在である。だが、多くの人間的罪惡が教會によつて聖化されるのと同じやうに、國家も教會の支配下に置かれて神聖なる目的を遂行するやうになれば、神の意思に適ふやうになる。即ち惡魔の王國(Civitas Dei)が神の王國(Civitas Dei aboli)になるのである。それ故、國王は法王の下に隸屬せしめられなければならない。法王は神の代理人として凡てを支配するものである。と。さつとかういつた調子である。

當時の「人民」は、かうした大思想(?)を、大地主の手先どもから、不斷に注入されてゐたのである。諸君は、これらの思想が餘りに馬鹿々々しいので一掃されたであらう。だが、我國にも、これと親類すじの學說(?)を臆面もなく述べ立てゝゐる先生が、現に帝大あたりにはつゝゐる。一見時代錯誤のやうだが、よく考へてみれば、帝國主義ブルジョアジの専制時代には至極よさわしい學說だ!

d 勃興期に於けるブルジョアジの國家論—社會契約論

勃興期に於けるブルジョアジの國家論は、ホッブス、(註一)ロツク、モンテスキエ等を経てルソーに至つて完成された「社會契約」の理論によつて代表されてゐる。第十八世紀に於ける「社會契約」の理論は「主權在民」の學說である。それは、何よりも殊に、封建君主の専制支配に反抗して立つた當時の勃興ブルジョアジの革命思想である。エンゲルスは、第十八世紀のフランスの社會思想家たちの意氣込みを左の如く述べてゐる。

「フランスに於て、來らんとする革命のために人心を用意した大人物たちは、彼等自身、極端なる革命家であつた。彼等は、如何なる種類のものであらうと、外部からおしつけられた權威は、一切否定した。宗教、自然科學、社會、政治制度、その他、ありとあらゆるものが、最も假借なき批判を蒙つた。すべてものが、理性の審判席の前で自己の存在を理由づけるか、さもなければ存在をやめて了はねばならなかつた。理性が凡てのもの唯一の尺度となつた。……在來のあらゆる社會形態や國家形態が、あらゆる傳來の舊思想が、不合理だとして、ガラクタ小屋へ投りこまれて了つた。世界は、從來は偏見によつて導かれた。過去に於ける一切の事物は、ただ憐憫と侮蔑とのみ値するものである。今や初めて、日の光が、理性の王國が現はれ

た迷信、不義、特權、抑壓等は、永遠の眞理、永遠の正義、自然に基く平等、人間不可分の權利等によつて置き代へられねばならぬ」(エンゲルス「空想的・科學的社會主義」(傍點は引用者) エンゲルスのこの短い論述の中に、當時の社會思想家の態度と當時の社會思想の根本的特徴とが鮮かに描き出されてゐる。エンゲルスが最後に擧げてゐる「自然に基く平等」および「人間不可分の權利」——「自然權」(Natural right) もしくは「天賦の人權」と言はれてゐるもの、個人の「生命」と「自由」と「財産」等の權利が、その内容の重なるものである。——等の思想こそ、當時のあらゆる理論の出發點であり、ブルジョア・デモクラシーの基礎概念である。この自由平等の思想は、速く第十六世紀の頃から、あちらこちらで提唱され始めたものであるが、ブルジョア革命が間近に迫つて來るに隨つて、フランスを中心として、全ヨーロッパへ、あたかも燎原の火のやうな勢ひで、燃え擴がつて行つたものである。(註二)

(註一) ホツプス(一五八八—一六七九)は、彼自身は、イギリスの王黨派の人物であるが、彼が國王の專制支配を合理化するために編み出した社會契約の理論は、フランスへ移植されてのち、第十八世紀の革命家たちによつて徐々に修正され、彼の意圖とは反對に「主權在民」を主張するための理論として發

展せしめられて行つたのである。

(註二) 自然權の思想が生み出され發展せしめられて行つた當時の階級對立の状態を茲で論述すべきであると思ふが、紙數の制限のため、やむを得ず省略した。

勃興期のブルジョア階級の國家論として有名な「社會契約」の理論は、この「自然權」の思想を基礎として築き上げられたものである。今、その代表的著述の一つであるルソーの「社會契約論」——所謂「民約論」——によつて、この理論の内容を略述しよう。彼の學說の基本的部分を要約すると、かういふことになる。(註)

(註) ルソーの議論は、人類の歴史が「さうであつた」といふのではなく、「さうあるべきである」といふのであるが、それにも拘らず、彼の議論は、常に「あつたべきだ」といつたやうな奇妙な調子で進められてゐるのである。それから念の爲に附け加へて置くが、ルソー等は社會と國家とを區別せずして概念してゐたのである。

一「人は生るゝや自由である。自由は天賦の人權であり、人間不可分の權利である。『自由の拋棄は人たる性質の拋棄であり、人類の權利の拋棄であり、又實に人類としての義務の拋棄である。』と先づ彼はかう言ふ。

二「然るに、人は到る處に於て鎖に縛られてゐる。」これは何故であるか？ ルソーは、この現實の事業に直面して、その原因を科學的に究明してみようとはしなかつた。彼は、さうした矛盾を、「理性」によつて肯定し得るところの例の「眞理」によつて、合理化しようとした。勿論それは、當時の封建君主の專制支配を合理化しようとしたためではなく、逆に、彼の發見し得た「眞理」によつて、專政支配の不合理を打破しようとすることを目的としたものではあつたが。そこで、彼の發見した「眞理」は、この矛盾を、どう理由づけてゐるか？ 彼の言ふところを聞かう。――

三「惟ふに人類は、自然的狀態に於て其身を保存するを妨ぐる障害が起り、此の障害の力の方が、各個人が其自然的状態に其身を置かんが爲に用ひ得る方法よりも有力なるが如き時代に達したのであらう。斯くの如き時代に達したとしたならば、最早、人類は原始的状態を維持することは出来なくなり、若し其の生存の方法を更へなかつたならば、種類の全滅を見るの外はないだらう。」

四「そこで、人類は、「その障害に打勝つ方法」としては、力を綜合して其の合計を作り、之を動かすに一の指導的なる力を以てし、而して之が動を圓滑にして、以て障害を征服するより外はないのである。」

五「ところで、「斯くの如き力の和は、多數人の結合に依つてのみ出来るのであるが、併し其各人の力と自由とは、實に彼が其身を維持するに缺くべからざる道具である以上、彼は如何にして其身を害せず、又其第一務である所の自己に對する願慮を犠牲とせずして、其力と自由とを提供し得るか？」これが、ルソーと當時の社會思想家のすべてが解決しようとした問題である。

六「そこでルソーは考へた。そのためには、「吾人は社會の一形式を見出さねばならぬ。其形式は、各員の協同の力を以て團體各員の身體財産を防護せしむると共に、協同に加入せる各員は協同に拘らず、唯自己にのみ服従し、以前と同様に自由に居ることが出来るものである。」と。ルソーの理論は、ついに「理性」によつて肯定し得る「社會の一形式」を發見した！

七「彼の理論は、いまや、人類を、自然的状態から、社會的秩序ある状態へ入り込ませようとしてゐるのであるが、ルソーの考へによると、「社會的秩序は神聖なる權利である。しかし斯か

る権利は自然には出来ない、……故に契約を基礎として出来るものと云はねばならない。そこで問題は、斯かる契約が如何なるものであるかを知らねばならぬ。」といふのである。

八では、どういふ契約が爲されたべきであるか？ 「社會契約は、其本質と云ひ得ざる不純なる部分を取除きて考ふれば、結局次の如き主旨に要約することが出来る。即ち「吾等の各自は、共同に、其身體と其總ての力とを共同意思の最高命令の下に置き、其代りに、吾々は、全體の個々の分子として自己の構成部分を獲得する」と云ふことになる。」

九 「社會契約はかくて、其契約の結果として、契約の當事者たる各個人の代りに、之に参加したる總ての者を其分子とする精神的且集合的な團體を作り、此團體は、宛かも此契約から其統一と共同の自我と生命と意思とを得るのである。かくの如く總ての個人が分子となり、其結合によつて出来上つた此種の公共的人格は、以前は都市と稱せられたが、現今では「レビエブリック」又は政治團體と云はれ、其構成員からは、其團體が受動的である場合には國家と呼ばれ、能動的である場合には主権者と呼ばれ、他の同種のものに比較する場合には、力と呼ばれてゐる。又其團體員は、全體としては人民と云ひ、最高權力に與かる者としては公民と云ひ、

國法に服従するものとしては臣民と呼ぶ。」と言ふのである。これで大體ルソーの理想國家が出来上つたわけであるが。ルソーによれば「自然の状態から國家の公民に移る」といふことは「自然の平等を破るものではなく、却つて反對に、自然が人に與へた肉體的な不平等を廢し、之に代へるに倫理的・法律的平等を以てするものである。従つて人類は、膂力、智力に於ては、不平等であるけれども、彼等の總ては、契約と權利とに依つて平等となるものである。」のであり、「自然の自由を提供してそれを、法律上の自由として、再び國家から受取ることになる」のである。何と素晴らしいことではないか！ 我々は、最後に、彼の「主權在民」説の理論的根據を、もうすこし詳しく聞くことにしよう。

十 ルソーによれば「主權とは、共同意思の實行に外ならぬものである。」ところで、「共同意思」とは、前節に於て彼が言つてゐる通りに、各個人が社會契約によつて作り上げた「精神的且つ集合的團體」の意思なのであるが、それは、團體を構成する各個人の「特別意思」でもなく、それらの總和であるところの「全體の意思」でもなく、「特別意思から互に相殺すべき過不及の意思を取り除く」ことによつて、「其剩餘の總計」として出来上つたところの「常に正しく

又常に公共の利益を目的とする」といふ素晴らしく有り難い意思なのである。ところで、この意思の主體である「精神的且つ集合的な團體」は、この意思の實行者としての觀點からは、主權者と呼ばれるのであるが、「主權者は、唯これを構成する個人が集つて形成してゐるものである。」から「各個人は二重の關係に立つことになる。即ち主權者の一員として他の各個人に對し、國家の一員として主權者に對することになる。」といふのである。結局、ルソーによれば、主權は、社會契約によつて作り上げられた「精神的且つ集合的な團體」そのものにあるのであつて、それは單一絶對のものであるから、分割したり、譲渡したりすることを得ない、また、それを、法王とか國王とかといつたやうな個人に譲り渡すなどといふことは、絶對に在り得べからざることだといふのである。(「民約論」からの引用は、市村、森口兩氏の譯文による。)

以上で、勃興當時のブルジョアジエの國家論が、どんな性質のものであつたかは、大體明かになつたと思ふ。社會契約説は、神權説などに比べると、遙かに優れた理論である。特に「共同意思」を持ち出してきて、國家の主權を説明したところなどは、超階級的國家論としては、たしかに、傑作の一つである。それが、封建君主に對するブルジョアジエの革命的武器として、偉大な

る働きをしたことも首肯できる。しかし、それは、どこまでも一個の空想的理論に過ぎない。したがつて、現實の國家の説明としては、殆んど何の價値も無いものである。我々としては、當時の社會思想家たちが、封建的專制支配から人類を解放するために、如何なる權威をも恐れず、敢然として闘つた態度は、大いに學ぶべきであると思ふが、彼等の非科學的空想は、その歴史の意味によつて重要視する以外には、それが、現在、ブルジョアジエの階級支配を合理化するための理論として利用されてゐる以上——勿論、様々に變形されてではあるが、——それを徹底的に克服しなければならぬのである。

再び、エンゲルスの言葉を借りて、この「理性の國家」に別れを告げることにしよう。エンゲルスは、先きに引用した一節に續けて、かう言つて居る。

「然し、我々は今知つてゐる。この理性の王國はブルジョアジエの王國を理想化したものに過ぎなかつた。この永劫の正義は、ブルジョアの正義として實現された。この平等は法律の前に於けるブルジョアの平等に歸着した。ブルジョアの所有權は、最も根本的な人權の一つとして宣言された。そして理性の國家、ルソーの社會契約説が實現されたが、それはたゞブルジョア

的民主共和制としてのみ實現され得た。斯くて第十八世紀の大思想家たちも、そのすべての先行者たちと同じく、それぞれの時代から荷はせられた制限を超越することは出来なかつたのである。(ヘンゲルス、前掲書)

e ヘーゲルの國家論

現在、ブルジョアジーの階級支配を合理化するために、様々の國家論が横行してゐるが、それは、殆んど凡てが「社會契約説」——それは、普通に「自然權説」もしくは「自然法學」の名で呼ばれてゐる。——か、もしくは、ヘーゲルの「理想主義國家觀」かの流れを汲んだものである。現代のブルジョア政治學は、大量的に再生産されたヘーゲルとルソーとの縮刷廉價版に過ぎないのである。だから我々は、ルソーの國家論とヘーゲルの國家論とを知ることによつて、現代のブルジョア國家論の理論的根柢が、どんなものであるかを、大體知ることが出来る。我々は、すでにルソーの國家論を研究したから、こゝでは、更に、ヘーゲルの「理想主義國家觀」を研究することにしよう。

ヘーゲルの國家論は、理論としては、明かに、ルソーの學說の影響下にあるのであるが、ヘーゲルの國家論の中には、ルソーのそれの中に見られたやうな革命的情熱は、已に全く姿を消してゐる。

それは、當時のプロシヤ王國によつて、喜び迎へられた程、國家を讚美したものであつて、古來の如何なる學說もが爲し遂げ得なかつた程、國家を神秘化し、崇嚴化してゐる。それは、古代の印度哲學に見られるやうな、不可思議なる國家禮讚の頌歌である。

ヘーゲルの國家論は、彼の廣大なる哲學體系の一部を形成してゐるものであつて、徹頭徹尾、例の唯心論的辯證法によつて貫かれてゐる。それは、たしかに、人類の生んだ最大級の頭腦の所産ではあるが、結局、一個の偉大なる空論に過ぎない。

ヘーゲルによれば、國家は「倫理的觀念の具顯」であり「理性の影像および具顯」である、といふのであるが、ヘーゲルが倫理的觀念 (Sittlichkeit) とか理性 (Vernunft) とか、等々と言つてゐるのは、彼がまた別に、それぞれの場合に應じて、世界精神 (Weltgeist) とか、神の意思 (Gotteswillen) とか、絶対精神 (Absoluter Geist) とか、客觀的精神 (objektiver Geist) とかといつてゐると、結局、同義である。この絶対精神なるものは、ヘーゲルによれば、永久の昔から——

何處か知らぬが——現存してゐるばかりでなく、それはまた、存立してゐる全世界の本統の生ける靈魂なのである。この絶対精神は、すべての豫備階段——彼は、「論理學」の中で、それを詳細に論じてゐる。——を通つて、自己そのものに發展する。ついで、この絶対精神は自己を「外化」(entassein)して「自然」に轉化する。そして、自然の中では、自己を意識することなしに、自らの必然の姿を取つて、新たな發展をなし、遂に人間の中で再び自己意識に到達する。この自己意識は、今度はまた、歴史の中で、再び、荒削りから段々と仕上られるといふのである。だから、ヘーゲルにあつては、自然および歴史の中に現はれる辯證法的發展は、何處か知らぬが、永久の昔から、しかし、いつでも、人間の頭脳とは没交渉に行はれてゐるところの、この絶対精神の自己運動のステロ版に外ならぬのである。

ところで、ヘーゲルによれば、荒削りから段々と仕上けられて行くところの、この歴史の中には、「倫理的觀念」のより高き形態への發展段階としての三つの段階が、即ち、家族、市民社會、國家、といふ三つの段階が包括されてゐるといふのである。ところで、第一の發展段階である家族の中では、この「倫理的觀念」は、なほ明確に意識されてゐるのではなく、たゞ、本能的に現は

れてゐる。「家族」に於ては、その總員が、彼等自身を單一體として感得する。そして、その中の個々人は、その單一體のメンバーとして自分自身を意識する。そして、「愛」がそれを貫いてゐる。ところで、「市民社會」が「倫理的觀念」のより高き發展段階として現はれる。だがそれは單純なる發展ではなくて、「家族」に對するアンティ・テーゼ(反對物)として現はれるのである。(註)したがつてそれは、「倫理的觀念」のより高き發展段階であるが、しかしそれは、「道德の形態」に對する反對物である。「家族」と言ふ單一體の解體として現はれた「市民社會」に於ては、個々人は自分自身だけを考へる。そこで個々人をつなぐものは愛ではなくて利己心である。市民社會は、ヘーゲルによれば「社會的諸要求の形態」である。そこで、今度は、道德觀念の更により高き發展段階として、「國家」が現はれる。「國家」は「家族」の否定としての「市民社會」の否定なのである。即ち「家族」と「市民社會」の綜合として現れた「道德の最高形態」なのである。即ち、國家は、「倫理的觀念の具顯」であり、「理性の影像および具顯」であり、しかもその最高段階のものだといふのである。

(註) このところは、辯證法の説明なしには解かりにくいと思ふが、茲で、それをしてゐることが出来る

い。「無産者自由大學」第十講座及びアホリーリン著『レーニンの辯證法』(河上肇氏譯)を見て頂きたい。そこで、ヘーゲルの例の有難いお説教が始まる。即ち、ヘーゲルによれば、國家は倫理的觀念の最高の具顯であるから、それに服従するといふことは、各個人の最高の倫理的義務であるといふのである。(註)

(註) ヘーゲルによれば、倫理的觀念のより高き形態への發展であるところの、家族から國家への發展過程は、それらが現實の歴史に現はれた順序を示すものではなくて、それは倫理的觀念の超時間的發展過程を示すものだ、といふのである。だから、歴史的には、國家の方が市民社會より先に現はれてゐるのであるが、ヘーゲルは、それを問題にしない。

元來、ヘーゲルの哲學によれば、『自然』なるものは、觀念の單なる『外化』であつて、時間上の發展の能力がなく、單に空間上に自己の多様性を擴大し得るだけである。自然は、自己の中に包蔵してゐる凡ての發展階段と同時的に且つ並立的に展開してゐるものであつて、絶えず同一の過程を永久に反復するやうに運命づけられてゐるものであるといふのである。ヘーゲルは、あらゆる發展の根本條件たる時間を超えて、空間上の——そして時間外の——發展といふ莫測の事象を、單に自然の上に課してゐるだけでなく、それと同一の非歴史的な見解を、『歴史』の領域の上にも用ひてゐるのである。

ヘーゲルの『理想主義的國家觀』の論廓は、これで大體明らかになつたと思ふ。我々は、これ以上ヘーゲルにかゝはつてゐるに、寧ろ、すみやかに『マルクス主義國家論』の研究に移らう。(註)
 (註) 右の説明中、ヘーゲルの哲學に関する部分は、全部、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』(佐野文夫氏譯)に據つたものであるが、理路の混亂することを恐れて、エンゲルスの文章を直接引用した場合にも引用符を用ひなかつた。

f、マルクス主義の國家論

我々は、愈々、マルクス主義の國家論を研究するところまで來た。マルクス主義の國家論は諸君が已に知つて居られる通りに、歴史上の現實の國家を取り扱つたものであつて、在來の一切の國家論と全然その性質を異にする。そこには、最早空想の一片をだも認め得ない。それは、それ故にこそ、現實に關争しつゝあるプロレタリアートの現實の武器として役立つてゐるのである。我々はこの國家觀の簡潔なる説明をエンゲルスの次の言葉に發見することが出来る。

「……國家は決して外部から社會に押しつけられた權力ではない。同様にそれは、ヘーゲルの主張する如く、「道義的觀念の現實性」、「理性の容姿及び現實性」ではない。それは寧ろ一定の

發達段階における社會の生産物である。それは、この社會が自分自身との解決しがたき矛盾にからまり、融和し難き對立に分裂し、そしてこの對立を除去する力がないといふことの告白である。然しこの對立、相對抗する經濟的利害を有する諸階級が、自己及び社會を無益な鬭争のうちに滅亡させないために、軋轢を妨止し、「秩序」の埒内に抑制すべき外觀上社會の上に立つ權力が必要となつた。そしてこの、社會から出で、而もその上に位し、それから次第に無關係になりつゝある權力が、國家である。』（エンゲルス「家族、私有財産及び國家の起原」西雅雄氏譯、第三〇九頁）

即ち國家とは社會の外にある何等かの權力が社會に押し及んだものではなく、社會内に於て、一の階級が他の階級を支配するために組織した權力であり、しかもそれは、一度組織されると社會から出で、而かも社會の上に第三者的外観をもつて、君臨する權力だといふのである。國家は社會が一定の發達段階に到達して始めて發生する。何となれば、社會の生産力が未だ發達せず各人が自らの生活資料を僅かに生産せるが如き時代に於ては、搾取といふことが成立せず、從つて搾取を維持す可き政治的の支配といふ必要も起り得ないのである。然るに生産力がやゝ發達し

て各人が各自の生活資料より少し餘分に生産することが出來、而かもその生産物の餘剰が各人をして一切の仕事を自ら處理するだけの餘裕を與へない段階に於ては、必然に、一定の人間に共通的な事務の處理を委託するに至る。即ち生産力の不足のために社會的に分業が生ずるのである。之が階級發生の端緒となり、續いて奴隸制度が發生し、共通事務の處理を委託されたものは、委託される時には既に他のものに比して經濟上の優越を持つてゐるのであるが、その地位を利用してその地位を固定化して、兩餘の社會員とは異つた階級を構成し、他の階級を支配するためにいろいろと支配の機關を作る。搾取され、支配される階級が反抗する。即ち階級鬭争が起る。處が此の兩階級間の鬭争が甚だしくなれば共倒れになつたり、支配階級が倒されたりする。そこで成る可く被支配階級のさうした反抗を抑へつけるために、宛かも支配階級と直接に關係のない様に見える、云はゞ第三者的な權力が必要となつて來る。勿論此の第三者的な權力は、唯外觀だけが第三者的なだけであつて、その實質に於ては常に經濟上の優越階級のための權力である。そして此の權力が強くなるに従つて益々社會から離れた、超階級的な權力の如き外觀を呈し、傲然と社會に君臨するに至る。之が即ち國家だといふのである。

國家を階級支配の機關であり、社會から生じ社會の上に君臨する權力だ、といふマルクス主義の説明を聞くと、國家を餘りに馬鹿にした議論だと云つて驚く人があるかも知れないが、それが歴史上の事實なのだから仕方がない。現在の所謂ブルジョア國家がプロレタリアートその他の被支配階級に對して何ういふ態度を採つてゐるかを心して見るならば、右の言葉が眼前の事實によつて裏書きされてゐるのを感じるであらう。以下、國家が如何にして發生したか？ 且つ如何にして××するか？ の問題に就いて、エンゲルスの説明を聞かう。

二、國家の發生

a、古代共產社會——無國家の社會

前項に於て私は、國家は社會の一定の發達段階の生産物であり、それが、搾取階級および被搾取階級への社會の分裂に起因すると云つた。

國家が發生する以前の人類社會は血族を紐帶とする結合團體即ち氏族、大氏族、種族を基礎と

する共產社會であつた。そこには私有財産もなく、従つて搾取—被搾取、支配—被支配の關係もなかつた。勿論生産力は非常に幼稚なものであつたから當時の共產主義社會は、或る人の云つた如く、「富の共有に非ずして貧の共有であつた」かも知ぬが、そこには何等の内部的對立が見られなかつた。處が人類の生産力が次第に増大されに従ひ人口の増大に伴ふ土地の狹隘が感ぜられ、一定の土地を自分のものとして占有する私有財産が發生した。この私有財産の觀念は、土地擴張と共に他の氏族團體との交渉が開始され、その交渉——それは概ね土地の爭奪のための闘争となつたが、その闘争によつて獲得した土地は獲得した人間が占有すると云ふ事情から、益々助長されたのであつた。こゝに於いて同一氏族社會の中に於いても、富める者と貧しき者との差異を生じたのであるが、それは未だ階級發生といふ處までは發達しなかつた。

b、共通事務の委託

處が生産力がやゝ發達するに従つて共同事務だけがある人間——それは前記の事情によつてや

や富める人間に委託することになつた。これが階級發生の第一歩であつた。

生産力が發達し、人口が稠密となつて來るに従つて對内的にも對外的にもより緊密な團結を必

要とし、近親種族の同盟に至る處に必要となり、それらが民族として團結し、従つてその領土の融合が必要となつて来る。そして民族の軍師が缺く可からざる常設の官職となつて來、協議會、民會等の民族社會の機關が出來上る。對外交渉の繁くなるにしたがつて、軍事的組織が發達し、戰爭が主要なる職業となつて來たり。又掠奪戰爭は最高軍師及び下級指揮官の權力を著しく高める結果を招來する。同一の家族から後繼者を選出する慣習は、殊に父權制の發達と共に、徐々に認容される事になる。この認容されたる慣習は次第に「認容」どころではなく、積極的に當該家族から「要求」されるに至り、最後には、強制的に世襲制にされて了ふ。こゝに世襲××制及び世襲貴族制の基礎が置かれることとなる。

c、農業と手工業との分業と奴隸制度の發生

この共同事務の委託と相並んで階級發生に大いに與つて力があつたのは、農業と手工業との間の分業である。この分業は更に生産力を發展せしめ、従つてその間に富者と貧者との對立を甚だしからしめたが、この階級發生に對して一つの重要な原因を與へたものは、奴隸制度である。人間の生産力が未だ發達しなくて、生産者自身の生活資料しか生産しない時代では、他の團體

と闘争してその成員を捕へた場合に於ては、勝者群はその敗北者群の肉を喰つて了つたり、その所有品を全部略奪したりしたのである。ところが、生産力がやゝ發達して、一人の人間は自己の生活資料よりもヨリ以上の生産をすることが出來ると、即ち經濟學上の言葉で云へば、その剩餘労働を搾取する餘地が出來ると、捕虜を殺して了ふよりは、生かして置いて搾取した方がよい。かくして捕虜を殺さずして奴隸とすることが始まつた。それは、掠奪を一時的にする代りに、それを永續的に小刻みに行ふのと同じ譯合になつたのであり、しかもそれは一時的掠奪と同様の効果を、それよりも一層能率的に擧げ得るといふ結果となつたのである。この奴隸と主人との階級對立は、主人——即ち市民内部の階級對立と並行して行はれたものであるが、階級對立、階級争、従つて國家機關の充實を促したといふ點に於ては、この方が、基本的なものとなつたのであつた。

「すべての部門——牧畜、農業、家内の手工業——における生産の向上は、人間労働力に、その生計に必要なよりも大なる生産力を產出する能力を與へた。それは同時に氏族、世帯團體又は單一家族の各成員の負擔する、日々の労働量を増大した。新しき労働力の参加が望ましいこ

ともなつた。戦争はそれを提供した——俘虜は奴隷に轉化された。最初の大なる社會的分業は、その勞働の生産性即ち富の向上と共に、またその生産分野の擴大と共に、與へられた歴史的全條件の下において、必然的に奴隷制を齎らした。最初の大なる社會的分業からして、主人と奴隷、搾取者と被搾取者の二階級への、社會の最初の大なる分裂が發生した。(エンゲルス、前掲第二八一頁)

d、國家機關の發生

斯くの如く階級が發生し、奴隷制が移入され、且つ外界との交渉の展開による外來種族の混入、産業殊に航海、商業等の發達によつて、氏族社會の内部が益々複雑化して來ると共に、血族を單位とする組織の維持が困難となり、始め共同事務の委託を受けて或る官職についた家族は益々その優越を固定化し、その優越維持、階級闘争抑壓のために、權力機關を持つに至る。この機關は、先づ警察、次ぎに軍隊の形を採るのである。然して、以前の民族社會に於ては、全民衆の武装を以て社會の安寧を保つてゐたのであつたが、この段階に來れば、全民衆と全然無關係な、
○—否な全民衆と對立した武装した特殊の集團を發生し、それに牢獄等の強制道具までが附加さ

れて來る。かくして國家が發生するのである。之れについて再びエンゲルスの口を借りよう——「……搾取階級及び被搾取階級への、また支配階級および被抑壓階級への、社會の分裂は、これ從來の生産の發展程度の低くかつたことの必然の結果であつた。社會の總勞働が萬人のカツ／＼の生存に必要なものをゴク僅かしか越えないほどの果實しかもたらさない間は、従つてこの勞働が大多數の社會成員のあらゆる又は殆んどあらゆる時間を必要とする間は、社會は必然に分裂せざるを得ない。すなはち、この徹頭徹尾勞働に繫縛された大多數者と並んで、直接の生産的勞働からは免除された一階級が構成され、それが勞働の指導、國家の事業、法律、科學、藝術等の如き社會の共同事務を取り行ふことになる。されば分業の法則こそは、階級分裂の根柢をなすものにほかならぬ。とは言へ、それは決して、かゝる階級分裂が暴力や掠奪、詐欺や瞞着によつて行はれたものではないが、しかし一たび支配階級が鞍上に尻を落ちつけるや否や勞働階級を犠牲としてその支配權を固め、社會的指導を變じて大衆の搾取たらしめることを決して誤まらなかつたといふことと、矛盾するものではない(エンゲルス、「反デューリング論」河野、林氏譯第四八六頁)。

「氏族制度は何等の内部的對立を知らなかつた社會から發生したものであり、そしてまたかくの如き社會にのみ順應してゐたのである。それは輿論以外には何等の強制手段を持たなかつた。然るにこゝに、その全體の經濟的生活條件によつて自由人と奴隸、搾取する富者と搾取される貧者とに分裂しなければならなかつたところの社會、かゝる對立をもちや再び融和することが出来なかつたのみではなくて、それを愈々益々頂點に追ひやらねばならなかつたところの社會が發生した。かういふ社會はたゞかゝる階級相互間の不斷の公然の鬭争においてか、又は外觀上では相抗する階級の上に立ちつゝ、彼等の公然の鬭争を壓迫し、そして階級鬭争をば精々經濟的領域において、所謂合法的形態において、相關はしめるところの、第三權力の支配下においてか、そのいづれかにおいてのみ存在することが出来た。氏族制度は生命を終へた。それは分業及びその結果たる社會の階級分裂によつて爆破された。それは國家によつて置き代へられた。」(エンゲルス「家族、私有財産及び國家の起原」第三〇六頁)。

「古き氏族組織に對して國家は第一に領土に従つて國民を區分することをその特徴とする。血の紐帯によつて形式され且つ團結せる、古き氏族共同體は、吾々が既に見た如く、主として、

それが一定の領土への成員の束縛を前提し而もこれが久しい以前から行はれなくなつたがために、不十分なものとなつた……

「第二の特徴は、自分自身を武装された權力として組織する住民とは、もはや直接には合致しないところの、公的權力の創設である。かゝる特殊な公的權力は、住民の自立的武装組織が階級の分裂以來不可能になつたがために、必要なのである。……それは單に武装された人間のみではなくて、氏族社會が少しも知らなかつたところの、物的附屬物、監獄及びすべての種類の強制的施設より成る。……

「かゝる公的權力を維持するためには、國民の負擔——租税が必要である。これは氏族社會には全く知られなかつたものである……

「公的強力と租税賦課權とを掌握して、今や官吏は社會の機關として社會の上に立つてゐる。氏族制度の諸機關に拂はれた自由な任意的な尊敬は、彼等がそれを得ることが出来た場合においてすらも彼等を満足させぬ。社會と無關係な權力の保持者なる彼等はそれによつて彼等が特殊の神聖と不可侵とを享けるところの、特別法によつて尊敬を拂はれなければならぬ。文明國

家の最もみすほらしい警官でも、氏族社會のすべての機關を合せたよりも多くの「權威」を持つてゐる……」(同上第三〇七—三一二頁)。

④、アテネ國家の例

屢々引用する如く、エンゲルスはその名著「家族、私有財産及び國家の起源」に於て、國家の起源について卓越せる研究をなし、アテネ、ローマ、及びドイツに於ける國家發生の過程を極めて興味深く叙述してゐる。就中、アテネは「最も純粹な最も古典的な形態を示す」ものとされてゐる(前掲第三〇七頁)が、それによれば、アテネは始め氏族制度であつたが、生産力の發達と共に、民會協議會、軍師(一般投票による)を持つこととなつた。處が農業と手工業、殊にアテネは海に臨んでゐたために商業と航海業とが分業となり、これ等の分業が血族團體たるアテネ内部の對立を大きくし且つ外部との交通によつて血族を基準とする統制が困難となつた。そしてテゼウスが制定したと稱せられる制度が移入されたが、それによつて先づ第一にアテネに中央行政機關を建設し、今まで各種族が獨立的に處理して居つた事務を共同協議會に引き渡した。そして之によつて隣接種族を單一民族へ融合せんとする傾向が現はれた。この傾向は血族を基準とす

る氏族制度の破壊の第一歩であつた。第二に氏族、種族の如何を問はず、全民族をユーパトリード(貴族)、ゲオモロイ(農民)、デミウルゴイ(手工業者)の三階級に區分した。そして官職につく獨占的權利を貴族に賦與した。然し乍ら此の區分は、貴族に官職獨占權を與へた外に大した差別を設けた譯ではなかつた。といふのは、この官職獨占の外には、各階級の間は何等の權利の輕重がなかつたからである。

此の三階級の區分は、それ自身としては大した權利の差別を設けたものではなかつたが、之は國家の發生と云ふ點に於いて重大な意味を持つた。即ちそれは、或る家族が慣習的に氏族の官職に就いたことが發展して、この家族に對して當該官職獨占の特權を與へて了つたといふ結果を招致し、且つ、それは暗黙の中に官職獨占の前提條件となつてゐたこの家族の富と結びついて特有の特權階級といふものを作り上げたのである。次にそれは、農民と手工業者との間の分業が血族を紐帶とする古き氏族制度を否認する方向へ作用したことに大いに力があつた。而してこの二つのことは、氏族制度と國家なるものが決して融和す可からざるものである事を示してゐる。即ち國家形成の第一の企圖は、各氏族の成員を特權者と非特權者とに、そして後者を更に二つの

職業的階級に分割して、それを互ひに對立させることによつて、氏族を打破するにある（「エングルス、前掲、第一八七頁」）。

テゼウス制度移入後、ソロンの改革に至るまでの變化は餘りハッキリは分つてゐないが、奴隸制度の大々的採用、それに伴ふ生産力の益々大なる發達、同時に貴族の富の増進、商業殊に航海業の發達、血族觀念の喪失と、職業及び住居を單位とする集團の發達、舊貴族と新商工業者との對立、更らに自由人と奴隸との對立によつて、氏族制度は益々崩壞の途を辿つた。そしてその間に國家は「靜かに發達した」その間の情勢を、エングルスは左の如く叙説してゐる――

「……分業によつて最初には都市と農村との間に、次には種々の都市労働部門の間に作られた、新しき集團は、その利益の擁護のために新しき機關を作り出した。すべての種類の官職が創設された。そしてこの時若き國家は何よりも先きに自己の權力を必要としたが、それは航海を業とするアテネに於てはさしあたり、たゞ、個々の小戦争のため及び貿易船の保護のための、海上權力たり得たのである。ソロン以前の知られざる時代に、ナウクラリアといふ、各種族に十二づゝの、小領土區域が創設された。各々のナウクラリアは一艘の軍艦を備へ、武装を施

し、船員を乗り込ませ、尙ほこの外に二人の騎士をも備へねばならなかつた。この制度は氏族制度に二重の打撃を與へた。第一にはそれが既にものは直接に武装せる民衆の全體と一致せざる公的權力を作り出したことによつて。そして第二には、それがはじめて、親族集團に從はないで、地域的な共同住居に從つて、民衆を公けの目的のために區分したことによつて。」（エングルス、前掲、第一九四頁）

ソロンの改革は、この國家制度の形式に拍車を加へたが、彼れは市民を各々その土地所有及び收穫高に從つて四階級に分け、（奴隸はその外にあつた）第一――第三階級は夫々五〇〇、三〇〇、一五〇メデイムノス（一メデイムノスは約一リツトル）の最低收穫を持つものとし、一五〇メデイムノス以下又は土地を全然所有しないものは、第四階級とされた。第一階級は最高の官職を獨占し、第一乃至第四階級は總べての官職を獨占した。第四階級は民衆の發言權及び投票權を持つてゐるが、總べての官吏は民衆より選舉され、民衆に對して責任を負ひ、又法律は總べて民衆で作られた。軍隊の方面に於ては、第一第二の兩階級が騎士、第三階級が重歩兵、第四階級は輕歩兵又は海兵（多分給料を貰ふ）になることになつてゐた。

この後、一時、官職の獨占權は廢されたが（勿論自由人の間で。奴隸は依然として奴隸であつた）、いろいろの「黨派闘争」を経て、クライスネスの革命（紀元前五〇九年）を以て決定的に氏族制度を清算して了つた。

「クライスネスは、その新しき制度において、氏族及び大氏族を基礎とする古き種族を否認した。その代りにナウクラリアにおいて試みられたところの、單なる住居の場所による市民の區分を基礎とする全く新しき組織が現はれた。もはや血族團體に屬するか否かといふことではなくて、住居のみが決定的のものとなつた。民族ではなくて、領土が區分され、住民は政治的に領土の單なる附屬物となつた……」。

「遂にアテネ國家は形成された。そしてそれは十種族から選出された五百人の議員によつて構成される協議會によつて、また終局においては、あらゆるアテネ市民が出席權と投票權を有した民會によつて統治された。この外にアルコン及びその他の官吏が種々の行政部門及び裁判事務を司つた。執行的權力を有する最高官吏はアテネには存在しなかつた。

「かやうな新制度と、一部は移住者、一部は解放された奴隸よりなる、極めて多數の保護民に

對する市民權賦與によつて、血族制度の諸機關は公的事務から驅逐されて了つた。それらは私的團體又は宗教團體にまで落ちて了つた。然し道德的影響、因襲的觀念及び思考様式は尙ほ長くつゞき、漸く徐々に死滅した……」。

「國家の本質的特徴は國民の大衆から區別された公的權力にある……。アテネは當時漸く國民軍及び直接國民によつて備へられた艦隊を有するに過ぎなかつた。これが外に對して防禦し、また既に當時人口の大多數を形成した奴隸を制御したのである。市民に對して公的權力は先づ、國家と同様に古い、警察としてのみ存在した……。かくてアテネ人はその國家と同時にまた警察をも創設した。それは徒歩及び乗馬で弓矢を携へた眞實の憲兵隊であつて……奴隸より成り立つてゐた。この警吏勤務はアテネ人には極めて恥辱的に考へられた……」。

「……社會的及び政治的制度的基礎となつた階級對立は、もはや貴族と民衆とのそれではなくて、奴隸と自由民、保護民と市民とのそれであつた……」。

「アテネ人における國家の成立は、國家形成一般の特に典型的な模範である。といふのは、それは一面において全く純粹に、外的及び内的暴力行爲の干渉なしに進行してゐるからであり……」。

また他面においては、民主共和国といふ、極めて高度の形態發達の國家を直接に氏族社會から出現させたからであり、そして最後には、すべての本質的の事項が十分吾々に知られてゐるからである。」(エンゲルス、前掲、第二〇〇—二〇五頁)

三、國家の歴史的變遷

1. 國家と階級闘争

右に述べた如く、生産力の不足が社會的分業を生み、社會的分業は階級の發生を促し、階級の發生に従つて階級の對立、闘争は國家を發生せしめた。故に階級ある處、必ず階級闘争あり、階級闘争の生ずる處、必ず國家が存立するのである。

マルクスは有名なるコムニニスト・マニフェストに次の如く云つてゐる。

「總べて從來の社會の歴史(エンゲルス——嚴密に云へば書かれたる歴史である……)は階級闘争の歴史である。自由民と奴隸、貴族と平民、領主と農奴、同業組合の親方と職人、簡単に云へば抑壓者と被抑壓者とが、古來常に對立して、或は隱然の、或は公然の、絶ゆることなき

闘争——それは何時も、全社會の××的變革を以て、又は相争ひつゝある諸階級の共倒れを以て、其の局を結ぶに至る所の一の闘争——を續けてゐる。

「昔の時代の歴史を細けば、吾々は殆んど到る所に於て、全社會が種々なる身分に編成され、社會的地位に多様の差のある事を發見するであらう。古代ローマに於ては貴族、騎士、平民、奴隸があり、中世に於ては、封建諸侯、家臣、同業組合の親方、職人、農奴があり、且つ之等の者の殆んど各々に於て、更に猶ほそれらの等級があつた……」(K. Marx and Fr. Engels, Communist Manifesto, p.12—p.13)

斯くの如く、古代の共產主義社會を除いた從來の歴史は、階級闘争の歴史であり従つて古來いろいろの國家が起り且つ滅びて行つたのであつた。氏族制度が崩壊した跡へ出來た最初の國家は、前述の如く、ギリシヤに於ては自由民殊に貴族が奴隸を抑壓するための國家であり、又ローマに於ては貴族が平民を抑壓するための國家であり、中世に於ては封建領主が農奴を支配するための國家であつた。勿論マルクスが云つてゐる如く、貴族の間にも、又平民の間にもいろいろと小さい區分があり、自由民の間にも奴隸の間にも小分けがあつたが、主たる對立——基本的な階級對

立は右の如きものであつた。かゝる階級対立は決して西洋諸國だけの話ではなく、日本に於ても、平安朝時代までは貴族が奴隸や平民（百姓、町人）を支配するために國家を持て居り、又鎌倉幕府時代以降徳川幕府までの所謂「武家政治」時代は封建諸侯即ち大名小名が農奴（百姓）町人等を抑壓するために國家機關を握つてゐたのであつた。そして之等の諸階級が國家權力を中心として、正巴と入り亂れて階級闘争をやつてゐたのである。然らば現在は何うであるか？

b、ブルジョア社會の階級闘争

「封建社會の廢墟から生れ出た近代のブルジョア社會も、階級対立を廢した譯ではない。それは古きものゝ代りに、たゞ新たな階級と、新たな抑壓の條件と、新たな闘争の形勢とを齎したのみである。

「けれども我々の時代、即ちブルジョアジエの時代は、その階級の對立を簡單化したことを以て、特徴づけられてゐる。全社會は愈々益々二個の敵對せる二大陣營に、互ひに間近く對峙せる二大階級に、即ちブルジョアジエとプロレタリアートとに分裂しつゝある。」（マルクス、エンゲルス、前掲、第一三頁）。

現在我々の住んでゐる社會は所謂ブルジョア社會である。そこではブルジョアジエとプロレタリアートが基本的階級であつて、此の基本的階級對立が、現在の國家の性質を特徴づけてゐる。云ふまでも現在の社會に於ては、ブルジョアジエとプロレタリアートの二大階級の外に、地主や小ブルジョアジエ即ち都市の中間階級（俸給生活者、自由職業者、下級官吏、小商人、小手工業者や、農村の農民（自作農民や小作農民乃至自作兼小作農民）等がある。だが基本的な階級はブルジョアジエ對プロレタリアートの二つである。従つて現在世界に多く存在する處の所謂近代國家はブルジョアジエがプロレタリアートを支配するための國家だと云ふことが出来る。

c、日本の現在の階級對立

だが、この事は、世界的に、一般的に云ひ得られることなのであつて、特殊の、個別的には國によつて、國家權力の把持者を一概に定めることは出来ない。例へば我が日本であるが、我が國はいろいろの歴史的條件、殊に明治維新のブルジョアジエ×の不徹底からして、今日の政治權力は、ブルジョアジエと地主とのプロック（ブルジョアジエのヘゲモニーの下に於ける）の手中にあると云はれてゐる。だがそれは飽くまでもブルジョアジエ

一、即ち今日の段階に於ては帝國主義ブルジョアジーがヘゲモニーを握つてゐるといふ點に於て、全體としての日本國家が近代國家であることを少しも妨げないのである。これについて、昨年来、いろいろと問題となつた、コミンテルンの日本問題に關するテーゼは次の如く云つてゐる——

「産業の異常に急激なる成長は、資本主義關係の急速なる發展、日本ブルジョアジーの政治的重要性とその力の増大とを齎らし、その結果は、貴族とブルジョアジーとの間の種々なる内部的軋轢妥協を通じて政府の變質をよび起した。今日の日本の政府は資本家と地主とのプロツク的手中にある。資本家と地主とのプロツクは一般的に云つて日本帝國主義時代の極めて特徴的な形相を呈してゐるのであるが、それにも不拘、そこには、六十年間の特殊なる發展條件に基づく種々なる特殊的性質がある。

「一八六八年の革命（筆者註——明治維新の革命である）は日本に於ける資本主義の發展に道を拓いたものである。然し乍ら政治權力は封建的要素たる大地主、軍閥、 \times の手中にあつた。日本國家の封建的特質は單に過去の傳統的殘存物、廢物的遺物に過ぎなかつたものではない。それは資本主義の原始的蓄積にとつて、極めて便利な道具であつた。日本資本主義はその後の

全發展の時代にわたつて巧妙に之を利用した。

「舊日本國家のブルジョア國家への轉化は二つの異なる道を通じてなされた。一方に於ては産業的、商業的、金融的ブルジョアジーの相對的力と政治的重要性とが不斷に増大して行つたこと、他方に於ては封建層と新ブルジョアジーとを融合させる過程が、經濟的諸原因、労働者及び農民運動の恐怖、帝國主義政策の要求の刺戟の下に、極めて急速に發展して行つたこと、これである。

「……現代の日本國家は、そのあらゆる封建的屬性と遺物とも拘はらず、日本資本主義の最も集中的な表現であり、そのあらゆる重要な血管の體現であり……。

「……日本は今日ブルジョアジーと地主とのプロツク、しかもブルジョアジーのヘゲモニーの下に於けるプロツク——によつて支配されてゐる。

「……（だが）……ブルジョアジーと地主との融合の過程が如何に進んで居らうとも、大地主は依然として、日本の政治的經濟的生活に於ける極めて重要な、又高度に獨立的な要因である。

d、經濟上の優越階級と國家

斯くの如く國家とは常に經濟的に優越した、即ち所謂搾取階級の國家となる。國家の發生以來今日のブルジョア國家は普選を布き議會を持ち、否な民選の大統領さへ持った近代のブルジョア國家に至るまで、國家の形態は異なり、支配者の顔振れは異つても、經濟上の搾取階級が被搾取階級を抑壓するための權力組織であるといふ根本的な點に至つては依然として變化がなかつた、と言ふのがマルクス主義の國家論である。これについて、エンゲルスは、次の如く云つてゐる。

「國家は階級對立を抑制する必要から發生したものであるから、然しそれはまた同時にこれらの階級の軋轢の真唯中に發生したものであるから、それは通常最も有力な、經濟的に支配する階級の國家であり、そしてかゝる階級は、また彼等の國家によつて政治的に支配する階級となり、またかくして被壓迫階級の抑壓及び搾取のための新しき手段を獲得する。かくて古代の國家は何よりも先づ奴隸の抑壓のための奴隸所有者の國家であり、又封建國家は農奴的及び農民的農民の抑壓のための貴族の機關であり、そして近代の代議制國家は資本による賃労働の搾取の道具である。」(エンゲルス「民族、私有財産及び國家の起原」第三二七頁)

。特殊なる時期に於ける國家の例外的役割

處が國家なるものは、露骨な階級闘争を「秩序」といふ柔いオブラードに包み、經濟上の搾取を合法性といふ衣でくるんで了ふといふ機關なのであるから、この階級闘争が一定の特殊な段階に於ては、表面的には中立的な立場を取ることがある。搾取する支配階級の力が搾取される被支配階級の力に比してウンと強い場合——今日の日本の階級關係はその最も著しい例であるが——に於ては、支配階級は國家によつて、猛烈な、野蠻的な彈壓を加へる。だが、被支配階級の力が強くなり、支配階級の力が弱くなると、一種變チキリンな現象が起る。即ち國家が階級闘争の仲裁役のやうな顔をするのである。

「然し乍ら例外的には、相闘争する諸階級が互に殆んど均衡を保ち、國家權力が外觀上の調停者として一時或る程度の獨立性を得るが如き時期が現れる。貴族と市民階級とが互に均衡した第十七世紀及び第十八世紀の絶対王政がそれであり、ブルジョア階級に對してプロレタリアートのまたプロレタリアートに對してはブルジョア階級の役割を演じたところの第一及び第二に第二フランス帝國のボナパルチズムがそれである(エンゲルス、前掲、第三一四頁)。

レニンは、國家に關するその名著の中に於いて、エンゲルスに續いて次の如く云つてゐる。

「而して——吾々はかく附加する——共和國ロシアに於けるケレンスキー政府がそれである。即ちサヴェートが小ブルジョア民主主義者の指導のおかげで既に無力となり、そしてブルジョアジーが未だそれを解散させるだけに十分に有力でないといふ状態の時、革命的プロレタリアートの迫害を開始した其後に於けるこの政府がそれである。」(N. Lenin, the State and Revolution)

イ、ブルジョア學者及び社會民主主義者の詭辯

然るに、この「相闘争する諸階級が互ひに殆んど均衡を保ち、國家權力が外觀上の調停者として一時或る程度の獨立性を得るが如き」例外的な場合をば、ブルジョア學者は大事さうに取り上げて、これをば永久化し固定化するのである。例へば高田保馬氏の次の言葉を見よ。

「國家の組織は階級間の關係の公正證書であり、國家は亡びることなき公證人である……(階級及び第三史觀)第三五六頁」

「國家はそれ自體の力によつて決定的作用を営みうる何等の自發的勢力をも有しない。かるが故に云ふ。階級關係の存立變動に於る國家の作用はあくまで一の傍觀者たるに止まる」(同上)

第三六九頁。

たゞにブルジョア學者のみならず、第二インタナショナルに果喰ふ社會民主主義なるものは、一般に斯くの如き謬見に陥つて、マルクス主義から離れ去つてゐる。それはかの歐洲大戰の時に遺憾なくその馬脚を表はした。大戰勃發の直前までは「戰爭に對する戰爭」を叫び、戰爭が勃發すればゼネラル・ストライキを以て報ゆ可しなど威張つてゐた第二インタナショナルの英雄たちは、一度び戰爭が開始されるや、忽ちその態度を約變し「戰爭に對する戰爭」のスローガンは「祖國擁護」のスローガンに變り、「戰爭に對するゼネラル・ストライキ」はブルジョア大臣と同じ自動車に乗つて軍需品工業勞動者の鎮撫に狂奔する「愛國運動」に變つた。愛國社會主義とか排外社會主義とか、社會帝國主義とか云はれるのが、此のたぐひである。そこらあたりで、「日本の官憲は外國の官憲と異つて單なる資本家の走狗ではない」とか、「勞動運動に對して官憲はもつと諒解せよ、日本國家のために」などと云つてゐる「勞動運動者」なども、その末流を汚してゐる譯である。

g、生産力と階級對立との關係

序作ら一寸とこゝに言及して置き度いのは、何故に歴史上、いろいろの異つた階級が發生し、異なつた階級闘争を實現してゐるかといふことである。奴隸所有主と奴隸、封建諸侯と農奴、ブルジョアジーとプロレタリアートと云ふ對立は、搾取するものと搾取されるものとの對立闘争であるといふ點に於ては共通であるが、その對立は個別的に觀察すれば同一の形態を採つてゐない。従つて歴史上に起伏する國家の形態も異なつてゐる。然らばかゝる差異を生ぜしめたものは何か。

それは各時代によつて生産力が異つてゐるからである。この生産と政治、即ち經濟と政治との關係を最もハツキリとした形に於て我々に示したのは、マルクス・エンゲルスで、その説は通常、唯物史觀又は史的唯物論と云はれてゐるのであるが、夫に依れば、各時代の生産力は特定の生産様式を決定し、それは必然に支配の形態、政治の形態、國家の形態を決定するといふのである。「唯物史觀は次の命題から出發する、すなはち生産および生産に次いで生産物の交換が、あらゆる社會秩序の基礎であるといふこと、歴史上現はれた一切の社會において生産物の分配および是れに伴ふ社會の階級的または身分的の構成は、何が如何に生産され且つその生産された

るものが如何に交換されるかによつて定まるといふこと、これである。この見解に従へば、あらゆる社會的變動および政治的革命的變動の窮極の原因は、これを人間の頭に、すなはち永劫の眞理や公正にたいする人間の洞察の増進に求むべきではなくて、むしろ生産方法や交換方法の變動に求むべきであり、それは哲學に求むべきではなくて、當該時代の經濟に求むべきである……（エンゲルス「反デュリング論」第四五八―四五九頁）。

「生産および運輸の技術は、我々の見解によれば、また交換の、更にはまた生産物の分配の様式をも決定する。」

「而してかくして社會解體の後に於ては、階級の分割をも、かくして支配關係、隷屬關係を、かくして國家、政治、法制、其他をも決定する（同上）。」

「生産の各形態は夫々の法律關係、統治關係を生産する（マルクス「經濟學批判」第一九頁）。「……我々が全社會構成の、それ故にまた、統治關係、並に従屬關係の政治形態の、簡單に云へば、各時代の特殊の國家形態の、內的秘密、隠れたる基礎を發見するのは、いつでも、生産條件の所有者が直接生産者に對する直接的關係に於てある——そしてこの關係の形態は、

いつも、常に自ら労働様式の、従つてまた労働の社会的生産力の、一定の發達段階に照應するものである。」(マルクス、資本論第三卷、第二三二四—二三二五頁)

「政治は經濟の集中的表現である」(レニン)
唯物史觀の詳しい説明はこゝで展開す可き限りでないから、右の引用に止めて置くこととするが、階級對立の變化、従つて種々なる國家形體の變遷の根源は、生産力の發展に——即ち哲學にではなく、經濟に求む可きであるといふことを銘記せねばならぬのである。

四、國家の歴史的運命

α、階級對立の廢止

既に述べた如く、國家なるものはブルジョア學者が無批判的に押しつけるが如く、太古より未
來永劫に亘つて存在するものではなくて、社會の一定の發達段階に於いて發生した特殊の機關で
ある。だから、國家を發生せしめた特殊の理由が無くなつて了へば、 $\times \times$ も従つて此の地球上か
ら姿をかくして了ふ譯である、とエンゲルスは言ふ。

「かくて國家は永劫の昔から存在するものではない。國家なくして濟み、國家及び國家權力に
就いて何等の豫感をも持たなかつた社會が會つて存在した。階級への社會の分裂と必然的に結
びつけられた、經濟的發達の一定の段階において、この分裂によつて國家は必要となつたので
ある……」(「國家の起原」第三一六頁)

「……搾取階級および被搾取階級への、また支配階級および被支配階級への、社會の分裂は、
これ從來の生産の發展程度の低かつたことの必然の結果であつた。社會の總労働が萬人のカツ
くの生存に必要なものをゴク僅かしか越えないほどの果實しかもたらさない間は、従つて
この労働が大多数の社會成員のあらゆる又は殆んどあらゆる時間を必要とする間は、社會は必
然に階級に分裂せざるを得ない……」

「しかしながら階級分裂が斯くの如く或る種の歴史的正当づけを有するとしても、夫はたゞ或
る一定の時代において、或る一定の社會的條件においてのみである。階級分裂は生産の不充分
を根據とした、従つてそれは近世生産力の完全なる發展によつて一掃されるであらう。そして
事實、社會階級の廢止は、たゞに或る一定の是れ又はあれの支配階級の存続ばかりでなく、支配

階級一般の、従つて階級差別そのものゝ存続が、一の時代錯誤となり、陳腐となるやうな、一の歴史的発展段階を前提とする。それ故に社會階級の廢止は、實に、或る特殊なる一社會階級による生産手段および生産物の占有、従つてまた政治的支配や、教育の獨占や、ないしは精神的指導や、等の占有が、たゞに不用となるのみでなく、経済的にも、政治的にも、また智的にも、むしろ發展の妨害となるやうな高き生産發展の一段階を前提とするのである。この點は今や到達されてゐる。〔「反デュリイング論」第四八六頁〕

b、階級廢止の前提條件としての生産力の發展

何故にかゝる「前提」段階が到達したといふのであるか。エンゲルスは言葉を續けて云ふ——「ブルジョアジーの政治的および智的の破産はすでに彼等自身にとつてもモハヤ殆んど秘密ではなくなつてをり、彼等の経済的の破産もまた規則正しく十年毎に繰り返しつゝある。恐慌の起るごとに社會は、自分みづからのものでありながら自分みづからの使用し得ざる生産力および生産物の重壓のもとに窒息するのみでなく、生産者は何等の消費すべきものを持たない、それは消費者がないからだといふ實に馬鹿けた矛盾の前に茫然として自失するのである。生産

手段の膨脹力は、資本主義的生產方法によつてこの生産手段に加へられた束縛の紐を截ち切る。生産手段をこの束縛の紐から解き放つことは、これ益々急速に進歩して止むことなき生産力の不斷的發展と、従つてまた生産そのものゝ實際上無制限なる増進とを促すべき唯一の前提條件である。それに止まらぬ。生産手段の社會的占有は、たゞに今日存する生産上の人爲的妨害を除去するのみでなく、實にそれは、現在において生産の不可避なる隨伴現象をなし且つ恐慌においてその頂點に達するところの、生産力および生産の積積的なる浪費や荒廢をも除去する。進んでは又この社會的占有は、今日の支配階級およびその政治的代表的愚昧なる奢侈的浪費を除去することにより、多量の生産手段および生産物を社會全體のために解放する。社會的生產により凡らゆる社會成員に對し、たゞに物質的に完全に充分で且つ日にましヨリ豊かとなりつゝある生存を保證するのみでなく、彼等の肉體のおよび精神的素質の完全にし自由なる發育と活動とをも保證するの可能——この可能は今や初めてこゝにある、然りこゝにある。〔同上、第四八七—四八八頁〕

思はず引用が長くなつて、讀者諸君の退屈を招いたことと思ふが、階級發生の原因が生産力の

發達の不十分なることより生じたが故に、社會の生産力が十分の發達をすれば、従つて階級對立の根據がなくなり、それに伴つて國家もなくなるといふのである。今日の生産力の偉大な發展はそれを約束してゐる。だが今日の生産力の程度のみでは、未だ階級廢絶の爲の十分なる根據となり得ぬ。それには、現在の素晴らしい發展せる生産力を更に一層發展せしめねばならぬ。

c、生産力發展の桎梏とその除去者

然るに此の生産力發展の桎梏となつてゐるものがある。それは現在の社會組織、即ち少數のブルジョア階級が多數のプロレタリアートを搾取してゐる社會組織、従つて此社會組織を維持してゐる現在のブルジョア階級が其邪魔をしてゐるといふのである。茲に現在のX X X XのX Xといふ問題がある。此X Xの遂行者は近代的工業プロレタリアートだ、とマルクスは斷言してゐる。「……ブルジョア階級は、自己を殺す可き武器を鑄造したばかりではなく、又その武器を使用す可き人物を作り出した。即ち近代的労働者階級——プロレタリアートがそれである。(Mark and Engels, The Communist Manifesto, p. 21)」今日、ブルジョア階級と對立してゐる總べての階級の中で、たゞプロレタリアートのみが真

實のX X的階級である。爾餘の諸階級は、近代的工業のために衰頹し滅亡するものであるが、プロレタリアートは即ち近代的工業の固有の生産物である(同上、第二六頁)

d、國家の「死滅」に関するエンゲルスの言葉

プロレタリアートは自らを團結することによつてブルジョア階級の政治X Xを奪取し、ブルジョア國家をX Xし、自分を支配階級の地位にまで上げてプロレタリア國家を樹立する。併しプロレタリアートが自己の國家を作り、自己を支配階級として維持する所以は、決して階級對立を永久化し、固定化させるためではない。それは階級を廢し、階級對立を除去し、従つて階級對立の所産たるX Xそのものを廢止せんがためである、といふのがマルクス・エンゲルスの見解である。「資本主義的生産方法は、人口の大多數を益々プロレタリア化する事により、この變革をば自己の破滅を賭して完成させるを得ない一つの力を作り出す。またこの生産方法は、すでに社會化された大規模な生産手段をますます國有化することにより、この變革を完成すべきその道をも示す。プロレタリアートは國家權力を把握し、そして生産手段をまづ國有化する。けれども、是れとともに、プロレタリアートはプロレタリアートとしての自分みづからを廢棄し、こ

れと共に、それは一切の階級差別および階級対立を廢棄し、かつ又これと共に、國家としての國家をも××する。階級對立をなして推移せる從來の社會は國家を必要とした、言ひ換れば、その時々々の搾取階級が自己の外部的生産條件を維持するための、すなはち別けても現存の生産方法によつて與へられた抑壓の條件（奴隸制度、農奴制度、または賦役制度、賃勞動制度）のもとに被搾取階級を暴力的に屈服せしめるための、組織を必要としたのである。國家は全社會の代表者であり、眼に見うべき一の物體への社會の概括であつた、けれども國家が然るものであつたのは、それがその時代々々において自ら全社會を代表せるその階級の國家たりしかぎり に於てのみ、すなはち、古代においては奴隸を所有する國民らの國家であり、中世においては封建貴族の國家であり、吾々の時代においてはブルジョア階級の國家である限りにおいてのみである。この國家はやがて事實上、全社會の代表者となることにより、自分みづからを不用ならしめる。抑壓すべき何等の社會階級がなくなるや否や、また階級支配と從來の生産の無政府状態に基づく偶然的生存競争とが廢除されて、これより發生する衝突や暴行もまた除去されるや否や、もはや抑壓すべき何物もなく、特殊な一抑壓權力たる國家を必要ならしめる何物もない。

國家が眞に全社會の代表者として現はれる最初の行爲——即ち社會の名においてする生産手段の掌握——は、同時に國家としての最後の獨立的なる行爲である。社會關係への國家權力の干渉は、一領域から他のそれへと漸次不用となり、かくて遂におのづから眠り込む。人に對する支配の代りに、事物の管理と生産過程の指導とが現はれる。國家は「廢止」されるのではなくて、それは死滅するのである。「反デューリング論」第四八三—四八四頁）

右は、國家の「死滅」に関する有名な「著しく含蓄に富める」(レニン)章句である。此のテーゼは、正しきマルクス主義の國家觀が、一方に於ては無政府主義者の國家觀に、他方に於ては、日和見主義的マルクス主義者の國家觀に對立するものである。

9. 無政府主義者の國家論

無政府主義者は、國家は階級支配の道具であり、一つの「惡」であるから、即時××革命によつて「廢止」しなければならぬと云ふ。だが、マルクス主義の見解によれば、プロレタリアートは直ちに國家を「廢止」することは出来ない。何とならば、プロレタリアートがブルジョア階級を××し國家權力を握るのは、決して國家を國家として何時までも存続させるためではなくて、×

Xを「廢止」するためではあるが、直ちに「廢止」するのではない。そこにはX×されたブルジョア階級の反抗が残る。ブルジョア階級は、スキだにあらばプロレタリアートを倒して、再び昔の覇權を恢復せんとする。かかるブルジョア階級の反抗を抑壓して無階級社會、國家なき社會を作るためには、過渡的手段として、奪ひ取つたる國家權力を利用して、ブルジョア階級の反抗を粉砕せねばならぬ。だから此の限りに於て、プロレタリアートは、ブルジョア階級X×後も未だ暫らく國家を必要とする、といふことになるのである。

f、日和見主義者の曲解

次にそれは、日和見主義的マルクス主義者と鋭く對立する。何とならば、彼等日和見主義者は此のエンゲルスの表現を曲解して、國家は「廢止」さる可きものではなくして、それは「死滅」す可きものだ。然るが故にX××に國家をX×するのは誤つてゐると云ふ。即ち彼等はX×××を否定する。

然るにエンゲルスの考へは之と全然反對である。先づ第一に注意す可きは「プロレタリアートはプロレタリアートとしての自分みづからを廢棄し、これと共に、それは一切の階級對立を廢棄

し、かつ又これと共に、國家としての國家をも廢棄する」といふ言葉である。この最後の一句は深く考へる必要のある言葉であつて、プロレタリアートの國家は、階級對立廢棄のための國家であつて、固有の意義に於ける國家ではない。故に「國家としての國家」の廢棄とは、ブルジョア國家——即ち、階級支配のための「一」の特殊なる抑壓の權力たる固有の意義に於ける國家としての最後の歴史的國家——の「廢棄」を意味する。而して「死滅」する國家とは、ブルジョア國家ではなくして、プロレタリアートの權力X×後^ゴに於けるプロレタリア國家である。即ちレニンの表現に従へば「半國家」が「死滅」するといふのである。

「ブルジョアX×は斷じて「死滅」するものではない。それは「X×」さる可きのみだ。プロレタリアートがブルジョア階級に取つて代はるのを、ブルジョア階級が黙つて見てゐる譯はない。ブルジョア國家の「死滅」——エンゲルスはそれを又「眠り込む」とも云つてゐる——はあり得ない。「一握みの富者によるプロレタリアートの、即ち幾百萬の労働者の抑壓のための、ブルジョア階級のかの「特殊なる抑壓の權力」はプロレタリアートによるブルジョア階級の抑壓のためのプロレタリアートの「特殊なる抑壓の權力」(プロレタリアX×)によつて置き換へられねばなら

ない(レ)ン、前掲、第一九頁「死滅」若しくは「睡眠」するのは、「社會の名においてする生産手段の掌握」後に於ける國家、即ち階級對立廢止の前提條件が満たされた時代のプロレタリア國家である。この兩種類の國家を區別せずして、徒らに「國家はX Xすべきものでなくして、死滅すべきものなりといふのは、プロレタリアX Xを否定することを意味する。かくの如き思想を、マルクス、エンゲルスは、日和見主義思想として、極力排斥した。現にエンゲルスは「國家の死滅」を説いた右の章句を含む同一著書の中で次の如く云つてゐる——

「デューリング氏にとつては暴力は絶対悪であり、最初の暴力行為は彼にとつては罪の墮落であり、彼の全説明はこの原罪が從來の全歴史に感染したことに對する悲嘆の説教であり、またこの惡魔の力たる暴力によつてあらゆる自然のおよび社會的法則が死滅するべくも偽造されたことに對する悲嘆の説教である。

「このX Xはしかし歴史上いまい一つの役割、一のX X的役割を演ずるといふこと、それは(X X)はマルクスの言葉に倣へば、新たな社會を孕める古き社會の助産婦であるといふこと、それは社會の進行を押し進め且つ鞏固し死滅せる政治諸形態を放棄すべき道具であるといふこと

と、——凡そこれらのことについては、デューリング氏は一語も語らない。わづかに嘆息と呻きの下に彼は、搾取經濟の轉運にはおそらく暴力が必要であらうといふ可能性を認める——だが、お生憎さま！ 一切の暴力行使は之を行使する者を墮落させるとの仰せではなかつたか。いづくんぞ知らん、高き道德的かつ精神的の勃興こそ、すべてこれX Xの勝利の賜物だつたのだ！ 然も處もあらうにこのドイツに於てとある、實にドイツにおいてこそは一の暴力的衝撃によつて、かの三十年戰爭の屈辱このかた國民意識に泌み込んだ阿諛卑屈の精神を根絶することを國民は必要とする。少なくともそれを利益とするのではないか。しかし憔悴し乾からびた此の無氣力な説教師的考へ方が、厚かましくも、歴史の知る最もX X的なる黨派内に闖入しや々と要請するのであるか？ (同上、第三〇三—三〇四頁)

またマルクスは「資本論」第一卷に於て次の如く云つてゐる——

「これらの方法、例へば、植民制度は、一部分は殘虐なる權力に立脚する。然し乍ら、これらの方法は、總べて、封建的生產様式から資本家的生產様式への轉化過程を溫室的に促進し、且つ過渡を短縮すべく國家權力——社會の集積され、組織された權力としての國家權力を利用し

たのであつた。權力は一つの新しい社会を孕める古き社会の助産婦である。それ自體、一つの
経済力である」(第六八〇頁)

g. X X 革命の意義

① 即ち、レニンの云ふ如く「プロレタリア國家とブルジョア國家との交代はX X X X なくしては
不可能である。」(前掲、第二三頁) 此X X X X によつて、プロレタリアートは自を支配階級の
地位に高め一切の生産要具を自己の手に集中して、それを社會全體のために——即ち資本主義社
會の下に於ては、一握り程の資本家の利益のために、幾百萬のプロレタリアートを擄取すべく用
ひられたところの生産要具を自己の手に握つて、生産力をば出来る限り發展せしめ、階級廢棄に
向つて、無階級の社會樹立に向つて突進するのである。プロレタリア國家權力はこの生産力の發
展、従つてこの生産力の發展を阻ぐ凡ゆる妨害物排除のために利用される。従つてそれは最早や
固有の意義に於ける政治權力ではなくなる。

「労働者階級は、その發達の經過のうちに、古きブルジョア社會の代りに、階級と階級對立と
を除外した處の聯合(association)を置く。かくして最早や、固有の政治權力といふものは存在

しないこととなる。何となれば、政治權力とは、まさにブルジョア社會内に於ける階級對立の
公然の表現であるから」(マルクス「哲學の貧困」第一八二頁)

「我々は既に以上に於て、労働者X X の第一歩が、プロレタリアートを支配階級の地位に上げ
ることにあるのを見た。即ちデモクラシーの獲得にあるのを見た。

「プロレタリアートは、漸次にブルジョアジーから一切の資本をX X し、一切の生産要具を國
家、即ち支配階級として組織されたるプロレタリアートの手に集中し、而して出来る限り急速
に生産力の總量を増大すべく、自己の政治的支配權を利用するであらう」(The Communist

Manifesto p. 40—41)

即ち一切の日和見主義者は、國家の「死滅」のためには、先づ「プロレタリアートを支配階級
の地位に上げる」ことが必要であり、「國家即ち支配階級として組織されたるプロレタリアート」
が必要であることをスツカリ忘却若しくは無視しようとしてゐるのである。即ちブルジョア社會
から、無階級の社會I X X X 社會II 國家なき社會へ一足飛びに飛べるのではなくて、其間には
一つの過渡期「半國家」といふものが必要であるといふマルクス主義の思想を、彼等は見まいとす

るのだ。そしてプロレタリアートの間へ、平和主義、愛國主義のXを撒き散らしてゐるのだ。

h、プロレタリアXX

独本

「この過渡期「半國家」を別の言葉で表現したのが、所謂プロレタリアXXである。このプロレ
リアXXの概念が眞實のXX的マルクス主義と一切の目利主義とを區別する大きな編であ
り、プロレタリアートの解放といふ實地的見地よりして、決定的重要性を有つものである。
斯くの如き、重要な意義を有するプロレタリアXXなる思想は、パリ・コムミュンの後にマ
ルクスの到達した處であり、その言葉は彼の有名なる「ゴータ綱領批判」に於て、始めてマルク
スが使用したものであるが、その中で彼はかう云つてゐる——

「資本主義社會と共產主義社會との間には、一つの社會から他の社會へのXX的轉化の時代が
横たはる。それにまた一つの政治的過渡期が對應して、その過渡期の國家こそは、プロレタリ
アートのXX的X義に他ならないのである。」(水谷氏譯「ゴータ綱領批判」第三六頁)

然らばこのプロレタリアートXXの時期に於ける國家形態は何か？ それはブルジョア國家の

形態と如何に異なるか？

マルクスは、最初の労働者國家と云はれるパリ・コムミュンの經驗を批判して「労働者階級は
出來合ひの國家機關をたゞ單純に取り上げて、これを自分自身の目的のために運用することは出
來ぬ」「フランスの内亂」と云つてゐる。この言葉は「パリ・コムミュンの主要にして且つ根本
的な教訓」として、マルクス、エンゲルスにより「コムミュニスト・マニフェスト」の唯一の「修
正」として、一八七二年六月二十四日附の序文へ挿入されてゐる。日和見主義者は又もや此のマ
ルクスの教訓を「曲解」して、それは暴力によるブルジョア國家權力のXXに反對し、漸次的進
化を、即ちXX革命反對を意味するものであるかの如くお説教した。だが、マルクスの云はんと
した處は、之と全然反對であつて、労働者階級は「出來合ひの國家機關」をそのまま取り上げて
利用するのではなくて、それをXXしなくてはいけない。そしてそれに代ふるに新しい國家機關
を以てせねばならぬことを意味するのだ。現に彼は、一八七一年四月十二日、即ちコムミュンの
まつ最中に、クーゲルマンへ宛てた次の如き手紙を書いてゐる——

「若し拙著「ブルニール十八日」の最後の章を讀み返して下さるなら、最早や從來の如く官

暴力
暴力
ト見
命
力
心

其
僚的軍事的の機關を一人の手から他へ移すのではなく、それを破壊せんとするのが、フランス革命の最近の試みであると述べてゐるのを見出されるであらう。之こそは大陸のあらゆる民衆××の先行條件をなすものである。そして之こそは又雄々しきパリの我黨員の試みなのだ。此パリ人の弾力性、その歴史的創意、その自己犠牲力の如何に偉大なる事よ。内憂外患交々到り、半歳の饑餓と破壊とに憫んだ後にも歸らず、プロシヤ軍の鋭劍の閃く下に、彼等は敢然として起つたのだ。併獨戦争も、パリの城外に迫れる敵軍も、彼等の目には映らぬのであらう。有史以來他にかくも偉大な例を知らない……「クーゲルマンへの手紙」林氏譯、第一七〇頁）
「軍僚的、軍事的機關……を破壊せん」と、この言葉こそ、レニンの云ふ如く、「××に於けるプロレタリアートの國家に對する諸任務に就いてのマルクス主義の主要教義を簡潔に表明するものである。」

じ、パリ・コムミュンの經驗——プロレタリア國家機關の必要

然らばパリ・コムミュンの労働者たちは如何なるものによつて、「出来合ひ」のブルジョア國家機關に代へたか。

「……コムミュンの第一の布告は、それ故に常備軍の抑壓と、武装せる人民を以てするその置き代へであつた。」

「コムミュンは普通選挙法によつて、パリの各區から選出された市會議員を以て成立した。彼等は責任を負ひ、且つ同時に罷免され得るものであつた。彼等の大多数は、自ら明かなる如く労働者か或は労働者階級の承認されたる代表者から構成された……」

「警察は從來、國家行政の道具であつたが、即時その政治的性質を悉く剝奪され、そして責任を負ひ且つ同時に罷免し得べきコムミュンの道具に轉化された。他の凡ゆる諸省の官吏も全く同じであつた。コムミュンの委員以下の公物は、労働者の賃銀を以て遂行されねばならなかつた。高い大官連の既得権及び交際費は、之等の高官自身と共に消えて失くなつた。……常備軍と警察、之等の舊政府の物質的權力の諸道具が××されるや否や、コムミュンは直ちに宗教的抑壓の道具たる僧侶の權力の破壊に向つた。……司法官はかの外職上の獨立を失つた。……彼等はその後は、選挙され、責任を負ひ、且つ罷免され得るものたるべきであつた」(K. Marx,

the Civil War in France, p. 20—21)

ブルジョア國家の機關たる常備軍、警察、官僚のXXは、單なるデモクラシーの徹底に非ずして、それは質的變化を意味する。即ちそれは「ブルジョア・デモクラシーからプロレタリアートのそれへ、國家（ある特定の階級の抑壓のための一つの特殊なる權力）から、も早や既に本質的には國家でないところの或るもの」(レニン)への轉化を意味する。

斯くの如く、パリ・コムミュンはプロレタリアXXへの一歩前進を示したのであつたが、そのXXの不徹底なりし爲に失敗した。即ちレニンの力説するが如く「ブルジョアジーと、その反抗を抑壓することは未だ必要である。コムミュンにとつてはそれが特に必要であつた。而してその失敗の理由の二は、コムミュンが十分の決意を以て、それを實行しなかつたことにある。」

ク、ロシア革命の收穫——サヴェエト形態の發見

一九一七年十一月のロシア革命は、このパリ・コムミュンの經驗を更に積極的に押し進めて、サヴェエトなる一の新しき、國家形態、プロレタリアXXの政治形態を確立した。

サヴェエトについては、今日の諸君はいろいろの書物に於て見られて、よく御承知のことと思ふが、それは一九〇五年の革命の進行中に於て作り出されたものであつて、労働者、農民の

大衆を全部包含する處の組織である。それは當時いち早くレニンによつてその歴史的重要性を見透はされたのであつたが、一九〇五年の革命の敗北と共に姿を消した。だが、その經驗は一九一七年のXXに至つて實を結ぶことに失敗しなかつたのである。

「レニンは、一九〇五年のサヴェエトの本質を極めて正確に規定づけた。彼によれば、この組織は、最も重要な三つの特徴を備へてゐた。即ち一、XX的な組織であり、二、自然生長的に成生したものであり、三、民衆の、労働者農民の、眞實の大衆組織であつた、ことが即ちそれである。」

「サヴェエトは、XXの過程のうちに發生したところのXXの機關であり、民衆のXX的創造性の所産である。それは……闘争の坩堝のうちに、職場や工場の中に、労働者大衆の闘争機關として生れたものである。それはまた、絶対専制支配とブルジョアジーとに對する闘争に駆起したXX的な労働者—農民—XX大衆の直接の所産なのである。」

「だが、一九〇六年に至つて、レニンは、サヴェエトの經驗をより綿密に批判して、前述三つの主要なる特徴に加ふるに、更にまた二つの特徴を以てした。即ち一、一九〇五年の労働者

サヴェイトがXの社会的民主主義者（ボルシエヴィキ）と、革命的小ブルジョア（メンシエヴィキ及びエス・エル）並に黨外のXの労働者の戦闘同盟であること。二、サヴェイトが新しいXの権力の萌芽であり、プロレタリアートとXの農民とのXの核心であること、の二つである……

「サヴェイトの発生は一九〇五年の歴史的大衆運動のうちにこそ求むらる可きなのだ。かの年一月九日の、ペテルスブルグ労働者の勇敢なる活動の直後に自然生長的に発生した労働者の組織こそがその萌芽的核心であつたのである。

「……ペテルスブルグの労働者サヴェイトは、それ以前の全期に亘る経験の綜合であり、労働者大衆の戦闘にとつて一等優れたる組織形態であつた。

「ペテルスブルグ・サヴェイトは……「正系」の政府と相並んで存在し、ある期間は、國家權力を特徴づける處の、種々なる活動の根據地であつた。それはストライキを指導し、工場、職場の開閉を左右したのみではなく、實際に、言論集會結社の自由を實現し、自己の機關紙を發行し、政府財政機關のボイコットを提唱し、政府役人の罷免を斷行した。一言にして云へ

ば、それは新しきXの胎兒であつた。

「全モスコウサヴェイトの成立は遅かつた。その成立は、ペテルスブルグの兄弟が其の力竭きた……十一月の末であつた……時もよしモスコイではボルシエヴィキが強かつた。モスコイサヴェイトの組織化を提唱したのは彼等であり、その内部を牛耳つたのも彼等であつた。この故にこそ、黨がXを決定した時、モスコイ労働者代表者サヴェイトは、黨の戦闘組織とともに、この闘争の全指導を擔當し得たのであつた。

「かくてモスコイサヴェイトこそは、一九〇五年の過程に於けるXの組織の最高の形態であつた。それは既に、プロレタリアートと農民のX實現の一實證であつた。なぜならば、モスコイ十二月Xの間、唯一の権力は、蜂起せる労働者農民の権力にあつたことを、そして此の権力の組織形態が、實にモスコイサヴェイトであつたことを、何人も否定し得ないから」(ウエ。ネフスキー「一九〇五年に於ける労働者農民X代表者サヴェイトの意義」)

「闘争を通じてXは、労働者デモクラシーの眞價を労働者に示した——それは労働者代表者サヴェイトを生んだ。

「反動によつて、これらの組織形態は粉砕されたが、これが労働者の頭腦に刻んだ××的肝銘は、十月革命に至るまで消滅のべくもなかつた。」(レンツネル「一九〇五年」)

「一九〇五年の×××なくしては、十月革命の勝利は不可能であつた」(レンツネル)。

かゝる××なる意義を有するサヴェエト・プロレタリアート××を實現し、資本主義社會を××して共產主義社會を實現す可く歴史の車輪を廻らすサヴェエトなるものは、現にロシアにおいて、如何なる意義を興へられ、如何なる働きをなすつゝあるか。

一、サヴェエトの組織

「……サヴェエトの郡大會は、最良のブルジョア民主主義的共和國に於ても見られなかつたやうな、デモクラチックな機關であつて、此の會議を通じて、黨は出來得る限り注意深くこれを注目してゐる。また階級的自覺ある労働者を農村の種々なる地位に常住的に派遣することによつて、農民に對するプロレタリアートの指導的任務、都市プロレタリアートの獨裁、並びに富有な、ブルジョア的な、搾取的投機的農階級に對する組織的な闘争が實現されてゐるのである」(レンツネル「左翼小兒病」和田智二氏譯、第五七—五八頁)



「……サヴェエト權力こそ、プロレタリアの××組織、先進階級の××組織の形態に外ならぬものであり、新しいデモクラシー、即ち幾百萬幾千萬の労働し、搾取されるものを、新しいデモクラシーにまで、國家管理に對する獨立的參與にまで高める——この搾取され労働するものは、彼等の經驗によつて、プロレタリアートのうちの、規律あり、階級意識ある前衛こそ、最も信頼すべき指導者であることを、發見しつゝあるのだ」(Lenin, The Soviet at Work, p.31)

「サヴェエト・デモクラシー——即ち具體的に應用されたプロレタリア・デモクラシー——の社會主義的特質は、第一に、選挙人は、労働し搾取される大衆であつて、ブルジョアジーは除外されてゐる點にある。第二には、選挙に關するすべての官僚的な形式や制限を一掃し、民衆自身が選挙の時日や順序を決定し、代議員解任の完全なる自由を有つことである。第三には、労働するものゝ前衛——即ち大工業プロレタリアート——の最も優秀な大衆組織が形成され、この組織によつて前衛は被搾取者の最も廣大な大衆を指導し、彼等を獨立的政治生活に惹きつけ、彼等自身の經驗によつて政治的に教育し、かくて始めて、實際にすべての民衆が、如何に管理すべきかを學び、また管理し始めることにある。

ソヴェート
の
大衆自身を親しく
この大衆自身を親しく

「これがいまロシアで實行されてゐるデモクラシーの主たる特徴であつて、それはデモクラシーのより高度の形態であり、それはデモクラシーのブルジョアの腐敗との絶縁であり、それは社会主義デモクラシーへの推移であり、國家の終焉の始まる前提條件を形成するものである。(同上、第三九頁)

かくの如く、サヴェートは、工場、職場、農場等、大衆が直接に労働する場所を基礎として、この大衆自身を親しく國家行政に參與せしむる組織であつて、一番下には、都會には都市サヴェート、農村には村サヴェートがあり、凡ての村サヴェートは、群サヴェートを組織し、一縣内の都市および郡サヴェートは縣サヴェートを形成し、都市サヴェート及び縣サヴェートは省サヴェートを形成し、自治州では自治州サヴェートを形成する。而して省サヴェートは都市サヴェートと共に全露サヴェート大會を組織する。

サヴェートはプロレタリアートが農民の支持を得てその獨裁を實現する政治形態である。(ロシアの如き農業國では、プロレタリアートは、農民の支持なしには、プロレタリアートの獨裁を實現することは出来ない。)だがその階級性は飽くまでもプロレタリア的である。通常プロレタリアー

トと農民との獨裁と云はれてゐるのは、スターリンの云ふ如く、サヴェート政府の日常政策から見た言葉であつて、この言葉の裡に、プロレタリア國家の階級性を亡失してはならぬ。(この點に就いての詳細は、スターリン著「新ロシア問答」益田氏譯第四八頁並にスターリンの「ドミトリイエフに對する返事」参照のこと)。故にサヴェートはブルジョア國家の議會とは異なつて、決して普通選舉ではなく、また單なる立法機關にも非ずして、立法權と執行權(ブルジョア政治學者の所謂行政權)とを兼ね有するものである。それはブルジョア國家の如く立法と執行とを別々の如く見せかけ(然りそれはたゞ見せかけに過ぎない)る必要は毫もなく、立法についても、またその執行についても徹頭徹尾、全勞農大衆の前に責任を負ふものである。

サヴェート聯邦の憲法によれば、サヴェートの選舉權及び被選舉權を規定して次の如く云つてゐる。

「第六十四條ロシアサヴェート共和國の市民にして、選舉の當時十八歳に達し、且つ左の種類に屬する男女は、宗教、國籍、居住年限の如何を問はず、總べてサヴェートの選舉權及び被選舉權を有す。

- a、社會的有用なる生産的労働に従事し生活の資を得てゐる者、又は之等の人々をしてその職業に従事せしむるために、家庭的労働に従事する者。工業と農業とを問はず、凡ゆる性質と種類の労働者と被傭者。私的収益の爲に他人を傭せざる農民並にコサツクの農民。
- b、サヴェート共和国陸海軍の兵士。
- c、以上二種の市民にして労働不能となれる者。

「第六十五條右の種類の何れに屬するも左のものは選挙権をも被選挙をも有せず」

- a、収益の目的を以て他人を傭する者。
- b、自己の労働より生ぜざる收入、即ち資本の利子、企業又は土地の所有等より生ずる收入にて生活する者。
- c、商人、代理業者、仲買人その他。
- d、各種の宗教の僧侶及び祭司。
- e、會て舊警察の手先、使用人、憲兵隊及び秘密警察に勤めし者、並に舊王朝の家族。
- f、法律上の手續を経て、精神異常者、發狂者、白痴と認定せられし者。

g、破産犯罪又は金銭上の犯罪のために、法律又は裁判所の判決によりて定められたる期間中、選挙権の行使を停止せられたる者。

m、プロレタリア××の世界的形態としてのサヴェート

サヴェートはブルジョアジー共によつてロシア特有の政治組織の如く云はれてゐるが決してさうではなく、プロレタリア××の世界的な形態である。歐洲大戦中に英國に起つたシヨツプ・スチユアートの組織や、又一九一八年のドイツ革命の前後にドイツの各地に勃發したレーテ等の實質はサヴェートである。それは又決して遠い歐洲に例を求めずとも、お隣りの支那に於ては一九二七年十二月十一日、永年の奴隸の鐵鎖を破つて支那の勞農大衆は廣東に、サヴェート政府を樹立した。それは不幸にして僅々三日の中に、白色テラーの流血の内に死んで了つたが、今や支那奥地に於いては、到る處に於いて勇敢なる武裝労働者農民は中國共產黨の指導の下に、サヴェートを作つてゐると聞く。サヴェートは決してロシアの特産物ではない。

n、プロレタリア××期の生産組織、××主義の第一段階

プロレタリア××の時期、即ち資本主義社會より××主義社會への過渡期の生産組織はマルク

スの所謂X X主義社會の「第一」又は低度の段階であつて、資本主義社會から丁度生れた許りの如きX X主義である。故にそれは経済的、道德的、精神的に、あらゆる點に於てそれがその胎内から出て來るところの、舊社會の母班を尙ほ背負はされてゐる。「ゴータ綱領批判」生産手段は既に私有でなくなり、社會化され、社會の成員は社會的必要勞動をやり、その一定の勞動に對して、一定の生産物を社會の共同倉庫から受取る。そして共同資金を控除した殘餘の勞動量に對して、勞動者は全部請求權がある。即ち勞動者は社會に與へたものを——必要費を控除して——全部取り返す譯である。即ち平等がある程度まで行はれてゐる。だが、此の「平等」權は未だブルジョア的なものに過ぎない。何とならば、各勞動者には、強い者もあれば、弱いものもあり、既婚者もあれば、獨身者もあり、子供を持つ者もあれば、持たないものもある。従つてそれは、マルクスの云ふ如く「……平等に勞動を行ひ、それ故に社會的消費財源から平等に分配を受けるとするならば、従つて一人は事實上、他の一人よりも多くのものを受取り、一人は他よりも裕福である。之等凡べての弊害を避けるためには、權利は平等でなく、不平等でなければならぬ」……「然し乍ら之等の弊害は資本主義社會から、長い生みの苦しみの後に漸く生れ出た許りの共

産主義社會の第一段階に於ては、不可避的である。權利は、社會の經濟的構造及びこれによつて制約される社會の文化的發展よりも以上に高くあることは斷じて不可能である。(同上第一七頁)だから此の共產主義の第一階段(それは一般的には社會主義と稱せられてゐる)に於ては眞實の意義に於ける公正とか平等とか云ふことは未だ與へられない。富の差異と不公正なる差別とが未だ殘存してゐる。だが人間による人間の搾取は不可能となる。何とならば、一切の生産手段が國有化されて居るから、即ち工場、機械、土地等々が私有財産となつてゐないから、従つて他人を雇傭して搾取することが出來ないのである。此の段階に於ては人間による人間の搾取こそ存在せられ、未だ消費物は、人の「必要に應じて分配されずして、人の「勞動に應じて」分配されてゐる。だから、ここでは「ブルジョア的法律は未だ完全には排除されて居ない。たゞ、それは既に遂行された經濟的變革に應じてのみ、即ち生産手段に關してのみ、排除されてゐるに過ぎぬ。元來「ブルジョア」的法律は、生産手段を私有財産として認めてゐるのだが、社會主義の段階に於てはそれが社會化され、たゞ此の限りに於てのみ「ブルジョア的法律」は排除されるのだ。

然し乍らこの権利は、消費手段に關する限りには未だ存続する。それは消費物の分配の調節者として存続する。「働かざるものは食ふべからず」との社會主義的原則は實現されるし、また「同量の労働に對して社會的生産物の同量の配分を」といふ社會主義的原則も實現される。(サヴェート聯邦は此の段階の入口に在るのだ)だがそれは未だ共產主義ではない。

マルクスは之を以て一の「弊害」だといふ。だが、此の弊害は共產主義の第一段階に於ては不可避免的である。何とならば、ユトピアンでない以上、人間が資本主義のXX後、たゞちに、何等の強制を用ひずして、一般社會のために労働することを學ぶであらうといふことは考へられぬし、又、資本主義の排除は、斯様な「激變」の爲の經濟的根拠を俄かに與へるものではないから。そこには「ブルジョア的法律」の規定が存在する故にその限りに於ては國家がまた依然として必要である。そして此の國家は生産手段の社會的獨有を防衛し、労働の平等と、生産物の分配に於ける平等とを保障するのだ。

だがそこには最早や資本家なく、階級なく、それ故にまた最早や何等の階級をも抑壓し得ないといふ限りに於いて、國家は「死滅」しつつあるのである。即ち「國家が眞に全社會の代表者として

て現はれる最初の行爲——即ち社會の名においてする生産手段の掌握——は、同時に國家として最後の獨自なる行爲である。社會關係への國家權力の干渉は、一領域から他のそれへと漸次不用となり、かくて遂におのづから眠り込む。人に對する支配の代りに、事物の管理と生産過程の指導とが現はれる。(エンゲルス)だが、國家は未だ全然死滅してゐるのではない。何とならば猶ほ不平等を神聖視する處の「ブルジョア的法律」の擁護が存続するから、國家の完全なる死滅のためには、完全なるXX主義が必要である(レニン、前掲、第一〇〇頁)。

o、XX主義の高度の段階——國家「死滅」の經濟條件
ブルジョア的法律が完全に廢されて、眞實の意義に於ける「平等」が行はれるためには、生産力の一層の發展が必要である。マルクスは、此の眞實の「平等」が支配し「ブルジョア的法律」が完全に排除される段階を名付けて「共產主義の高度の段階」と云つてゐる——

「共產主義社會がヨリ高度の状態に達して、分業に對する個人の奴隷從屬が消滅し、從つて精神労働と肉體労働との對立も消滅し、労働が單なる生活の爲の手段ではなくして、それ自體が生活の第一欲求となり、個人の全面的發展と共に生産力も増大して、共同組合的富の一切の噴

水が更に豊かにほどばしり出るに至るとき、——そのとき、初めて決然たるブルジョアの法律の地平線を踏み越えて——能力に應じて各人から、欲望に應じて各人に！——と云ふことを、社會の旗印とする事が出来る（「ゴータ綱領批判」第一七二頁）

國家の完全なるX Xのための經濟的基礎は、精神勞動と、肉體勞動との對立が消滅し、人類が社會的共同生活の原則的規則の遵守に全く習慣づけられ、そして彼等の勞動が全く生産的となり、彼等が自由意思を以て、彼等の能力に應じて勞動に従事する時、國家は始めてX Xする。此の時、始めて「今までは歴史を支配してゐたところの、客觀的にして外部的なる諸々の力は、今や人間自身の統制の下に服する。この時よりして初めて、人間は完全なる意識をもつて彼等の歴史を自ら作るであらう。この時よりして初めて、人間によつて動力を與へられる社會的諸原因はまた、大體において且つ絶えず増加する程度において、彼等の望む結果をもたらすであらう。これ必然の王國から自由の王國への人類の跳躍である」X Xエンゲルス「反デューリング論」第四九〇頁）。

だが是非つけ加へておかなければならないことは、「X X主義の「高度」の段階が到來するまで

は、社會主義者は勞動の限度及び消費の限度に對する社會及び國家による最も嚴格なる監督を要求する。然し乍ら、この監督は資本家の收奪から、勞動者による資本家の監督から開始す可きものであり、且つ官吏の國家によつて遂行する可きではなくしてX Xせる勞動者の國家によつて遂行するべきものである」といふレニンの言葉である。この事こそ、一切の日和見主義者の忘却し無視してゐる處である。

五、階級細論

a、階級論の地位

我々は、本章の始めに於て、國家は、社會内に於て一の階級が他の階級を支配するための機關であり、階級のある處、必ず國家あり、國家ある處、必ず階級あり、といふのがマルクス主義の見解だといふことを云つた。従つて國家を論ずる場合、それは必ず、同時に階級を論じなければならぬ。國家と階級とを切り離してチリ／＼バラ／＼に取扱ふのは、決して科學的な立場に立つとは云ひ得ない、従つて國家論を述べ來つて、國家の歴史性を論じ去つた後に階級論を述べるの

は、些か順序が異なる譯ではあるが、前節までに於ては、主として國家そのもの本質、歴史性等を問題にしたのであるから、前節にてはそのしめくゝりの意味をも含めて、特に階級を主として論じて見る積りである。

b、階級の定義

階級とは何ぞや。之に對してブルジョア學者はいろいろの定義を與へる。或る者は現社會の華族とか士族とか平民とかと云つた風の族籍上に根據を認めたり、或は階級を經濟階級と社會階級とに分けて分限し身分と階級との混同をやつたりする。だから階級闘争と云つたり、國家は階級對立の所産だと云つたりしても、この階級とは何ぞやといふことがハッキリしなければ、それは何にもならないのである。

ブハーリンはその名著「史的唯物論」の中に於て、階級を定義して「階級とは、生産に於て同一の役割を演じ、生産過程に於て他の人々に對しては同一關係に立つ處の人々の總體を意味する」(「史的唯物論」檜崎輝氏譯、第四一頁)と云つてゐる。即ち階級とは何ぞやといふ問題の根本には生産といふことが横つてゐるのである。即ち再びブハーリンの言葉を借りて云へば「社會の

階級構造の根本には生産關係が横はつてゐる」のである。だから平民の工場主Aが士族B、貧乏華族C、平民Dを自己の工場に使用して居り、華族の工場主Aなる者が華族B士族C平民Dを自己の工場に労働者として使用してゐると假定すれば、ブルジョア學者の所論に従へば、華族C、A、Bは同一階級を形成し、士族B、C、及び平民A、D、Dも夫々同一階級を形成することになるのであるが、我々の定義に従へば決してさうではなくて、此の場合、生産に於て同一關係を有する工場主即ち資本家のA、Aは同一階級を形成し、労働者たるB、C、D、B、C、D、はまた同一階級を形成するのである。故に普通に壓迫階級と云つたり、被壓迫階級と云つたりしても、「壓迫」する階級、「壓迫」される階級といふ階級が單一な階級を作つてゐるのではなく、資本家階級と地主階級といふものが權力を握つて労働者、農民等を壓迫するのであるから、それは「壓迫」階級であり、又「壓迫される」労働者、農民、都市小ブルジョア(手工業者、小商人、俸給生活者、自由職業者等々)を「壓迫」されるといふ見地から、見て一括したのであるから、それは「被壓迫」階級と云ふべきものなのである。

又貧富の差といふこともこの場合、嚴密な意味に於ける階級の基準とはならない。或る礦山主

が經營方法が拙く借金で首が廻り兼ねてゐて、高利貸乃至金融資本家からギニー／＼云はされてゐても、鑛山労働者を搾取して食つてゐるといふ點に於いて、それは資本家に對して、たまく鑛夫の中に小金を持つてゐる人間がゐてもそれは労働者階級に違ひない。

c、階級發生の原因

階級を取扱ふに當つて、先づ第一に問題となるのは、一體階級とは如何なる原因によつて生じたかといふことである。

この點に關しては、國家の發生の處に於て一應觸れて置いた處であるが、それは、生産力の不足といふことが根本原因をなしてゐる。これについて再び、エンゲルスの言葉を思ひ出すこととする。

「搾取階級及び被搾取階級への、また支配階級および被抑壓階級への、社會の分裂は、これ從來の生産の發展程度の低かつたことの必然の結果であつた。

「社會の總労働が萬人のカツ／＼の生存に必要なものをゴク僅かしか越えないほどの果實しかもたらさない間は、従つてこの労働が大多數の社會成員のあらゆる又は殆んどあらゆる時間

を必要とする間は、社會は必然に階級に分裂せざるを得ない。」

然らば何故に生産力の不足が階級への分裂を引き起すか？ それは「すなはち、この徹頭徹尾労働に繫縛された大多數者と並んで直接の生産的労働からは免除された一階級が構成され、それが労働の指導、政治的工業、法律、科學、藝術等の如き社會の共同事務を取扱ふことになる」のだ。だから「分業の原則こそは、階級分裂の根柢をなすものに外ならぬ」

この分業——始めそれは個人的な分業であつたが、それが、官職の世襲制と共に次いで或る家族の分業となり、それが或る階級の分業となつたのだ。この過程をエンゲルスは別の處で次の如く詳細に説明してゐる——

「人間が初め動物界——狹義の——から脱けた時は、これ彼等の歴史に踏み入つた時であるが、そのときは尙ほ半ば動物の域を脱せず、従つて粗野であり、自然力に對しては無力であり、自分みづからに對しては無智である、従つて動物と同じく貧困で、動物より以上にあまり生産的ではない。そこでは生活状態は或る程度まで平等で、家長等の社會的地位もまた一種平等のものである——少なくとも社會階級は存しないのであつて、この状態はなほ後の文化諸民族

の原始的な農耕的共産體においても續いてゐた。

矣

「すべてかゝる共産體には始めから一定の共同利益が存するが、この利益の防衛は、たとへ全社會の監督のもとにおいてにせよ、ともかく個々人に委ねられねばならないものである、こゝに在りて共同利益とは、例へば争議の解決、個人の越権行為の禁壓、特に熱帯地方では河川沼澤の管理、そして最後に森林地帯では宗教的職能等これである。かやうな職務は如何なる時代の原始共産體にも存在する、……そしてこれ等の職務は一定の權力を賦與されたものであつて、國家權力の始源である。

「生産力は漸次増大する。人口の増加は個々の共産體間に或は共同の或は抗爭的の利害關係を生み出し、そしてこれらの共産體が（その利害關係を中心に）群を作つてヨリ大なる全體をなすに至れば、こゝにまた一の新たな分業が起る、——共同の利益を防衛しかつ抗爭的利益を防衛するための機關の設置、これである。この機關はその群全體の共同利益の代表者としても既に、各個々の共産體に對しては或る特殊な、場合によつては對立的でさへあるところの、地位を保有するのであるが、それがやがて次の理由により一層獨立化するやうになる、けだし第

一には、萬事が自然發生的に行はれる世界では殆んど當然にその職務の相續が行はれるからであり、第二には、他の群との衝突の増加するにつれてこの機關の必要が増大されるからである。「如何にしてこの社會的職能の社會に對する獨立化が、時と共に、遂には社會に對する支配にまで高まり得たか、如何にして始めは社會の奴僕であつたものが、機會に乗じて漸次その主人に變化したか、凡そこれらの事については、今こゝに述べべき必要はない。

「こゝで専ら定立しなければならぬことは、政治的支配はつねに社會的職務執行を基礎としたといふことである、そしてこの政治的支配はまた、それがこの自己の社會的職務執行を果たす限りに於てのみ存続した。如何に多くの専制政府がペルシャやインドに興亡盛衰したにせよ、そのいづれの政府も、自分が何はともあれ流域地方における灌溉——これをしなければ其處に農業は行はれない——の總括的企業家であることを、充分に知り抜いてゐたのである。」「反デューリング論」第二九二—二九四頁。

斯くの如く、分業といふことが、階級發生の一つの根源を形くつてゐるが、先きに一言して置いた如く、我々はこの分業といふ原因の外に今一つの階級分裂の原因を見る。それは即ち奴隸

制度の採用である。即ち社會が搾取する階級と搾取される階級とに分裂したのは、この二つの道行きを採つて行はれたのである。

「しかし、かゝる階級構成（即ち分業による階級分裂——筆者）と並んで今一つの階級構成が行はれた。農耕家族内における原始的な分業は、富が一定階段に到達すると、一人乃至數人の家族外の労働力を取入れることを可能ならしめた。取分け、このことは、古き土地所有が既に崩壊した地方または少なくとも古き共同耕作がそれ／＼の家族による割宛地の個人耕作に席を譲つた地方において、多く起つた。

「生産は大いに發展して、今や人間の労働力はそれ自身の單なる維持に必要なより以上を産出し得るに至つた、そしてヨリ多くの労働力を維持すべき資料も有してゐれば、これらの労働力の使用す可き要具も存してゐた、こゝにおいて労働力は一の價値を得た。けれども自己の生産體および是れの所屬する聯合體——（群）——は、何等の使用し得べき過剰の労働力を供給しはしなかつた。

「これに對して戰爭はこれを供給した、しかも戰爭は幾つかの生産體の群の同時的並存と同じ

ほどに古いものである。しかし今までは戰爭の捕虜を利用する方法がなかつたので、彼等はただ撲殺されるのほかなかつた、モット以前にはこれを人は喰つたのである。然るに今や到達された「經濟狀態」の階段においては、これらの捕虜は一の價値を得るに至つた、そこで人はこれを生かしておいてその労働を利用した……こゝに奴隸制度が案出された。

「この奴隸制度は間もなく、古き生産體を越えて發展した凡べての民族の下における生産の主たる形態になつた、がやがて又この生産の崩壊する主要原因の一ともなつたのである。」（同上 第二九五—二九六頁）

この奴隸制度は——氣の弱い道學者先生は大いに眉をシカメルかも知れないが、當時の生産力の發展、從つて社會の發展に非常な力を與へ、搾取の支配形態は、この奴隸制度であつたのである。

「奴隸制度は始めて農業と工業との間の大規模の分業を可能ならしめ、從つてまた古代世界の花たるギリシヤ文化をも可能ならしめた。奴隸制度なくしてギリシヤの國家なく、ギリシヤの藝術および科學はない、奴隸制度なくしてローマ帝國はない。……」

「……吾々は、如何にそれが矛盾的で異端的に響かうとも、しかも奴隸制度の採用は當時の事情の下においては一大進歩であつたと断言せざるを得ない。事實人間は動物から出發したものである、従つて野蠻状態を脱するためには、野蠻な殆んど動物的な手段を必要とした。古き生産體は、その存続した處においては、數ヶ年來、最も素朴な國家形態たる東洋的專制政治——インドからロシアまでの——の基礎をなしてゐる。たゞこの共產體の崩壊した處においてのみ、諸民族は自分みづからの舊套を脱して進歩を續けたのである、そして彼等の先づなした經濟上の進歩は、奴隸勞働による生産の増加と發展とであつた。そして人間勞働の生産力が未だなほ僅少で所要の生活資料以上の過剩を殆んど供給し得ない間は、生産力の増進、交易の擴大、國家や法の發達、藝術や科學の建設が、分業の發展によつてのみ可能なることは明かであるが、この分業の發展は、單純なる手の勞働にたづさはる大衆と、勞働の指導、商業、國家事務、及び後には藝術上および科學上の仕事を司る少數特權者との間における、一大分業を基礎としなければならなかつた。そしてこの種の分業の最も單純な最も原始的な形態が、正にこの奴隸制度だつたのである。」(前掲第二九六—二九八頁)

d、階級闘争の進展

斯くの如くにして階級が發生した。その後今日に至るまでの總べて従來の社會の歴史は、マルクスの云ふ如く、階級闘争の歴史である。而して古代に於ては奴隸の所有者—貴族なるものが奴隸を搾取し、従つて此の兩階級間に階級闘争が行はれ、中世の封建時代に於ては封建諸侯が農奴を搾取し、その間に階級闘争が行はれ來つたこと、此の主要階級の外にいろいろ雑多な階級があつたこと、是等の諸階級夫れ自身の間にも夫々小分けがあることは國家の歴史的變遷の處で述べた如くである。

e、階級利害

何故に階級闘争が行はれるかと云へば、それは、各階級が階級利害といふものを持つてその利害を擁護せんとして闘争するからである。

私は遂きにブハーリンの言葉を借りて「階級とは、生産に於て同一の役割を演じ、生産過程に於て他の人々に對して同一の關係に立つ處の人々の總體を意味する」と云つた。「生産は分配を決定する」と云はれてゐる如く、生産關係に於ける地位は、同時に生産物の分配に於ける地位を決

定する。故に生産手段を握つてゐる階級と、何等の生産手段を持たず生産手段の所有者に備はれてゐる階級との矛盾対立は、生産物の分配・収入の矛盾対立となり、同一階級内の個々の成員の利害は一致し、對立階級相互の利害は衝突する。これは最も基本的な、端的な、又最も一般的な、階級利害である。

此の生産物の分配に於ける階級利害は、即ち経済的搾取の領域に於ける階級利害は、政治的に固定させられてゐる。前にも云つた如く経済的に優越した階級は、必ず政治的支配機關を握つてゐるから、経済的利害は必ず政治的利害を招致する。経済的に支配し搾取してゐる階級は、常にその搾取を維持せんことを望み、経済的に搾取され支配されてゐる階級は、その搾取を廢止し経済的支配から免れんと欲する。けれども、此の場合、前者即ち搾取階級の方は強力なる政治權力を使用して自己の支配を脅かさんとする者を彈壓する。だから、被搾取階級は、若し搾取から免れようと思へば必ずこの政治權力と衝突する。そこに於ては政治的な利害となる。そしてこの政治的な利害が、眞實の、全部的な階級利害である。政治的利害の對立、抗争は即ち政治闘争である。故にマルクスは一切の階級闘争は政治闘争で

あると云つてゐる。その意味は以上の如く、一切の階級闘争は、結局政治權力を問題としなければ、解決されないことを云つてゐるのである。

かゝる階級利害は一時的、瞬間的な利害と厳密に區別されねばならない。野田醬油會社の争議で、一千何百人もの労働者がロック・アウトされるその時、數百人のストライキ破りが新たに「工員」として備はれる。その場合、新たに備はれた何百人かは、失業状態から脱却して食を得るのであるから、一見甚だ、利益の様であるが、それはストライキを敢行せる一千何百人かの労働者を犠牲とせるものであるから、それは決して階級利害ではない。又一階級内の集團の利害と階級全體の利害とを區別しなければならぬ。支那出兵によつて、軍需品工場に仕事が増え、或は賃銀が上り、或は新なる労働者を備入れ、又、労働時間の延長によつて収入が増加するとしても、支那出兵といふことは、支那勞農大衆の利害を徹底的に叩き伏せようとするものであり、サヴェート聯邦の脅威となり又國內の勞働大衆をXとして自國のブルジョアジーの利益に奉仕せよとするものであるから、支那出兵は、國內並に國際プロレタリアートの利害と全然相反する。従つて此出兵によつて、軍需品工場労働者の利益は一見増進されたかの如く思はれるが、これは

決して階級利害とは云へないのである。

かくの如く、一時的、瞬間的、部分的でない一般的、恒久的、全部的な階級利害を意識し、その實現のために闘はんとする決意を階級意識といふのである。そして、かかる階級意識は、階級の解放に取つて不可欠的の要素となるのである。

f、階級闘争の簡單化

然らば、この階級利害を中心とする階級闘争は、現代に於て如何なる形態を採つてゐるか、ここに於て我々は再び、マルクス・エンゲルスの言葉を思ひ出さねばならない。

「封建社會の廢墟から生れ出た近代のブルジョア社會も、階級對立を廢した譯ではない。それは、古きものゝ代りに、たゞ新たな階級と、新たな抑壓の條件と、新たな闘争の形勢とを置したのみである。

「けれども、我々の時代、即ちブルジョアジエの時代は、その階級の對立を簡單化した事を以て、特徴づけられてゐる。全社會は愈々益々二個の敵對せる二大陣營に、互ひに間近く對峙せる二大階級に、即ちブルジョアジエとプロレタリアートとに分裂しつゝある」

以前にも云つた如く、現在の社會は、ブルジョアジエとプロレタリアートの二大陣營に分裂し、この二大階級が闘争してゐるが、然しこれ以外に、階級が全然ない譯ではない。例へば日本を採つて見る。都市に於ては、ブルジョアジエ（資本家）があり、プロレタリアートがあり、中間階級乃至小ブルジョアジエとして小商人、小手工業者、自由職業者、俸給生活者があり、又ルンペン・プロレタリアート等々がある。而してブルジョアジエの中にも金融ブルジョアジエ、商業ブルジョアジエ等の別がある。又農村に於ては地主、大農、中農、小作人、小自作農、自作兼小作人、農業プロレタリアート（日傭、その他）半プロレタリアート（半農半工）等々があり、地主の中にも大地主あり、中地主あり、小地主ありと云つた状態である。是等の範疇の各々は夫々相異つた利害を有してはゐるが、又小作人や自作農の数は都市のプロレタリアートよりも遙かに多い。

だが基本的な、主要な對立は、ブルジョアジエ及びプロレタリアートの二大階級の對立である。一切の階級闘争が、結局はこの二大階級の闘争に統一される處に、現在社會の特徴があるのである。

論を進めて行く上に、こゝで一寸と言及しなければならぬのは、身分乃至分限 (Stand) といふことである。

ブルジョア學者が普通に階級と云つてゐるのは、實はこの身分を指すのである。例へば美濃部達吉氏は、前掲著に於て「國民の階級」と題する項の下に「皇族ヲ除クノ一般國民ノ階級ニハ、内地人ニ付テハ我ガ國法ハ華族、士族、平民ノ區別ヲ認ム。朝鮮人ニ付テハ別ニ朝鮮貴族ノ制アリ」と云つてゐる (第六三頁)。前に掲げた例を採れば、華族が貧乏してその子弟が工場に雇はれて居る場合、之は決して搾取階級に入らない。よく外國にある例だが、貴族が貧乏して門番なんぞになり下がる。その場合彼れは、身分的には貴族だが、その階級から云へば、寧ろルンペン・プロレタリアートである。我が國に於ても貧乏華族がメ×會とか稱する怪しい團體の會長に名義を借して僅かの名義料を買つてカツ／＼な生活をしてゐるのを見るが、之などもルンペンと云ふ可きであらう。

然らば階級と身分との差は何處にあるか。ブハーリンは次の如く云つてゐる——

「社會的階級は何によつて身分と區別されるか。吾々の見た如く、階級とは生産過程に於ける共同の役割に依つて相結ばれてゐる人々の一體、其各人が生産過程の他の關與者に對して可なり相似の地位にある處の人々の一體を意味する。之に反して身分とは、法制的、法律的社會秩序に於ける共通の地位に依つて相結ばれる人々の集團を意味する。大地主は一階級である。貴族は一身分をなすのである。何故か。大地主は一定の經濟的生產標識を有するが、貴族は之を持たないからである。貴族は一定の法律的、即ち當該國家の法律に依つて認定された權利及び、其「貴族身分」の特權を所有する。併し經濟的に見れば此貴族は非常に凋落してゐる殆んど坐食することが出来ないこともあり得る」(ブハーリン、前掲、第四一四—四一五頁)

昔は階級と身分とが割合に一致してゐた——といふよりも、階級が身分なる外被に包まれてゐたのである。然るにフランス革命を先驅として、ブルジョア革命は、一切の身分といふ外被を廢して了つた。ブルジョアジは身分なるものを必要とせず、反對に身分は資本主義發展のためには邪魔となつたのである。生産機關を所有するものはその身分に拘はらず經濟的搾取をしなければならぬし、生産機關を持たないものを、その身分に拘はらず、之を賃銀勞動者として搾取の對

象とすることが必要であつたのである。

「……社會の先資本主義的形態では資本主義に於けるよりも、全ての關係が遙かに保守的であり、生産歩調はより緩慢であり、諸變化はより少なかつた。支配階級は此處では田園貴族であつて、世襲階級とも云ひ得るのである。而して此關係の動くべき不動性は多數の法律的規範に依つて、一方には階級特權と地方には義務の確立を可能ならしめた。此不動性は、階級（又は諸階級に「身分」の衣を着せしめた。夫故に大體に於て諸「身分」は或階級に對立する諸階級又は階級諸集團と同一線上を進んだ。併し此調和は、從來よりも遙かに可變的にして流動的な商品—資本主義的關係の侵入に依つて直ちに攪亂された。即ち平民が出世し、所謂「成金」が発生した、そして之は全く有り觸れたことであつた。大地主の一部は資本家の形態を採り、他の一部は貧乏となり零落し、又他の一部は従前の水準に留つた等である。故に資本主義的關係の可動性は身分の存在の土臺を掘返して餘さなかつた。封建關係溶解の過渡期は、階級なる經濟的内容と身分的法律的外衣との不調和の増加にも表はれた。此時期に衝突も亦發生したが、夫は必然的に至身分組織の崩壞に導かねばならなかつた。身分なる外衣が資本主義的生產關係

の發達と兩立し得なかつたことは、宛かも、生産力の今後の發達に階級なる生産過程の外衣も亦合致しなくなると同然である。」（フーバー、前掲、第四一七—四一八頁）

「勞働者階級解放の條件はあらゆる階級の廢止である。宛かも、第三身分即ちブルジョアの秩序の解放の條件が、全ての身分と全ての秩序との廢止にあつたと同様」」（K. Marx, "Misère de la Philosophie" p. 219）

「ブルジョア階級の革命は、身分を其の特權もろともに廢止して了つた。ブルジョア社會は今迄は只階級を知るのみである。故にプロレタリアートが「第四身分」と名付けられたのは、全く歴史と矛盾するものであつた」（エンゲルス）

斯くして近代のブルジョア社會に於ては、身分なるものを知らず、たゞ階級なるものが、前面に押し出されて來て、所謂「純粹な形態に於ける階級の對立」が行はれることとなつたのである。勿論、今日の日本の如く、未だ華族といふ身分があるところもあるが、そして之等の華族は、政治的には貴族院の大部分を占領してゐるのも事實であるが、こゝでも問題は、地主としての彼等、或は資本家としての彼等であつて、華族としての法律的身分がさまで重要な意義を持つてゐるの

ではない。(勿論この事は、「成金」としてシコタマ金を儲けた連中が、或は「国防事業」へ、或は「社会事業」へ、或は元老の書き殴つた落書へ、莫大な献金をして、男爵といふ地位を狙ふことを妨げるものではない)

h、階級の廢止

階級の身分と異なること以上の如し。然らば身分が既に廢止された如く、階級も廢止される可きものであらうか。然り、階級の發生が社会の發展の一定段階の所産であつた如く、階級の廢止も社会の發展の一定段階に入れば實現する。

「……階級分裂が斯くの如く或る種の歴史的正当づけを有するとしても、それは、たゞ或る一定の時代において、或る一定の社会的條件においてのみである。階級分裂は生産の不充分を根拠とした、従つてそれは近世生産力の完全なる發展によつて一掃されるであらう。そして事實、社会階級の廢止は、たゞ或る一定の是れ又はあれの支配階級の存続ばかりではなく、支配階級一般の、従つて階級差別そのものゝ存続が、一の時代錯誤となり、陳腐となるやうな、一の歴史的發展段階を前提とする。それ故に社会階級の廢止は、實に或る特殊なる一社会階級による

生産手段および生産物の占有、従つてまた政治的支配や、教育の獨占や、ないしは精神的指導や、等の占有が、たゞに不用となるのみでなく、経済的にも、政治的にも、また智的にも、むしろ發展の妨害となるやうな高き生産發展の一段階を前提とするのである。この點は今や到達されてゐる。(エンゲルス)。

ブルジョア社会は異常なる生産力の發展を齎らした。だがブルジョアの秩序は今やこの發展の極端と化してゐる。この極端をメメして更らにより高き生産力の發展を齎らすことがプロレタリアートの歴史的使命であつて、プロレタリアートは、被支配階級としての自己を揚棄すると共に、階級一般を揚棄する。マルクスも云ふ如く「ブルジョアの生産關係は、社会的生産關係の最終の敵對的形態である。

i、プロレタリアートの歴史的使命遂行の過程

斯くの如き歴史的使命を有つ處の、プロレタリアートは如何なる過程を経て、この使命を遂行するであらうか。

「ブルジョアジーが、封建制度を顛覆したその武器が、今はブルジョア自身に向けられて

「だがブルジョア階級は、自己を殺すべき武器を製造した許りではなく、またこの武器を使用すべき人間即ち近代的労働者階級——プロレタリアートを作り出した。」

「かくてブルジョア階級、即ち資本が發達すればする程、それと同じ割合を以て近代的労働者階級、即ちプロレタリアートが發達した。」

「プロレタリアートは、種々の發展段階を経過する。ブルジョア階級に對する彼等の闘争はその存在と共に始まる。最初は個々の労働者が、次には一工場内の労働者が、次には一地方に於ける一労働部内の労働者が、直接に彼等を搾取する個々のブルジョア階級に對して闘争する。彼等は、未だブルジョアの生産關係に對して攻撃するのではなく、生産要具そのものに對して攻撃を向ける。即ち彼等は、外國の競争品を破壊し、機械を叩き×はし、工場を×き拂ふ。……」

「この段階にあつては、労働者は未だ全國に散在し、競争の爲に分裂せる大衆を形成する。當時、労働者が多數團結をした如き場合があるとすれば、それは未だ彼等自身が結合したのではなく、ブルジョア階級の結合した結果である。ブルジョア階級は、自己の政治的目的達成の

ために、全プロレタリアートを動かす必要があり、そして暫らくはそれをなし得るのである。故にこの段階にあつては、プロレタリアートは自己の敵と闘争せずして、自己の敵の敵、即ち專制君主制の遺制、地主、非工業的ブルジョア階級、小ブルジョア階級と闘争する。かくして全歴史運動はブルジョア階級の手に集中される。かくて獲得される總べての勝利は、ブルジョア階級の勝利である。

「然るに産業の發達と共に、プロレタリアートは單にその數を増したばかりではなく益々大なる大衆に押し集められ、従つて彼等の力は増大し、また彼等は益々自己の力を感じる。機械は次第に労働の差異を抹消し、殆んど到る處に於て、賃銀を同一の低い水準に引き下けると同時に、プロレタリアートの利害、プロレタリアート内部の生活状態は益々平均して来る。ブルジョア階級同士の間には於ける益々激化する競争、及びそれより生ずる商業恐慌は愈々労働者の賃銀を動搖させる。不可避の勢ひを以て益々急激に發達する機械の改善が益々労働者の全生活を不安定にする。個々の労働者と個々の資本家との衝突は漸次、兩階級間の衝突たる性質を帯びて来る。そこで労働者は資本家に對して組合を作り始める。彼等は賃銀を維持するため

に、集合する。彼等は之等の臨時の反抗運動のために、常設團體を組織する。こゝ、かしこに闘争は爆發して××となる。

「時々労働者は勝利するが、それは一時的に過ぎない。彼等の闘争の事實の成果は、その直接の結果にあるのではなくして、たゞ労働者の團結が絶えず擴大するにある。労働者の團結は、大工業が作り出した交通機關の發達によつて助長される。交通機關の發達は、諸々の地方の労働者をして、互ひに聯絡をとらしめる。

「たゞこの聯絡の助けを以て、到る處に同じ性質を有する無数の地方的闘争が、一の全國的闘争、一の階級闘争に集中される。そして階級闘争は必ず政治闘争である。中世紀のビュルガ―が到達するためには、數百年を要したであらう處の、かうした團結をば、近代のプロレタリアートは、鐵道のおかげで僅か數年の間に成就する。

「プロレタリアートのかかる階級への組織、従つてまたその政黨への組織は、また絶えざる労働者自身の間の競争によつて破壊される。だが、それは必ずまた勃興して、一層強くなり、一層有力となる。」(Communist Manifesto, p. 28—29)

「互ひに團結せんとする労働者の第一の試みは常に組合の形態を採る……かくして組合は常に二重の目的——即ち彼等相互間の競争の廢絶と資本家に對する全體的競争をなすこと——を有つてゐる……この闘争(賃銀値上げ等々のための經濟闘争)——それは眞實の内亂である——に於て、來るべき戰闘のために必要なる總べての要素が集合し發展する。一度びこの點に到達するや組合は政治的性質を帯びて來る。

「經濟的條件は、先づ一國の大衆を労働者に轉化した。資本の支配は、この大衆に對して、一の共通の地位、共通の利害を作り出した。かくして、この大衆は、既に資本に對しては一の階級(une classe vis-à-vis du capital)であるが、未だそれ自身に對しては一の階級ではない。闘争——我々は未だその若干の段階しか示さなかつたが——に於て、この大衆は、集合し、自身に對しての階級(Classe pour elle-même)を構成するにいたる。彼等が擁護する利害は階級利害となる。だが階級の階級にたいする闘争は政治闘争である。」(K. Marx, Misère de la philosophie p. 216—217)

階級發達の第一段階、即ち資本に對しての一階級を普通に「階級それ自體」(Klasse an sich)

と云ひ、第二段階を「それ自身のための階級」(Klasse für sich)と云ふ。(ブルジョアも、矢張りかゝる二つの段階を経て、封建諸侯を倒したのであつた)プロレタリアートがこの「それ自身のための階級」となり、階級闘争が激化してそれが一定點に達するとXとなるのである。このXに於いてプロレタリアートはXの権力を握り、ブルジョアから凡ての資本をXし、凡ての生産要具を、國家の手に即ち「支配階級」として組織されたるプロレタリアートの手に集中する。そして生産力の發展を計るのである。かくして發展せしめられた生産力は階級の廢止の前提條件を形成する。如何にして、如何なる過渡期を経て階級が廢止され、從つて階級支配の機關として國家が「死滅」するかは、前に既に述べた處であるから、省略することにしよう。次にエンゲルズの有名な言葉を引いて、階級論を了へることとする。――

「社會によつて生産手段の掌握されると共に、商品生産は除去され、從つてまた生産者に対する生産物の支配も除去される。社會的生產の内部における無政府状態は、計量的にして意識的なる組織によつて置きかへられる。個的生存競争はなくなる。こゝに初めて人間は、或る意味において、決定的に動物界から訣れ、動物的生存條件から脱して眞に人間なる生存條件に入る。

る。今に至るまで人間を支配せるところの、人間を取り巻く生活條件の外圍は、今や人間の支配と統制のもとに服し、人間は茲に初めて意識的にして眞實なる自然の主人となる。これ人間が彼等自身の社會結合の主人となるからであり、又なることによつてである。今までは外部にあつて人間を支配する自然法則として人間に對立してゐたところの、人間自身の社會的行動の法則は、かくて人間により完全なる理解をもつて應用され從つてまた支配されることとなる。今までは自然と歴史とにより強制されるものとして人間に對立してゐたところの、人間自身の社會結合は、今や彼等自身の自由なる行動となる。今までは歴史を支配してゐたところの、客觀的にして外部的なる諸々の力は、今や人間自身の統制のもとに服する。この時よりして初めて、人間は完全なる意識をもつて彼等の歴史を自ら作るであらう。この時よりして初めて、人間によつて動力を與へられる社會的諸原因はまた、大體において且つ絶えず増加する程度において、彼等の望む結果をもたらずであらう。これ必然の王國から自由の王國への人類の跳躍である。

「この世界解放の事業を遂行するは、近世ヨーロッパの歴史的使命である。」

「この事業の歴史的條件にしたがつて又その性質そのものを闡明し、かくしてそれが遂行の使命を負はされたる今日の被壓迫階級に對して、彼等自身のこの行動の條件およびその性質を意圖せしめること、これがプロレタリア運動の理論的表現たる科學的社會主義の任務である。」
(エンゲルス、「及デューリング論」第四八九—四九〇頁)

三

第二章 政黨

一、政黨の意義

黨とは何ぞや？

マルクスは、「總べての階級闘争は政治闘争である」と云つたがレニンはこの政治闘争に於ける政黨の役割を評價して「政治闘争の最も完成した、統一的な形態は黨と黨との闘争である」と云つてゐる。従つて階級闘争の尖鋭化した今日政黨なるものゝ本質、機能、形態等の研究が非常に必要になつてゐることは言ふまでもないことである。

「黨とは何ぞや？ この問題は一見甚だ簡單である——諸君はこの問題を無益なことだとさへ思はれるであらう。だが實は決してさうではない。「人間にとつて最も交渉の多い諸方面の科學的定義を論ずる場合——社會的團體に關しては特にさうだ——階級を異にし世界觀を異にする毎に、その代表者が種々の社會的團體に向つて下す定義が如何に異なるかは、諸君が殆んど常に見られる所であらう……」

「二階」といふ言葉はラテン語の Pars 即ち部分から出たものである。そして今日吾々マルクス

主義者は、黨とは一定階級の一部だと言つてゐる。ブルジョア社會の代表者の考へは勿論吾

吾とは違ふ……

「諸君は、ブルジョア科學では「黨」といふ言葉の定義が非常にマチ／＼であることを見られ
るであらう。そしてその代表者が、黨とは階級の闘争組織だと突込んで明言することは甚だ稀
である。この簡単な、吾々の誰にでも極めて明かな真理を、ブルジョア學者達は、議會政治や
教會の本質を指摘することを避けると同じ理由から、認めようとしなしいし、又認めることも
出来ないものである。ブルジョア制度はその性質上、あらゆる制度を——プロレタリア階級の歴
史に役立つ——階級協調、階級調停の機構だと胡亂化す必要に迫られてゐる。それを輿論と見
せかけねばならぬ、自分自身をもかういふ形で見せかけねばならぬ。決して階級闘争と見せか
けてはならないのである」(ジノヴィエフ「ロシア社會民主黨史」)

この様に、政黨とは何ぞやといふ問題に關して、ブルジョア政治學者は頗るアイマイな定義を
與へてゐる。また單に札つきのブルジョア學者のみならず、プロレタリアートの味方面をしてゐ

る連中も政黨に關しては明確なる觀念を持たないものが、——少くとも明確な觀念を發表するこ
とを躊躇するものが頗る多いのである。

b 階級の頭腦としての黨

元來、階級なるものは、全體として見れば同一の範疇をなしてゐるのであるが、その個々の成
員を見れば、階級意識とか、闘争力とかといふ點でいろいろと差異の存するものである。故に、
このいろいろな分子を含む階級全體を有効に闘争させるには、その指導部分を必要とする。そ
の部分即ち政黨なのである。

「……吾々は、暫らく假りに、労働階級が完全に、絶対に等質であるとしよう。其時には、勞
働階級は毎も完全な政黨として現はれ得たであらう。あらゆる行動の指揮には順番に人々又は
人々の集團を選び得たであらう。即ち指導の永久的な組織は無駄となり、不要となるであらう。
併し、實際には事情は全く之と異なる。労働階級の闘争は避くべからざるものである。此闘争
の指導は必要である。敵手が狡猾であり、之との闘争が苦戦であればある程、闘争の指導は益
々必要となる。何人をして至階級を率ひしむべきか。階級の如何なる部分をして率ひしむべき

か。勿論、最も進歩せる、最も開明ある而して最も階級せる部分をしてとある。

「政黨は階級ではなくて、階級の往々にして小なる一部分である。併し政黨は階級の頭腦である此の理由からして、政黨を階級に對立せしめんと欲することは、極めて不合理である。労働階級の政黨は正に、階級の利害を最もよく表はす處のものである。階級と政黨とは、頭腦と人體全部とを區別する如く之を區別し得る。併し之等を對立させることは、人に長命を望む限り其人から頭を切り離すことが出来ないと同様出来ないとである。」(フハーリン前掲、第四五〇—四五二頁)

斯くの如く、政黨とは、階級の頭腦であり、指導部分である。政黨のかかる意義は、單に労働階級の政黨に關してのみ言ひ得られるのではない。同時にそれは、他の階級の政黨に關しても言ひ得られることである。

先づ、ブルジョア政黨の批判から始めよう。

二 ブルジョア政黨

● 政黨の生誕

政黨の生誕は先づブルジョア政黨を以て始まる。

中世紀の封建諸侯、乃至その集中的權力たる絶対専制君主と闘つて、ブルジョアジーが今日の如き支配的地位を戦ひ取るためには、ブルジョアジーは、今日プロレタリアートがブルジョアジー自身に對するが如く、封建諸侯乃至絶対専制君主と政治的に闘はねばならなかつた。そしてこの政治闘争を指導するために、彼等は彼等自身の政黨を持たねばならなかつたのである。

「ブルジョアジーに於ても、我々は二つの段階(即ち階級)それ自體と、それ自身のための階級との二段階——筆者)を區別することが出来る——即ちブルジョアジーが封建制度並に絶対君主制の支配の下に、自らを階級として構成した段階と、ブルジョアジーが既に階級として構成されて、社會をブルジョア社會とするために、封建制及び君主制を顛覆する段階とに。これらの段階の第一は長期に亙るものであり、また最も大きな努力を必要としたのであつた。ブルジョアジーもまた、封建諸侯に對して部分的な組合を以て始めたのであつた」(Marx "Misere", p. 217—218)

この組合によるブルジョアジーの團結の發展せるものがブルジョア政黨である。

三六

b ブルジョア政黨とデモクラシー

ブルジョア政黨が封建諸侯並に絶対專制君主に對する闘争に於て把持してゐた指導精神は所謂
デモクラシーである。このデモクラシーなる概念は、ルネッサンス以來の個人生活解放運動の思
想的基礎をなしてゐたものであるが、それはルツソーの「社會契約論」及びモンテスキューの「法
の精神」においてその理論的代表者を見出した。ルツソーは、——既に第一章に於て述べた通り
に、「社會契約論」に於て人間は本来自由なるものであり、たゞ共同生活の必要上、社會契約に
よつて國家を作り、その支配の下に服してゐるのであるから、專制君主乃至封建諸侯が人民を壓
制するのは怪しからんといふことを主張し、自由、平等、博愛を高潮し、又、モンテスキューは
英國に發達した議會を研究して立法、司法、行政の三權を分立せしめねばならぬ。即ち「權力
分立論」——所謂「三權分立論」を提唱した。ルツソーの契約論は勿論一個の假説であり、また
モンテスキューの云ふが如く、權力なるものは決して「分立」したものではなくて、時の支配階
級が一手に握つてゐるものであるけれども、此の二つの論は、當時、專制君主乃至封建諸侯の壓

制に備へてゐたブルジョアジーの心を捉へて彼等の反抗に理論的基礎を與へ、專制××倒す可し
封建諸侯責む可しとの聲が高まつたのである。

此のデモクラシー、即ち自由、平等、博愛の叫びは、やがて一七八九年のフランス革命となり、
此の革命をきっかけとして、全歐洲はブルジョア・デモクラシー革命の波に洗はれて、到る處、
ブルジョアジーは勝利を得て、封建制を一掃したのであつた。そしてモンテスキューの權力分立
論は各國の政治制度に採用されて、所謂立法議會の成立を見、殊にその典型的な形態をアメリカ
憲法に見出したのであつた。そして議會を中心とすると稱する政黨政治、憲法に則ると云ふ立憲
政治が遍く布かれることとなつたのである。

かくの如く、ブルジョアジーは、封建諸侯及び絶対專制君主に對しては、自由、平等、博愛の
大旗を振りかざして闘つたのであつたが、一度び自己が權力を握るや、殊に二十世紀の初頭より
所謂帝國主義時代に入るや、彼等の云ふ自由は労働者を搾取し××するの「自由」と化し、平等
とは形式的のみで事實認めるのではなくて、獨占を求めたのだ。彼等は最早やブルジョア・デモ
クラシーを追求することに何等の利益を感じない。否彼等は刻々彼等の牙城に迫りつゝある力強

いプロレタリアートの勢力を見て、之が強壓をのみ只管思ふのである。

二二

○ 我が國に於ける「政黨政治」

我が國の例を見ても、現在ブルジョア政黨として政友、民政の「二大政黨」が對立してゐる。此の兩者の中、政友會は自由黨の後身であつて、この自由黨こそは、我が國に於ける政黨の草分けなのであるが、自由黨が勃興した明治初年に於ては、それは舊地主（封建諸侯）を中心とする明治政府の政敵に對抗して、ブルジョアジー（尤もそれは、當時未だ極めて未發達の状態にあつたが）、小ブルジョアジー及び新地主が組織せる聯合的政社であつた。そして明治政府に蟻居する封建的勢力と勇敢に闘つて、自由の大旗を眞向に振りかざして猛進したのであつた。最早で一刺客に襲はれた板垣退助の「板垣死すとも自由は死せず」といふ有名なセリフは、決して一板垣の芝居氣を示すものに非ずして、當時の自由黨を結成してゐた連中は、本當にこの意氣込みを持つてゐたのである。そして當時の所謂藩閥政府に對抗して、全權到る處、血の雨を降らして闘つたのであつた。

○ 吾思へばアメリカの

獨立したるもむしろ旗

こゝらで血の雨降らさねば

自由の土臺が固まらぬ」

といふ歌は當時の「志士」の血を湧かしたのであつた。

だが此の自由に燃える自由黨も、一回、二回と議會が進むに従つて完全に政府と妥協して了つて「自由」を追求しなくなつた。そして「一聯の内部的闘争及び妥協」の過程を経てブルジョアジーと封建的勢力とは緊密なる政治的プロツクを形成して了つたのである。民政黨の歴史に至つては、始めよりかゝる封建的勢力とブルジョアジーとの「妥協」以外の何ものでもない。そしてこの封建的勢力（地主的勢力）とブルジョアジーとのプロツクの中に於て、ブルジョアジーは最近——特に歐洲大戦以後、急速な過程を以てそのヘゲモニーを確立し、従つてブルジョア政黨は第一に金融資本家の勢力を代表するものとなつたのである。之が世に云ふ「政黨政治確立」である。

d、ブルジョア・デモクラシーの内容

ブルジョア・デモクラシーの具體的内容をなすものとしては、

土地革命

政治的自由、殊に言論出版集會結社の自由

が最も重要である。我が國の農村は明治革命によつて十分に土地××が行なはれないで、その生産様式は舊態依然たる封建の様式である。農民、殊に小作人は土地に饑ゑて居り、高率の小作料と地主と官憲との奴隸的待遇に泣いてゐる。だが今日のブルジョアジーにはこの土地問題を解決する力がない。地主は彼等の同盟者であり、有力なる支持者である。だからこの土地問題を地主に不利に解決することは、彼等にとつて致命的打撃である。この問題を解決するのは農民自身が他の階級の支持によらねばならぬ。こゝに農民を××的勢力として數へ得る理由があり、労働者と農民との××的政治的プロツク形成の歴史の必然性が消んでゐるのである。

また今日の日本の政治に於ては、所謂政治的自由なるものが極めて缺乏してゐる。治安維持法、治安警察法をはじめとすら一聯の法律によつて、人民の言論の自由、出版の自由、集會の自由、結社の自由はお話にならぬ程制限されてゐる。歴史的使命を有するプロレタリアートは云ふも更らなり、都市の小ブルジョアジーも此の政治的自由の彈壓に對しては憤激する。だが今日の帝國

主義的ブルジョアジーはかゝる政治的自由を欲しないで、「支配と彈壓」を欲する。過般の總選挙の時に大毎主催の各政黨代表者の立會演説會が大坂で開かれたが、その時、民政黨の代表者として同黨顧問の床次氏が「現政府の下では言論の自由がない、言論の自由を奪はれて無産政黨の方も氣の毒だ」とか云ふ意味のことを云つたと記憶してゐるが、「過激法案」の提出者たる床次氏、政友會内閣の内相として、徹底的に民衆の自由を彈壓した彼れが、かやうなことを云ふのは、白々しいにも程があるのであつて、これがために、民政黨が「言論の自由」を尊重するものだなどと思つては大間違ひである。

○ 我が國の二大ブルジョア政黨——「二大政黨論」の偏謬性

目下、日本のブルジョア政黨は、政友、民政の「二大政黨」に分れてゐるが、その階級構成、指導者の性質、綱領、政策、から見ると、その間に何等の本質的な差異がないことを知ることが出来る。政友、民政共にブルジョアジー及び地主を主たる構成員として、之に小ブルジョアジー運れたる労働者農民層を捕へてゐる。たゞ政友會の方が比較的に地主的勢力を多く握つてゐるといふ點だけで、世間では政友會を以て地主黨となし、農村には比較的、政友會の支持者が多く見

られるのであり、之に反して、民政黨は、比較的都市ブルジョア階級を多く握り、都市に於て「評判がよい」のである。だが、兩黨とも、その内部に於ては、ブルジョア階級、殊に金融資本家が覇権を握つてゐるのであつて、政友會は主として三井系資本の利益を代表し、民政黨は主として三菱系の資本家の利益を代表してゐるのである。そして、各政黨は、總裁と稱する獨裁者がゐる。萬事總裁の「指名」によつて決定せられることとなつて居り、その内部的組織は、極端なる非民主主義的な原則が横行してゐるのだがこの總裁も決して實質上の獨裁権を握つてゐるのではなくて、「幹部」と稱する一群の職業政治家がゐる。金融資本家の御川を承つてその指令の下に動いてゐるのである。だから、總裁の「獨裁」は「幹部」の獨裁であり「幹部」の獨裁は結局は「金融資本家」の獨裁である。總裁の行動が金融資本家の御意に召す範圍内に於ては、——少くとも金融資本家の利益を傷けない範圍内に於ては、總裁の「獨裁」は許される。だが、一度び彼が金融資本家の利益に反した行動を採つたり、十分に金融資本家の利益のために行動し得ない様な場合に於ては、彼はいとも容易くその總裁としての地位から追拂はれる。高橋ダム君が政友會を追はれたのも、芝罘コク堂居士が總裁の地位から引きつり下ろされたのも、皆此の理由に基くので

あつて、田中大將だつて、濱口ライオン君だつて、何時その地位から追拂はれないとも限らない。即ち「ガン首のスゲ換へ」は一に金融資本家の意思によるのである。五大銀行（第一、三井、三菱、安田、住友）の代表者の秘密會合で決まつたことは、二三日して直ちに閣議へ持ち出されて政府の政策として決定されると言はれてゐるが、さう云つた様な關係が成立してゐることは、決して想像出来ないことではない。

世には二大政黨對立論と云つて、二大ブルジョア政黨が代る／＼内閣を組織して、一方は「朝」に立つて「政治」を行ひ、他方は「野」に在つて「施政を「監視」して互ひに制肘せしむるのが憲政の常道だ、政黨政治だと云ふのであるが、これ程眞つ赤な偽りはなく、兩政黨とも同じく資本家地主の政黨として、コミンテルンのテーゼの所謂「政權タラヒ廻し」によつて、一方の支配が勞働者農民の眼をゴマ化し切れなくなると、他方が之に代つて、あたかも「他黨」の施政を矯正するかの如き、幻想を大衆に與へ、以て大衆の眼を巧みにゴマ化さんとするものである。二大ブルジョア政黨の對立などは決して本質的なものではなくて、本質的な對立は、ブルジョア地主の政黨とプロレタリアートの政黨との對立である。これに就てジノヴィエフは次の如く云つてゐる——

「……一階級がよく幾つかの政黨を持つてゐることがあるぢやないかと云つて私を攻撃する人があるかも知れない。成る程、それに違ひない。例へばブルジョアジーは全體として幾つかの黨を持つてゐる。……だが私は云ふ、否と。吾々はブルジョア諸黨が實際には箇々の獨立黨ではなくして、單一なるブルジョアジーの黨の諸分派であることを考へなければならぬ。

「これら諸分派には牡雞の様につき合ふ事がある——特に選挙の時はずうである——が普通には紙太刀で渡り合ふだけである。時には人民の間に彼等の間に重大なる意見の相違があるかの如く見せかけることが、彼等に有利な場合がある(例へば、今回の治安維持法改正問題について政友は緊急勅令による可しと云ひ、民政は臨時議會を召集せよと云ふので、前衛を死刑にするといふことについては何等意見の對立がなく、たゞその手段方法を異にしたのみであつた——尤も後には、來議會の政權奪取のママ——心——の必要上からか、緊急勅令の通過が確實となつてから、改正の内容そのものにもか弱い反對の意思を見せてゐるが——筆者)。然し實際に於ては、數百萬人に關係ある根本問題になると、彼等は完全に一致する。彼等が争ふのは第一義的問題に就いてだけだ。人々をベリケードで職はしたり、××を起させたり、××や

飢饉で苦しめたりする根本問題、すべてかふいふ問題に就いては、殊に私有財産の問題に就いてはあらゆるブルジョア黨は一致する。だから吾々が、根本問題に就いては、唯一の大ブルジョア黨——奴隸使用者、私有財産所有者の黨——があるだけだと言つてもそれは結局に於ては全然正當なのである。」(ジノヴィエフ、前掲)。

我が國のブルジョア政黨は未だ多くの労働大衆の遅れた層を捕へてゐる。我々は不斷の努力によつて、ブルジョア政黨からこの遅れた労働大衆を奪還せねばならない。この事なくして労働者農民の解放は決してあり得ないのだ。

三 無産階級政黨

共產黨宣言は、無産階級のブルジョアに對する様々の闘争が、階級の成熟につれて、必然的にブルジョア政權への闘争——政治闘争——へと發展して行く必然性のあるものであることを我々に教へた。現下の階級闘争は、最早や、疑ひもなく、政治闘争である。

無産階級の階級的成熟の様々の段階に於て、その様々の闘争を政治闘争として導き、更にそ

其の意

れらを、無産階級の歴史的使命の完全なる遂行にまで発展せしめるための統一的指導機関が、戦格なる意味に於ける無産政黨である。かゝる意味に於ける無産政黨の代表的ものは、各國に於けるX黨である。

だが、現在、無産政黨として名乗りを擧げてゐるものの中には、X黨の外に、それとは遙かに性質を異にした第二インターナショナルに屬する諸政黨がある。我々は、それを、社會民主々義政黨と呼んでゐる。ドイツの社會民主黨やイギリスの労働黨の如きが、その代表的のものであり、我國の社會民主黨の如きが、明かに、その亞流であり。

更に、我國には、前述の二つの性質の無産政黨の外に、労働者、農民、小市民大衆を夫の構成要素とするところの、日常政治闘争のための大衆的政治組織がある。我々は、それを大衆黨と呼ぶ。その代表的のものを、我々は先頃田中反動政府のために解散を命ぜられた労働農民黨に見出すことが出来る。以下、前衛黨、社會民主々義政黨、大衆政黨等の各々の性質・機能・形態等を略述することにしよう。

A 前衛黨

a 前衛黨の性質

前衛黨は、先きに一言ふれておいた通りに、ブルジョア政權への無産階級の様々の闘争を統一的に指導し、且つそれらを無産階級の歴史的使命の完全なる遂行にまで発展せしめて行くための組織である。それ故、前衛黨は、何よりも殊に「プロレタリアートの參謀本部」として特徴づけられてゐる。

私は、既に、労働階級の闘争の困難さに就いて、闘争の諸条件の複雑さに就いて、戦術及び戦術に就いて、豫備軍とマニウバー（作戦のカケヒキ）とに就いて、語つた。これらの諸条件の凡ては、よしそれが、戦争の諸条件以上に複雑でないとしても、その複雑さに於ては決して、それ以下ではない。誰れが、その地位の適任者として、幾百萬のプロレタリアに正しい方向指示を與へることが出来るか？ 戦争に於ては、もし彼等が、確實なる敗北を欲しないならば、経験の豊富な參謀本部なしにやつて行くことは出来まい。プロレタリアートの闘争もかゝる參謀本部なしには、うまくやつて行けないといふことは、全く明白ではないか、だが、どこにこの參謀本部があるか？ この參謀本部は、たゞ、プロレタリアートのX黨の黨以外に

其の意

蒸気

はない。X X 黨を持たぬ労働階級は、多量本部なき軍隊である。黨は、プロレタリアートの軍事本部である。」「スターリン「レーニン主義の基礎」

前衛黨が、もし、かゝる任務を完全に遂行しようと欲するならば前衛黨は、如何なる條件を具へなければならぬか？ 更にスターリンの説明を聞かう。

「黨は、先づ第一に、労働階級の労働階級でなくてはならない。黨は、それ自身に、労働階級の最良の諸要素、そのの基礎、そのX X 的精神、プロレタリアートの利益に對する無條件的献身を結合しなければならぬ。然しながら、眞實に前衛黨となるためには、黨は、X X 的理論を以て、運動の諸方針の、即ちX X の諸方針の知識を以て築はねなければならぬ。でなければ、黨は、プロレタリアートの闘争を遂行し、プロレタリアートを指導する黨の任務を果すことは出来ないであらう」

「……然し、黨は、單にそれが、前衛黨であるといふだけではない。黨は、同時にまた、その生存のすべての根を、最も緊密に階級に張るところの、その階級の、一部でなければならぬ。前衛黨と労働階級の大衆との、黨員と非黨員たちとの間の相異は、なほ階級がある間は、換

言すれば、プロレタリアートの中へ、尙ほ、諸階級の諸要素が流れ込む間は、そして、労働階級が、それ自身を全體として、前衛黨の水準にまで引き上げることの出来ない間は、抹消されてはならない。だが、もし、さうした相異が、分離（黨と大衆との）に導かれるならば、即ち、もし黨が、それ自身を、大衆から孤立せしめ、非黨員大衆から離れるやうなことがあるならば黨は、黨でなくなる。黨は、もしそれが、非黨員大衆に結びつけられてあるのでなければ、もしそれらの大衆が黨の指導を拒否するならば、もし黨が、大衆の間に、何等の精神的・政治的信用を持たないならば、階級を指導することは出来ないであらう。……黨は労働階級の不可分の部分である。」

これと同一の意見が、コミンタンの「日本問題に關する決議」の中にも詳しく述べられてゐる。そこでは、日本X X 黨の労働階級からの孤立化を極度に戒しめてゐる。續いてスターリンの説明を聞かう。

「……黨は、單に労働階級の労働階級といふだけではない。もし黨が、眞實に、労働階級を指導しようと欲するならば、黨は、同時にまた、その階級の組織されたる部隊であらねばならぬ。」

黨の仕事は、資本主義の下に於ては非常に大きなものであり、且つ多様のものである。黨は、
内的及外的發展の非常に困難なる諸關係の下に於て、プロレタリアートの闘争を指導せねば
ならない。もし、諸般の事情が、それを必要とするならば、プロレタリアートを攻勢に導かね
ばならないし、もしまだ、諸般の事情が、退却を要求するならば、プロレタリアートを敵の襲
撃から脱せしめねばならぬ。黨は、未組織の、非黨員の労働者の幾百萬の大衆の間に、闘争に
於ける訓練と計畫的行動との精神と、組織と忍耐との精神とを注入しなければならぬ。しかし
ながら、黨は、それ自身、訓練と組織の體現である時に於てのみ、それ自身が、プロレタリア
ートの組織されたる部隊である時に於てのみ、この仕事を遂行するに耐へるであらう。かゝる
諸條件なしには、黨によるプロレタリアの幾百萬の大衆に對する眞實の指導といふやうなこと
は、問題にならないのである。黨は労働階級の組織されたる部隊である「スターリン前掲書」
b 前衛黨の組織原則

前衛黨は、前述の如き性質の政黨であるから、前衛黨に於ては、黨の組織の問題が決定的な重
要性をもつてゐるのである。ロシア社會民主労働黨が一九〇三年のロンドンに於ける第二回黨大
會に於て、ボルシエヴィキ（多数派）とメンシエヴィキ（少数派）とに分裂したのも、組織問題
に就いての意見の相異からであつた。——即ちメンシエヴィキが、黨員の資格を極くルーズに解
釋したのに對して、ボルシエヴィキは、黨員の資格に就いて、嚴密なる定義を要求したのである
即ち、第二回大會に於て、メンシエヴィキのマルトフは「黨員とは黨の綱領を承認し、黨統制
の下に活動し黨の組織を何等かの方法で援助する者を云ふ」と提議した。之に對して、レーニン
は「黨員とは黨の綱領を承認し、物質的に黨を支持すると共に個人的にも黨の一組織に参加する
者を云ふ」と提議した。これは決して單なる言葉の上の論争ではない。黨員の性質に關してのこ
の論争の中にこそ、黨を××的黨とするか、それとも改良的黨とするか、といふ黨の本質に關し
ての最も重要な意見の對立が見られるのである。これについて、レーニンは「我々は不秩序な黨
大衆を——パン種を持たうとしてゐるのではない。眞のプロレタリアからなる完全なる組織を持
たうとしてゐるのである。」と言つてゐる。現在の各國の××黨は、レーニン主義のこの原則に従つ
て組織されてゐるのである。今、ロシア××黨の組織を例に採つて、カガノヴィツチの云ふこと
ろを聞かう。——

「二、各黨員は活動的なメンバーでなければならぬ、彼は黨の組織の生活とその仕事に参加しなくてはいけない。それこそ、第二回黨大會に於てレーニンが擁護し、而して第三回大會に於て決定的に確認された處の、黨規約第一條の内容をなすものである。この項の表現は、第四回大會に於て修正され、「物質的支持」といふ曖昧なる言葉の代りにハツキリと、「各黨員は黨費を納入し黨の一切の決定を實行す」と書かれた。現在の黨規約は「黨員は單に黨に加盟するのみでは不十分であつて、彼は黨に於て活動し、黨内に於て一定の仕事を持ち、その仕事の執行後、當該組織にその報告をせねばならぬ」と書かれてゐる。

「二、規律——黨内部に於ては諸問題について自由なる討論を許すが、少数者は多数者の決定に絕對に服従することを條件とする。レーニンは常に「プロレタリアト黨に於ける黨の規律」のために闘つて來た。レーニンは常に、かう云つてゐた、——黨はフラクシオンや、グループや、黨派の寄せ集めではないと。彼は統一した、單一的な結集體たる黨を欲し、且つその創造に成功したのであつた。

「三、集中主義は常に我が黨の組織の根本原則であつた。この集中主義は、我が黨にあつては

民主主義——即ち選挙制及び地方組織の自治等々と結合されてゐる。この民主主義は、黨の活動す可き情勢に應じて、或ひは擴大され或ひは縮小される。かくして、一九〇五—一九〇六年以前にあつては、黨は各段階の指導者を選挙せしむることが出来なかつた、そしてポルシエツイキはがゝる民主主義と闘つたのであつた、——何となれば、當時の如き反動的情勢に於ては嚴格なる中央集權なくしては、また指導者が選出される代りにその地位に任命されることなくしては、黨は生存し得なかつたのである。一九〇六年に黨規約は民主主義に向つて一歩前進した。一九一八—一九二〇年には、反革命に對する武力闘争は黨をして民主主義を新少し、その任事の方法を軍隊化さへもした。黨は選挙制と地方組織の自治を縮小せねばならなかつたのである。

「四、黨の基礎、その「城壁」は工場にある。そこにこそ、黨細胞の活動場所がある。最初の規約には、細胞に關する特殊な項節を設けなかつた。だが、その時も既に、黨組織の實際に於ては工場細胞が支配的地位を占めてゐたのであつた。細胞を基礎とする黨の構成は、黨の全政策を——即ち、選挙や議會のための結合を目的とせずして、資本主義のXXを目的とせる黨の

全政策を、組織の方面に於て表現せるものである。細胞は黨と大衆とを緊密に結合せしめ、戰鬥準備の整つた宏大なる軍隊を黨自身に供給する。この細胞組織の方法は、サヴェート權成獲得のための闘争に於て我々の克ち得た成功に取つて偉大な功績をした……

「五、黨は、労働組合、協同組合、サヴェート等凡ゆる黨外の労働者の大組織をば之等の諸組織の内部に構成せるコムユニエットのフラツクシヨンを通じて指導する。黨は決してそれに命令するのではなく、夫等の活動に對して（之等の諸組織内で闘争してゐる黨員を通じて）卓越せる階級的指針を與へるのである。かゝる卓越せる指針なくしては、力もXX的活動も四分五裂されて了つて、勝利はかほど容易くはなかつたであらう。」（カガノヴィツチ、「ロシアXX黨の構成」）

右の五つの原則の中で、特に八釜しく云はれるのは第二の規律であつて、所謂「鐵の規律」はXX黨の誇りとする處であり、黨内に決して分派を許さない。これ資本主義といふ大敵を向ふに選はしてのプロレタリアートの闘争を指導するには、統一した單一體となつてブツからねば、到底その目的を達することが出来ないからである。

然らばこの鐵の如き規律は如何にして獲得され保持されるか？ これについてレーニンはかく云ふ――

「然らば此所に先づ次の疑問が起る。即ちプロレタリアートのXX黨の規律は何によつて維持し得られるか？ また何によつてそれは統制され、強力なるものとなされるか？ 先づ第一には、プロレタリアートの前衛の階級意識と、XXに對する彼等の献身と克己と自己犠牲の精神と勇氣とによつて。第二には彼等前衛分子が労働者の大衆と――第一にプロレタリア的労働者と第二にまた非プロレタリア的労働大衆と――連絡し、合同し或る程度迄彼等と融合することを理する事によつて。第三には、此等前衛によつて實現されるところの政治的指導と政治的戰略と戰術の正しきこと――是等の政治的指導と戰略と戰術との正當なることを、廣汎なる大衆が彼等自分自らの經驗によつて確信するに到るといふ條件の下に――依つて。凡そ是等の條件なくしては、ブルジョアジーをXXし、全社會をXXすることを目的とする、この階級の前衛黨たり得るところのXX黨の規律を實現することは出来ぬ。是等の條件なくしては、規律を確立しようとする凡ての試みは必然的に無に歸し、一片の空論となり、單なるコメディ

に化するのである。然し他方に於て是等の條件は一朝一夕に成立するものでは決してない。それは唯長い間の努力と苦しい経験とによつて造り上げられ、またそれ自ら一個の獨斷ではなくして、唯××の實際運動の現實と緊密に結合することによつてのみその決定的形態を取るところの正しい革命の理論によつて發達を促進せられるのである。〔左翼小兒病〕

c. 黨と指導者

階級に政黨が必要であると同じく、政黨には指導者が必要である。よき指導者の正しい指導があつてこそ、この政黨は「階級の頭腦」としての役割を果すことが出来る。だから、階級に黨を對立せしむることが誤りであると同時に、政黨に指導者を對立せしむることも亦誤りである。之に於てブハーリンは左の如く云つてゐる――

「我々は既に、階級の不均一性が、その階級の政黨の必然性に於て、その表現を見出すものだ、といふことを見た。だが「存在」の資本主義的諸條件と、文化水準――單に勞動階級のそれだけでなく、爾餘諸階級さへものそれ――の低級との結果として、プロレタリアートの前衛すなはちその政黨もまた、同様に不均一的なものだ、といふやうな形勢が生ずる。それ〔政

黨〕は、勞動階級の他の諸部分と比較すると、多かれ少なかれ、均一的である。だが、若し我々がこの前衛の様々のちがつた諸部分を、換言すれば政黨そのものゝそれらを、檢索するならば、我々は容易に、その内部的不均一性を確認することが出来るであらう。

「その場合に於ても、階級の場合に於けると精密に同じことが言ひ得られる。

「我々をして、事實の實際とは反對の一場合を、即ち、政黨〔内部〕の――階級意識とか、經驗とか、指導能力とか、等々に就いての――完全なる均一性を、假定せしめよ。さうした場合には、無論、如何なる指導者たちの必要もなからう、〔即ち、〕「指導者たち」の諸機能が、すべての〔黨員たち〕によつて、何等の不都合もなく、執行されることが出来るよう。

「だが、實際に於ては、前衛の内部に於てもまた、完全なる均一性は毫も存してゐないのである。そして、「そのことが、指導者たち」と呼ばれるところの、指導的任務をつくす諸個人の、多少の程度に於て常住的な團體の必然性の由つて生ずる所以の根本原因である。

「だから、よき指導者たちは、彼等が最もよく當該政黨の正しき諸傾向を表現するが故に、指導者たちなのである。そして、政黨と階級とを對立せしめ〔て思惟す〕ることが不合理である

通りに、政をこの政黨の指導者たちに對立せしめ「て思惟す」ることもまた不合理である。

「けれども、我々が労働階級を、社会民主黨の指導者たちに對立せしめたときに、若しくは、組織労働者たちを彼等の指導者たちに對立せしめたときに、さういふことをして来た。我々は、だが、社会民主黨を崩壊せしめるために、社会的裏切りものである指導者たちを通じて自分たちの勢力を張るところのブルジョアジーを崩壊せしめるために、さういふことをしもしたし、また現にしてもゐるのである。と言つて、若し人が、敵の組織を崩壊せしめるための諸方法を我々自身の上に轉用しようとするならば、それは非常に變なことだと言はねばならぬ。」(プリン「史的唯物論の理論」)

d ブルジョア議會に對する前衛黨の態度

第三インターナショナルは、第二回大會に於て、ブルジョア議會に對する前衛黨の闘争に關して、左の如き決議をなした。

「すべての階級闘争は政治闘争である。なんとすれば、それは結局、權力のための闘争だからである。全國にひろがる××は、如何なるものも、ブルジョア國家への恐威であり、したがつ

て、政治的性質を帯びるものである。ブルジョア社會を××せしめようとする試み、そして國家××をしようとする試みが、即ち、政治闘争を遂行しようとする試みである。反抗するブルジョアジーを所理し、且つ抑壓するための一のプロレタリアの階級的機關を作ること——この機關が如何なる性質のものであれ——は、政治的權力をすることである。

「従つて政治闘争の問題は、議會に對する問題と徹頭徹尾一致して居るといふわけではない。前者はプロレタリアートの階級闘争の一般の問題である。それは、小さき、そして部分的の諸闘争の、資本主義的秩序一般の××のための一般の闘争への昇進といふことによつて特徴づけられてゐる。

「ブルジョアジーに對する、換言すれば、國家權力に對する最も重要な闘争方法は、何よりも殊に、大衆行動である。大衆行動は、一の統一的な、訓練された、集中された××黨の一般的指導の下にあるプロレタリアートの××的大衆組織(労働組合、政黨、ソヴェエツト)によつて組織され指導される。××は一の戦争である。この戦争に於て、プロレタリアートは、闘争の凡ての分野に於ける作業を指導するところの勇敢なる政治的將校團を、その強大なる政

治的參謀本部を持たねばならぬ。

「大衆闘争は、それ自身を、その形態に於て尖鋭化するところの、そして論理的必然として、資本國家に對するX Xにまで導くところの、自ら刻々發展して行く諸行動力の一の全體系である。それ自身をX Xに發展せしめるところのこの大衆闘争に於て、プロレタリアートの指導は凡ての合法的地位を鞏固にしなければならぬ。なんとすれば、かかる指導黨は、それらの合法的地位を、黨のX Xの行動に於ける支持點となし、そして、これらの合法的地位を、主要な戰鬥隊の、即ち、大衆闘争の大隊の計畫に従屬せしめるのだから。

「かかる支持點は、ブルジョア議會の演壇である。議會闘争への参加に反對するための、議會はブルジョア國家制度であるといふ論據は、こゝでは、徹頭徹尾、引き合ひに出されてはならぬ。X X黨は議會内でその機能に屬する仕事をするために、そこへ遣入つて行くのではなくて、議會の内部から、大衆を助けるために、國家機關と議會そのものとをX Xするために遣入つて行くのである。たとへば、ドイツに於けるリープクネヒトの、ザーのデューマ(議會)に於ける、「民主的評議會」に於ける、ケレンスキーの「前議會」に於ける、及び「都市デューマ」に於

けるポルシエヴィキの行動の如き、最後に、ブルガリヤX X黨の行動の如き。

「議會に於けるかかる活動——議會の演壇からのX X的アチテーション、敵の曝露、未だなほ懸れてゐて、民主主義的幻影に囚はれ議會に對して期待をかけてゐる大衆の精神的集、等々——は議會外における大衆的闘争の目的並に任務に従屬されねばならぬ。

「X X黨員が、自治體議會に於て多數を制してゐる時には、彼等は、

- a ブルジョア中央權力に對するX X的反對を敢行しなければならぬ。
 - b 貧窮大衆への任務を盡すために、凡てのことがなされなければならぬ。(經濟的諸方策、X X労働者X Xの編成、或はその編成の試み、等々)
 - c あらゆる機會を利用して、眞實に、ブルジョア國家權力が、大なる諸變化に對して設けてゐる諸限界を示さねばならぬ。
 - d この基礎の上に、國家權力とのX Xを恐れることなしに、最も尖鋭なるX X的プロパガンダを、展開しなければならぬ。
- 或る諸條件の下に於て、自治體管理、等々を、地方的労働者評議會によつて置き代へ

ねばならぬ。——自治體管理に於ける××黨員の全活動は、資本組織の全般的——作用の構成部分であらねばならぬ。

「選挙戦そのものは、當選者の最大多数を獲得の精神に於て行はれるべきでなく、プロレタリア××の遂行のための××的大衆動員の精神に於て行はねばならぬ。選挙戦は、黨員の全大衆によつて遂行されるべきであつて、ただ黨の選抜分子だけによつて行はれてはならぬ。それに関聯せしめて、丁度その時に現存する凡ての大衆行動(××、示威運動、×××の間に於ける××等々)を、利用し、それらと緊密なる同情同感に遣入つて行くことが必要である。すべてのプロレタリア大衆組織を活潑なる行動に引き入れることが必要である。

「凡てのこれらの前提諸条件の、並に、特殊の訓令に於て示されてゐる前提条件の嚴守によつてのみ、我々の議會行動は、議會に遣入り込むところの諸國の社會民主主義諸政黨が、この民主的制度(議會)を支持するために、若しくは、高々、それを、征服するために用ゆる、かの卑劣なる政治的カケシキの直接の反對物となる。××黨は、専ら、ただ、カール・リーブクネヒト及びボルシェビキの精神に於てのみ、議會の××的利用をなすものである。」

(コミンタン第二會大會決議、前後を省略す)

。前衛黨と第三インターナショナル

各國の××黨は、全部第三インターナショナル(コミンタン)に加入してゐる。第三インターナショナルは、各國××黨の國際的組織であり、その最高機關である。現在、各國の××黨は第三インターナショナルの支部として、その指令に基いて活動して居る。プロレタリアートの歴史的使命遂行のための闘争は、最早や、各國單獨の闘争ではなくて、世界的に統一された一の有機的全體としての階級闘争である。左に第三インターナショナルの規約を掲げることにする。

第三インターナショナルコミンタンの規約(抜萃)

一、新國際労働者團體は、階級の完全なる廢止、社會の第一階段たる主義の實現のために、……を唯一の目的として努力するところの、萬國プロレタリアの共同行爲の組織のために設立せられたものである。

二、新國際労働者團體は「××インターナショナル」と名づけらる。

三、××インターナショナルに屬する凡ての黨は「何國××黨」(××インターナショナル支部)と

名づけらる。

一

- 四、X X インターナショナルの最高機関は、加盟諸團體の世界大會である。
- 五、世界大會はX X インターナショナルの執行委員会を選任する。
- 六、X X インターナショナルの執行委員会の所在地は、X X インターナショナルの世界大會が、その時々之を定める。
- 七、X X インターナショナルの臨時世界大會は、執行委員会の決議に依り、又最近のX X インターナショナル世界大會の時に加盟してゐた所の諸黨の半数の要求に依て之を開く事が出来る。
- 八、執行委員会の主要任務は、世界大會の決議に基いて執行委員会所在地と定められたる國のX X 黨に、之を委任する。
- 九、執行委員会は一大會期日より他の大會期日までの間のX X インターナショナルの全仕事を指導し、X X インターナショナルの中央機關紙（雜誌「X X インターナショナル」）を少くとも四ヶ國語を以て發行し、X X インターナショナルの名に於て必要な指令を出して、凡てのX X インターナショナル加盟團體及黨に對して拘束力ある規程を與へる。

十、X X インターナショナルの執行委員会は、X X インターナショナルに加盟してゐないが、然し之に同情を持ち接近してゐる團體及黨の代表者を、顧問的資格を以て執行委員会に参加せしむる權利を有する。

十一、X X インターナショナルに加盟し、又はX X インターナショナルに同情を持つものの中に算へらるゝ凡ての黨及凡ての團體の機關紙は、X X インターナショナル及其の執行委員会の凡ての公式決議を出版する義務を負ふ。

十二、全ヨーロッパ及アメリカの一般状態は、全世界のX X 黨をして、合法的團體の外に非合法的X X 主義團體の創設を必要ならしめてゐる。執行委員会は、之を至る所に實現せしむる事に努力する義務を負ふ。

十三、X X インターナショナルに加盟する個々の諸黨間の政治的交渉は、原則としてX X インターナショナルの執行委員会を通じて行はる。

十四、X X 主義の原則を認め、X X インターナショナルの指導の下に國際的規模の上に結合させる諸組合は、X X インターナショナルの組合部を構成する。之等諸組合は、X X インターナシ

ヨナルの世界大会に於ては、當該國のX X黨を通じて代表者を派遣するものとなる。(註)
十五、X X青年インターナショナルはX Xインターナショナルの成員として、他のすべての成員と同じく、X Xインターナショナル及執行委員會に從屬する。

十六、X Xインターナショナルの執行委員會は、X X婦人運動の國際書記を確認し、X Xインターナショナルの婦人部を組織する。

十七、X Xインターナショナルの各成員は、一國より他國への移住に際しては、その國の第三インターナショナル成員より、友愛なる支持をうけるものとする。

(註) 労働組合の國際組織は、別に、「赤色労働組合インターナショナル」として樹立された。

f 日本X X黨

全世界の殆んど凡ゆる「文明國」に於て、X X黨は、合法的政黨として存在してゐる。だが、我國に於ては、X X黨は、まだ合法性を獲得してゐない。日本X X黨が何時頃から存在してゐたかは、門外者たる我々の知り得ざるところであるが、今春の總選挙を機會に、日本X X黨は、公然、その存在と政策とを示した。その後、三月十五日に例の大選挙が行はれ、數百名の前衛闘士が奪

ひ去られたことは、已に諸君の知らるる通りである。

日本X X黨の組織、綱領等は、まだ知ることを得ないが、その當面の行動行領として示されてゐるものは左の十三である。(四月二十五日、政府がブルジョア諸新聞を通じて發表したものに據る。)

- 一、X X X X X X
- 二、議會の解散
- 三、十八歳以上の男女、普通選挙權
- 四、言論、出版、集會、結社の自由
- 五、一切の労働者、農民抑壓法の撤廢
- 六、八時間労働制
- 七、資本金全額負擔の失業保險
- 八、X X、寺院、地主等の土地無償沒收
- 九、高度の累進所得稅

- 十、サウイエート聯邦の防衛
- 十一、支那革命に對する不干渉
- 十二、戦争の危機に對する闘争
- 十三、植民地の完全なる獨立

第三インターナショナルの「日本問題に關する決議」は、日本に於けるX X Xの問題を取扱つた部分に於て、左の如く論じてゐる。

「労働者階級は、その最も前進的、X X X的意識的、組織的部分たるX X Xの指導下に於てのみ勝利を確保することが出来る。ドイツ、特にハヴァリアに於ける、又ハンガリア及びイタリアに於ける経験は、鞏固に組織せられた、且つ理論的に純化した大衆的X X Xなくしては、プロレタリアの勝利は不可能である、といふレーニンの思想の絶対に正しいことを證明してゐる。「日本X X X指導部の主要なる誤謬の一は、X X Xの役割の過少評價、それに對する無理解、並に労働運動に於けるその特殊なる重要性の過少評價にあつた。X X Xが多少なりとも左翼労働組合、フラクション並に大衆的労働者農民の政黨によつて、代置され得るといふ考へは、徹

底的に誤謬であり、日和見主義である。獨立なる思想的に健全なる、規律ある集中的な大衆的X X Xなくんば、X X X運動の勝利は決してあり得ない。清算主義的傾向のあらゆる形態、就中同志X X Xの政策に表れてゐるそれに対する闘争は、それ故にX X X X X X X X Xの第一の任務である、すべての労働者の闘争に對して、その一般的利益の爲に、そのX X X的前衛たるX X Xが之を指導することが必要である。

それ故に、今日、X X Xに於ける主要なる任務はX X Xの量的改良を遂行することである。Xはその思想的政治的水準を高める爲に強烈なる活動を行ふと同時に、又そのX員を擴大しなければならぬ。日本のプロレタリアートのすべての進歩的X X X的要素を、その陣営内に包含し組織しなければならぬ。そして一歩一歩日本労働運動に於けるその指導的地位を鞏固にし獲得しなければならぬ。」(コミンタンの「日本問題に關する決議」より)

B 社會民主々義政黨

a. 社會民主々義政黨の性質

現在、歐洲各國に於ては、大抵社會民主主義政黨がある。(その名稱は各々異つてはるるが——例へばドイツの社會民主黨、フランスの社會黨、イギリスの労働黨と云つた様に) 彼等は國際的に團結して、第二インタナショナルを形成してゐる。

彼等の中の大抵のものは、歐洲大戰までは、革命的マルクス主義政黨を氣取つてゐたのであつた。そして、歐洲大衆の危機迫るや、何れも「戦争に對す戦争」を語り、戦争防止のためには總同盟罷業を執行す可しと申し合はせた程だつたが、戦争一度び歐洲の天地を被ふや、昨の革命家は忽ち愛國主義者となり濟まして、「祖國擁護」を叫び出し、各自國のブルジョアと協力して、互に相殺戮し合ふことゝなつた。こゝに於て、第二インタナショナルは完全に死滅したのであつたが、戦後應面もなくその形骸のみを整へて、ブルジョアジの組織する國際的團體たる國際聯盟の別働隊としてプロレタリアートの解放を無限の彼方に押しやらんともがいてゐるのである。

社會民主主義發生の温床地は、所謂労働貴族である。即ちブルジョアジは、自己の儲けの何百分の一かを割いて、上層の労働者を買収し彼等を労働者大衆一般から切り離して自己の御用を勤めさせ、自己のために、プロレタリアートを偽瞞し、より安易にその搾取を續けて行かうとするのである。

故に社會民主主義の一大特徴は、反マルクス主義であり、反共産主義である。それはブルジョアジの代理人たる役目の性質上、さうならざるを得ないのであるが、彼等は大衆を偽瞞して自己の地位を保持せんが爲めに、凡ゆる陰險な手段を盡して、反共産主義の宣傳をやるのである。従つて彼等は「愛國主義者」であり、非國際主義者である。彼等と雖も一應は、第二インタナショナルといふ國際的組織を有つてはゐる。だが、帝國主義ブルジョアジですら、國際聯盟といふ國際的組織を有つてゐる事實を考へれば、別段に不思議なことでもなく、又彼等の國際主義を示す證據にはならない。假令第二インタナショナルを形成してゐても、自國のブルジョアジの利害と相容れない様な問題が起れば直ちに愛國者に早變る次第なのである。

次に社會民主主義政黨は改良主義的であつて、決して××的ではない。之もブルジョアジの御用を力むる以上、説明するまでもないことである。

第三に、それは、議會外の大衆を一切議會内の議員團の下に置かうと云ふ、徹頭徹尾議會主義

的政黨であり、黨員とは、選挙の際の投票場を集めるの踏臺に過ぎない。だからレーニンは云ふ——「……勿論、労働黨（英國の）は大部分労働者から成立してゐる。しかし、一の政黨が眞に、労働者政黨であるか否かは、それが労働者から成立してゐるか否かのみならず、何人に依つてそれが指導せらるゝかといふこと、並に其行爲と其政治的戰術の内容の何なりやといふことに依存する。眞にプロレタリアートの政黨を有するか否かといふことが我々には重大問題だ。」この唯一の正しい見地からすれば、労働黨は、徹頭徹尾ブルジョアの政黨である——それは労働者から成立してゐるが、反動主義者によつて指導されてゐる……英國のシャイデマン並にノスケによつて、英國の労働大衆を組織的に欺瞞するためのブルジョアジの組織である……」かくの如く、社會民主黨とは、その構成員からすれば、労働者の黨であるが、その指導精神からすれば、ブルジョア政黨の左翼であり、社會民主黨者はブルジョアジの代理人に過ぎない。だからこそ、第二インタナショナル死滅後、ロシアの社會民主労働者黨（ボルシエヴィキ）はマルクス、エンゲルスの昔に歸つて、名もXX黨と改め、從來第二インタナショナルに屬してゐた諸國のXX的政黨は、全部此のインタナショナルを棄て、新にXX的な第三インタナショナル

ルを組織すると同時に、その名もロシアのXX黨に倣つて自らをXX黨と稱するに至つてゐるのである、そして之は決して名稱のみの問題ではなくして、實にその指導精神、政治的性質、黨の綱領の問題なのである。

勿論、社會民主黨者の中にも、右翼もあれば中間派もあり、又、左翼すらもある。右翼は最も露骨にブルジョアジの御用を力めるのであり、（階級闘争の觀念を全然放棄して労働黨のブルジョア化を更に徹底せしめんと企てゐる、英國のマクドナルド、スノーデンの輩は國際的な好典型だ）中間派は、たゞ革命的言辭を弄して自己の改良主義を大衆の眼より陰蔽せんとするものであり、左翼に到つては自らマルクス主義とさへ、コムニニストとさへ名乗り、マルクスを引き、レーニンにより、自らの日和見主義をゴマ化し、却つて眞のマルクス主義者、コムニニストを攻撃し、大衆から分離せしめんと計り、結局はプロレタリアート農民の大衆をブルジョア地主に賣り渡さんとする者であつて、その毒害から云へば、決して、カン／＼の右翼社會民主黨者に劣らず、否却つてレーニンの云ふ如く、「色彩の不鮮明な味方面した奴は、色彩のハツキリした奴よりも有害だ」といふ意味に於て、ヨリ以上の警戒を要するのである——金ピカを付けた

警察官よりも、闘士面して味方の陣營に入り來りその秘密を伺ふスパイの方がより警戒を要する
と同じだ。

b 社会民主主義に對する闘争の必要

その右翼、中間、左翼を論ぜず、社会民主主義者に對する斷乎たる闘争は、苟くもプロレタリア
アートの農民の解放を欲する限り、不可缺の條件である。日本のマルクス主義者の社会民主主義者、
殊に左翼社会民主主義者に對する闘争は、未だく不十分だと云はれてゐるのも、かゝる理由に
基くのであらう。

最後に、社会民主主義に對する闘争の必要、日本に於けるその現實的意義について、コミンテ
ルンの教ふる處を紹介することにしよう——
「今日の事情の下に於て、如何なるX X Xも、社会民主主義に對する闘争を行はずして發展す
ることは出来ぬ。このことは日本に於ても完全にあてはまる。

「日本に於ける社会民主党は、一萬二千の黨員と、労働組合に組織せられた十五萬の支持労働
者とを有してゐる。社会民主主義指導者は買収されたるブルジョアジーの代理人であつて、そ

の命令の下に彼は日和見主義と愛國主義と社会帝國主義を以て大衆を毒しようとして試みてゐる。
大衆獲得の闘争、就中社会民主主義的労働者獲得の闘争は、社会民主主義指導者、蔣介石
の方向と結びついた、支那革命に對する彼等の裏切的政策、議會主義的幻影の流布、似而非自
由主義的ブルジョアジーの助手たり追隨者たる彼等の役割を曝露せしめては、不可能である。
「X X Xは又特に所謂「左翼」社会民主主義者の裏切りの役割を曝露しなければならぬ。此
の中央派は今日、約六千の黨員と組合に組織された五千の労働者農民の支持を受けてゐる日本
労働黨に於て指導権を握つてゐる。此の黨の指導者とその右側の兄弟との相違は、すべての「左
翼的」社会民主主義者がさうである様に、唯彼等が左翼的言辭を弄することにあるに過ぎない。
これによつて彼等はX X X的労働者の前に彼等の日和見主義を陰蔽してゐるのだ。従つて社会民
主主義の此の一變種の曝露は——一の最も緊急なる闘争の任務の一である。

「日本資本主義の客觀的地位及び日本労働運動の歴史的發展は、社会民主主義の勢力に對する
闘争に異常に有利なる形勢を作り出してゐる。日本の労働者階級は、數十年間の歴史を有つ強
力なる社会民主主義的組織を有してゐない。従つて又そこには何ら根強い社会民主的傳統もな

い。改良主義の一般的な、又基本的な基礎である熟練労働者の上層は、日本に於ては比較的豊
きたるものである。平均賃金は極度に低い。窮乏せる農村地方より不斷に流れ込む莫大なる勞
働力、農村過剰人口の巨大なる壓迫、特にそれはアメリカが移民に對して門戸を閉鎖して以來
強烈となつた——は、資本主義下に於ける日本労働者の生活水準の向上を著しく望み少い
ものたらしめてゐる。勿論日本資本主義は帝國主義的資本主義である以上、労働者階級の上層
の若干の部分を買収する能力は或る程度に於て之を有してゐる。だがアメリカの組合主義を日
本に移植しようとする改良主義者の努力が失敗に終はるであらうといふ事は、今日既に之を豫
言することが出来る」

○ 大衆政黨Ⅱ階級的共同戦線黨

α 大衆政黨の性質

大衆政黨は如何なる性質の政黨であり、又あらねばならぬか、我々の意見を簡單に要約すれば
次の通りである。

- 一 大衆政黨は資本家地主の反動的プロツクに對立する労働者、農民、小市民、大衆の政治的プロツクである。
- 二 大衆政黨は、帝國主義的反動政治に對抗して、労働者、農民、小市民大衆の政治的經濟的利益を擁護し獲得するための政黨である。
- 三 大衆政黨は、ブルジョア・デモクラシーの獲得を目的とする政黨である。現下の状態の下に於ては、ブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争に於て、労働者、農民、小市民、大衆の利益は最もよく擁護され得る。
- 四 大衆政黨は、あくまで行動のための黨でなくてはならぬ。斷じて、議會主義の黨であつてはならない。それは、常に、果敢なる日常政治闘争を展開することによつて、労働者、農民、小市民、大衆を戰闘的に鍛練し、労働者、農民の政府樹立のための前提条件を獲得することを目的とせねばならぬ。
- 五 それは、合法的政黨であることが望ましい。××黨は日本の現状を以てしては、治安維持法のために、地下的、秘密的、非合法的な存在を餘儀なくされてゐる。だか、大衆政黨は、遅れた

る大衆をもその成員として抱擁す可きものであるから、合法的存在を持つことが、望ましい。だがこゝで断つて置かねばならぬことは、戦闘的政黨が合法的政黨であり得るかいなかの問題は、結局は階級と階級との力の問題であるといふことである。大衆政黨が合法性を獲得せねばならぬといふことは、けつして、支配階級に憐憫を乞ふことではない。それはけつして、支配階級の要求するがまゝに讓歩に讓歩を重ねて、何んでもかんでも支配階級に合法性を認めて貰ふことではない。それは、労働者農民の力によつて、支配階級——資本家地主階級をして、この政黨の合法性を認めさせることである。労働者農民の解散命令の場合を例にとつて云へば、資本家地主政府が、労働者農民の政治的結集體に向つて解散を命じて、その合法性を奪つても、そのために労働者農民の日常的政治的要求のため闘争が消えてなくなるものでもなければ、又そのための闘争組織の實體がなくなるものでもない。否、益々高まり行く資本家地主の攻勢を前にして、日常闘争は益々尖鋭化し、その闘争組織の實體は益々發展して行くのである。たゞこの闘争の力、大衆の力が弱い時には資本家地主階級をしてこの闘争の實體を合法的に承認させる事が出来ないだけの話であつて、労働者農民が、自己の闘争組織體たる大衆黨の合法性を闘

ひ取らうと思へば、資本家地主に哀願することを止めて、自己の闘争力、闘争組織の實力を強本にし、この強められた闘争力、その強められた闘争組織によつて、資本家地主階級に「さあ認めろ！」と要求することである。この好箇の實例は、過般のドイツの赤色戦士同盟の解散であるが、ドイツの戦闘的労働者は不法極まる同盟の解散命令に對して、X X黨の指導の下に全国的に大示威運動を決定し、ベルリンだけでも十五萬人の労働者を動員し、遂に最高法院をして「赤色戦士同盟の解散命令は不當なり」と判決せしめ、同盟の合法性を大衆の力によつて奪還したことである。繰り返して云ふが、大衆黨は合法性を必要とするが、それは決して資本家地主階級の哀れみを乞ふことではなくて、労働者農民の大衆の力によつて此の合法性を獲得することである、換言すれば、合法非合法の問題は、結局は、相對立する階級の力と力との問題なのである。

b 大衆政黨とブルジョア・デモクラシーの獲得

現下の状態の下に於る労働者、農民、小市民大衆、の政治的・經濟的利益擁護の爲の一切の日常闘争は、ブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争に統一され集中される。ブルジョア・デ

モクラシー獲得のための闘争こそ大衆政黨の中心的闘争目標である。ブルジョア・デモクラシーの獲得は「政治的自由の獲得」と「農民問題（土地問題）の解決」との二點に歸する。

現在、我國に於ては、政治的自由は、極めて、僅かしか獲得されてゐない。なるほど、憲法には、言論、集會、結社の自由が規定されてゐる。だが、問題は、現實に政治的自由が獲得されてゐるか否かに在る。政治的自由は現在獲得されてゐるか？ 否！ 我々が頭をあげて周囲を見渡す時、そこに暗慘たる灰色の世界が展開されてゐるではないか！ 労働者が、自己の社會的地位からの當然の要求として、賃銀値下げ反対、解雇反対、労働時間延長反対等々々のスローガンを掲げて「工場代表者會議」を開く時、農民が生活の基礎を現實に脅かされて「立入禁止反対」「立毛差押反対」等の運動を起す時、その他、議會解散請願運動、對支非干涉運動、家賃値下げ運動、等々の運動が巻き起された時、そこには、例外なしに、極度の壓迫干渉がある。殊に、最近に於ける労働農民黨、労働組合評議會、無産者青年同盟、等の合法的結社に對し政治的權力の亂用、更に、言論、思想、學術の領域に於てはもとよりのこと、音楽、美術、演劇等々の分野に於ける自由の極度の制限、新聞、雜誌、圖書、等々の頻々たる發禁、等々々々。

現在の如く、實生活上の諸要求に立脚する無産大衆のあらゆる實際運動はもとより、言論、思想、學術から公共娛樂や、藝術生活までが、強烈なる壓迫下に置かれるやうになつては、政治的自由獲得のための闘争は、最早や、單なる政治的理想の追求では斷じてない。今日では、自由の要求は生活の要求である。自由のため闘争は生活のための闘争である。

ブルジョア・デモクラシー獲得の問題について、もう一つ考へねばならぬのは、農村問題——土地問題である。農民殊に小作農民は、未だ小作料といふ封建的な搾取形態の下に、苦しんでゐる。その高價な小作料を支拂つてさへ、やゝもすれば、立入禁止だとか、立毛差押、生藪差押、さては家財道具の差押へまで食らつてゐる有様である。然るに此の土地問題を徹底的に解決することは、——勿論小作人の利益になる様に解決することを意味する——は地主の到底肯んぜぬ處であり、地主の肯んぜぬ處は、地主と緊密なる同盟を形成せる帝國主義ブルジョアジーの斷じて遂行し得ざるところである。従つて、今日の土地問題は、支配階級の解決し能はざる處である。それは、プロレタリアートの指導の下に、全被壓迫大衆の闘争が、高度に展開される時にのみ、解決され得る問題である。同様に高價なる租税、高價なる肥料農具、高利貸への借金に苦しんで

ある小自作農の解放も、たゞプロレタリアートのみがなし得る處である。

わが労働者、農民、小市民大衆は、強固なる階級的大衆黨の傘下に集り、戦闘的プロレタリアートの指導の下に、このブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争を最後まで闘ひ抜かねばならぬ。

○ 現段階に於けるブルジョア・デモクラシー獲得闘争の意義

現下のわが無産階級の政治闘争に於ける主要目的が「ブルジョア・デモクラシーの獲得」でなければならぬ、といふ我々の主張に對立して、或る一派の社會批評家たちは、それを日和見主義的見解だ、として罵倒してゐる。我々は彼等の迷言を克服する必要がある。彼等は、現下のわが無産階級の政治闘争に於ける主要目的を「帝國主義×××」でなければならぬと主張してゐる。そして彼等は、それを現××段階に於けるわが無産階級の基本的任務だとなし、その爲めの闘争を基本的任務遂行のための闘争と名づけ、一方、ブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争をその副次的任務であるとなし、その爲の闘争を副次的任務遂行のための闘争と名づけてゐる。更に、それら二つの任務（闘争）の相互の關係を規定して「副次的任務は、基本的任務の遂行な

くしては果されぬ。と同時に、基本的任務のための闘争は、副次任務のための闘争を含む時にのみ成功的であるであらう。」と論じてゐる。

彼等の意見によれば、我がプロレタリアートは、「その政治闘争を、民主主義獲得の爲めの闘争に限ることは出来ない。主力をそれに集中してさへならぬ。かかる闘争は、帝國主義に對する闘争——此の至要なる闘争——のうちに統一される時のみに、プロレタリアート自身の闘争となるであらう。」といふのである。だが、一體、彼等が、ブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争と並立させて論じてゐる「帝國主義に對する闘争」と言つてゐるのは、具體的には如何なる闘争を意味してゐるのか？ 我々は、不幸にして、彼等から、その内容を、曾つて一度も聞いたことがない。しかし、彼等から、それを聞かうとすることは、もともと無理だ。なんとすれば、彼等は、始めからそれを知らないのだ！ 讀者諸君は、以下の論證によつて、それを承認されるであらう。

この一派の人達の謬論の根據は、彼等が好んで用ひる夥たしきマルクス主義的用語にも拘らず常に極端なる觀念論的思想に煩らはされて、現實に闘はれつつある闘争の現實の意義を、少しも

理解しようとしな

先づ第一に、

五

闘はれつつあるブルジョア・デモクラシー獲得闘争の意義を全く理解してゐない。彼等は、ブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争を、高々、資本主義の機構内に於て達成し得られる程度の、労働者、農民および小市民の利益の獲得を目的とする闘争だ、位に理解してゐる。だから、彼等によれば、この闘争は、單なる改良のための闘争であつて、帝國主義に對する闘争ではないといふことになるのである。そこで彼等は、この闘争とは別に「帝國主義に對する闘争」なるものを持ち出して來るのである。だが、現在わがプロレタリアートによつて、現實に闘はれつつあるブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争は、彼等のかかる公式論的理解とは全然無關係に帝國主義に對する闘争として現實に闘はれつつあるのである。

金融資本の覇制の下にある資本金・地主の政府が、現に實行しつつある政治的支配の最大の特徴は、何人にも明白な通りに、その反動的傾向——民衆の政治的自由を剝奪して、彼等の強制的支配を遮二無二押し通うさうとする傾向——にある。帝國主義の時代に於ける資本金・地主の政治的支配に示されてゐるこの特徴は、言ふまでもなく、經濟上に於ける彼等の攻勢が、政治

の上に、集中的に表現されたものである。政治的権力の利用なくしては、彼等の經濟上の攻勢は全然不可能である。資本金・地主は、今や、彼等の經濟的・政治的全勢力を、労働者、農民、小市民への攻勢に集中してゐる。——先づ經濟的には全國各地の大小工場に於て續々行はれつつある労働者の大敵首、労働賃銀の値下げ、労働時間の延長等々、更に農民に對しては、立入禁止立毛の差押へ等々、政治的には、治安維持法、暴力行爲取締法、改悪されたる出版法等々の制定、重大なる豫算による民衆の負擔の加重、租税法の改悪、戰國的政黨、労働組合、農民組合への強壓、等々々々——これこそ、疑もなく帝國主義時代の最大の特徴である。この狂暴なる帝國主義政治に、正面から對抗して、全被壓大衆の利益を擁護し獲得する爲めの闘争こそ、わがプロレタリアートによつて現に闘はれつつある政治的自由獲得のための闘争である。今や、政治的自由の問題を中心として、支配階級と全被壓大衆との間の各々の全勢力を傾倒しての、血みどろの闘争が、現實に展開されつつある。ブルジョア・デモクラシー獲得のための闘争は、現段階に於ては最早や、單なる改良のための闘争では斷じてあり得ない。支配階級の全勢力に對抗してのみ闘はれ得るところの、ブルジョア政權への最も直接の闘争である。「帝國主義に對する闘争」として、

現在の客観的・主観的條件の下に於て、これ以上に有力な政治闘争が他に在り得るか？ あつたら示してみよ！ である。プロレタリアートは、この闘争に於て、自らを眞に強固なる階級として結成せしめ得ると同時に、この闘争に於て、常に自らを尖端に立つて闘ふことによつて、農民及び小市民との間の強固なるプロックを作り、且つ、そこでのヘゲモニーを獲得することを得るのである。労働者農民のプロック、プロレタリアートのヘゲモニー等の問題は、現實の闘争過程に於てのみ解決され得る問題であつて、紙上の空想に於て解決され得る問題ではない。

勿論、このブルジョア・デモクラシーの獲得のための闘争には限界がある。それは、より高度の闘争によつて繼續されることなしには、帝國主義に對する闘争としての意義を完了し得るものではない。だが、此闘争が、より高度の闘争に發展轉化し得るのは、それが、單なる改良のための闘争でなくて、帝國主義に對する、言葉の嚴格なる意味に於ての眞實の政治闘争だからである。この闘争を、單なる改良のための闘争と考へ、それに並立せしめて、別に「帝國主義に對する闘争」なる内容空虚なる概念を持ち出すときは、實に始末の悪い觀念論である。

大衆政黨の問題に關しては、もつと精しく論述すべきであると思ふが、最早や豫定の紙数を遙かに超過して了つたので、残念ながら別の機會に譲ることにする。

昭和三年九月十七日印刷
昭和三年九月二十日發行

(非賣品)

無産者自由大學
第九講座

政治學

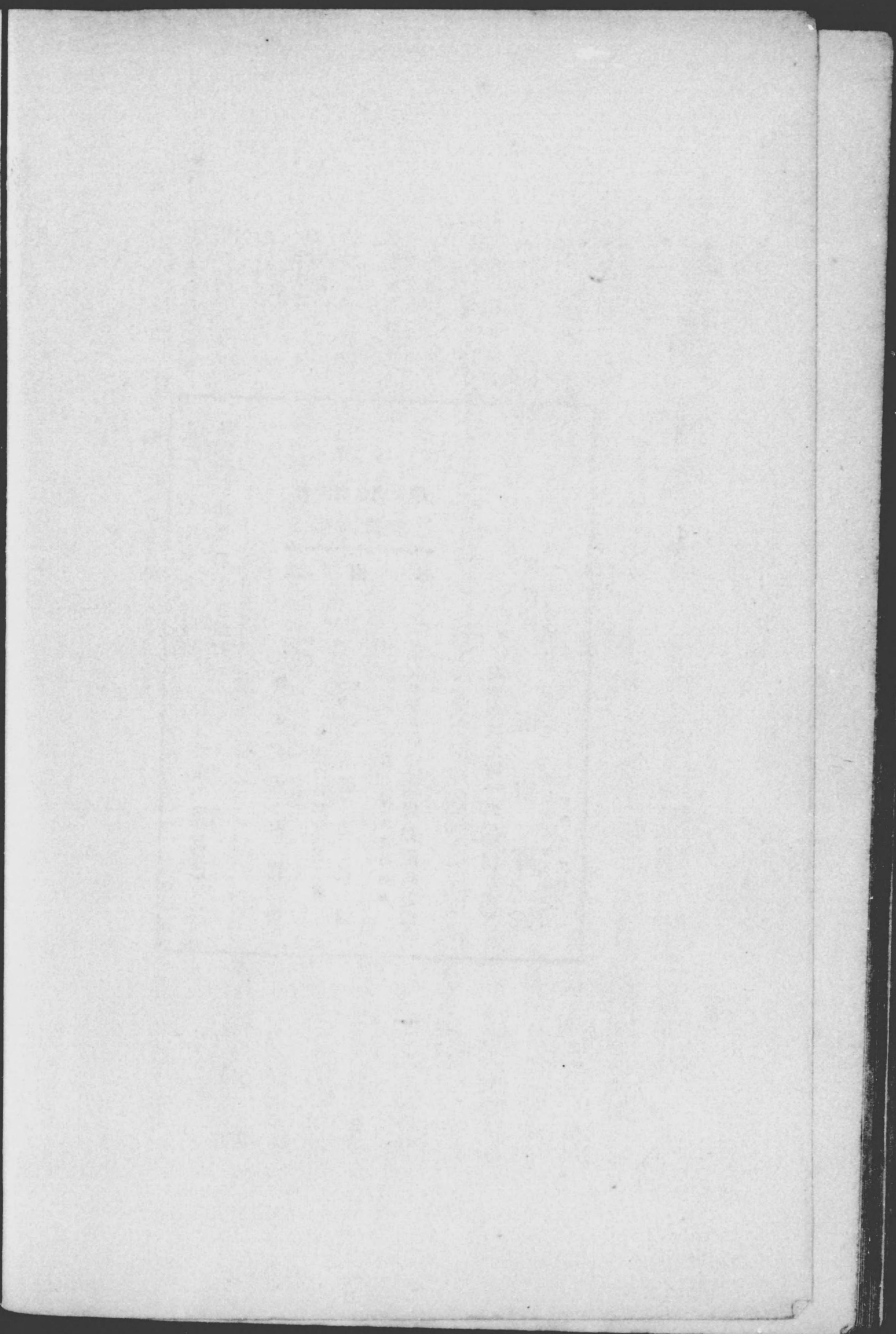
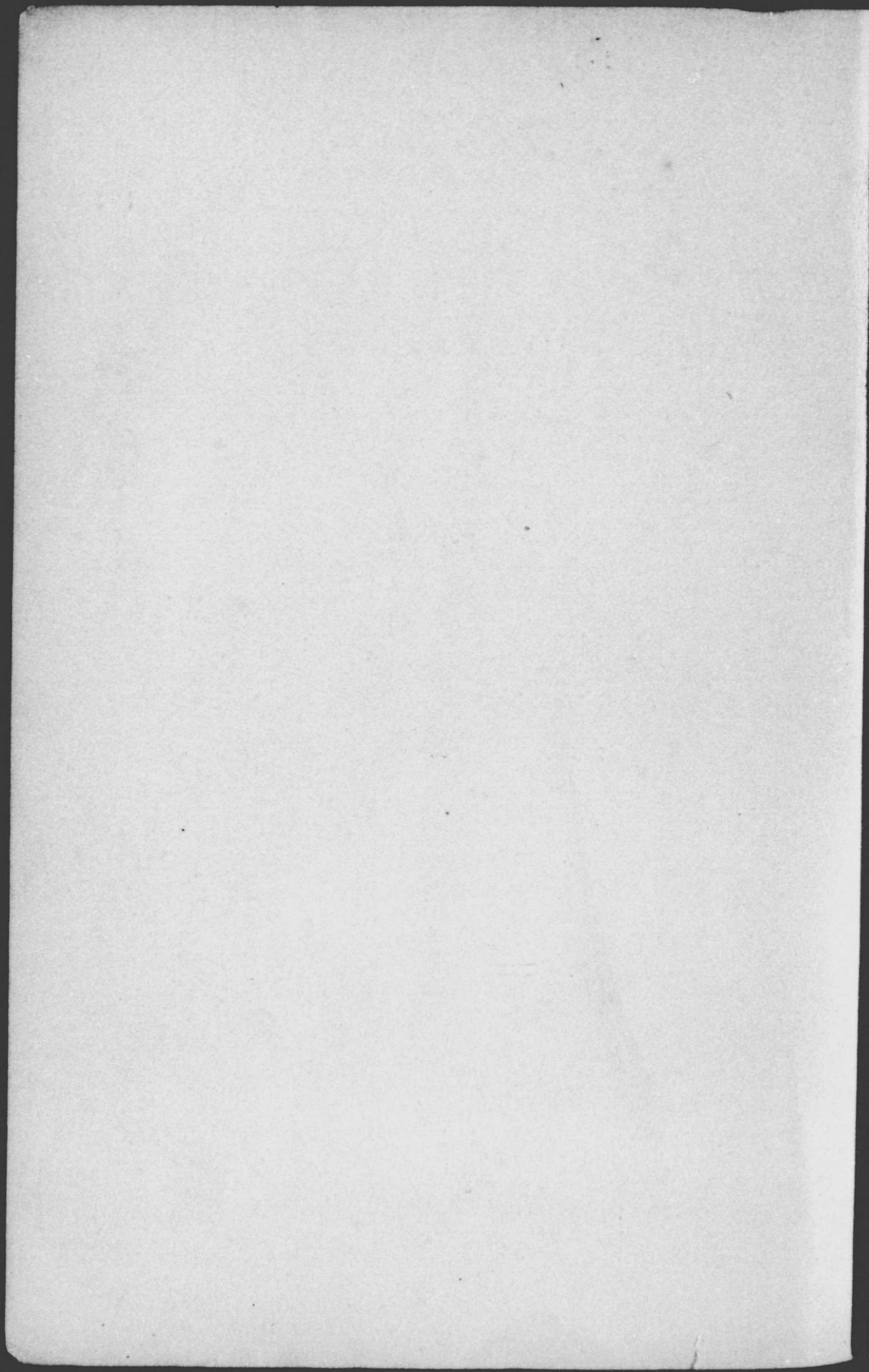
著者 大山郁夫
編輯者 南島義博
印刷所 南宋書院印刷所
東京牛込区神樂坂四六

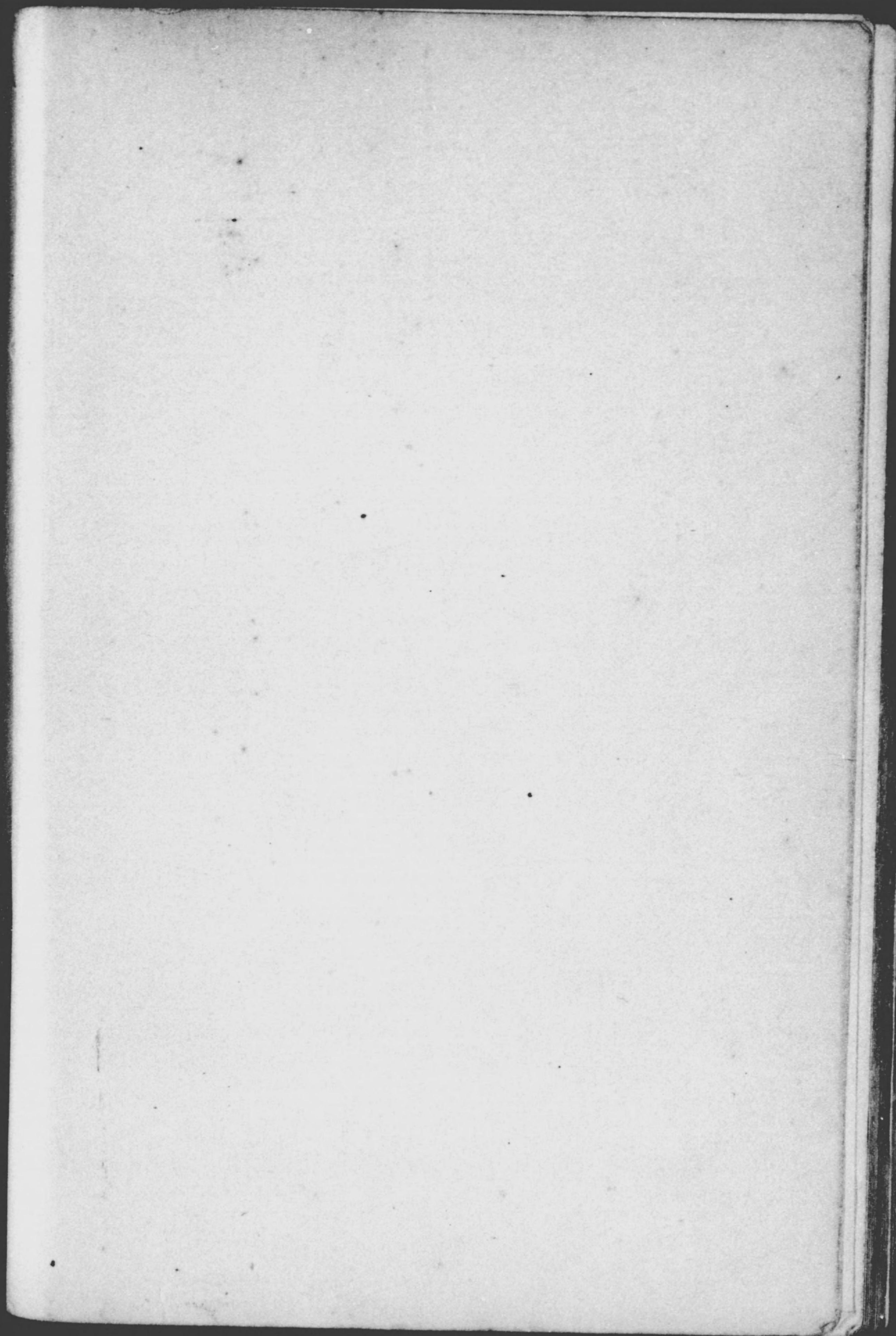
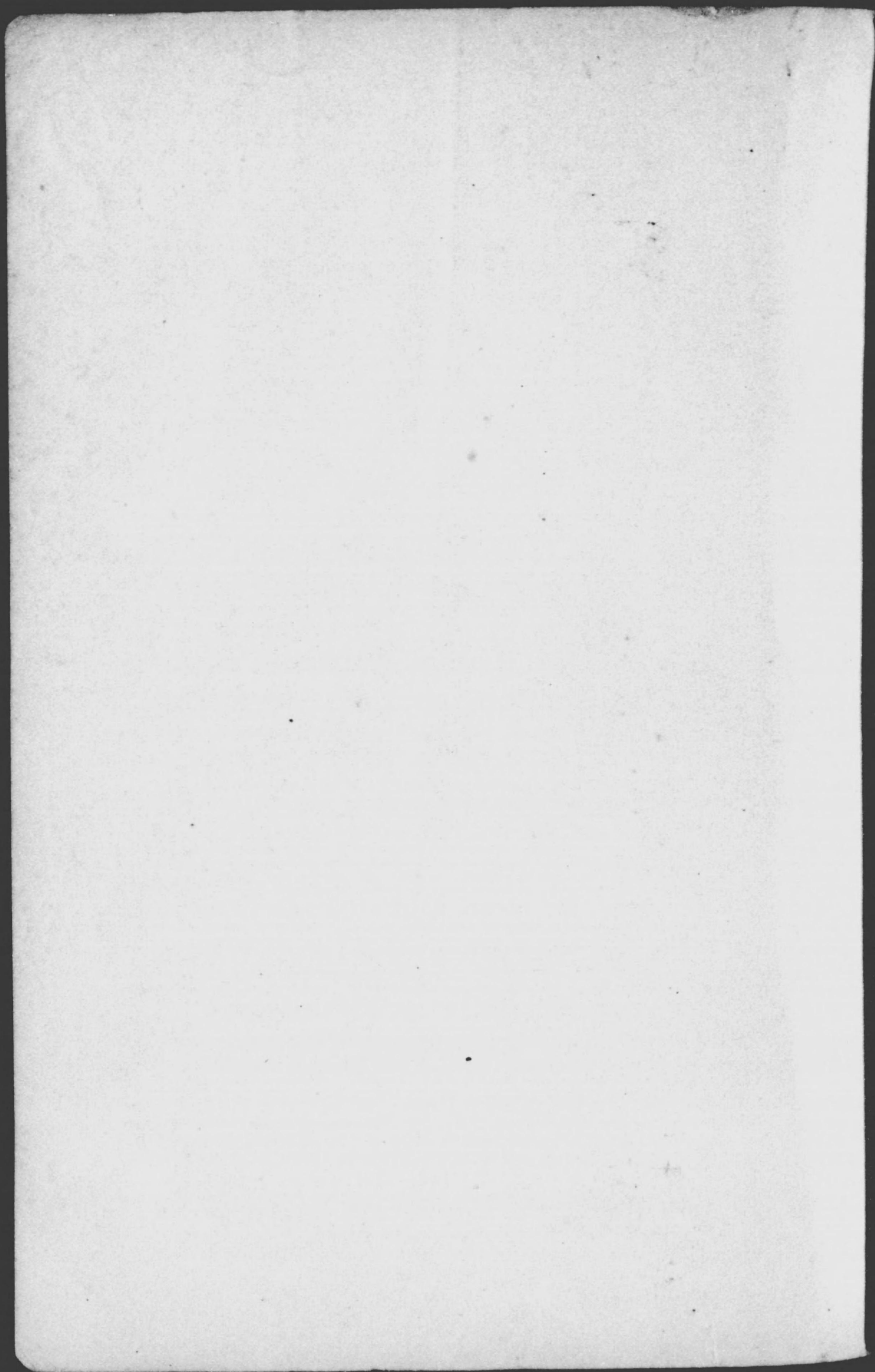
發行所

南宋書院

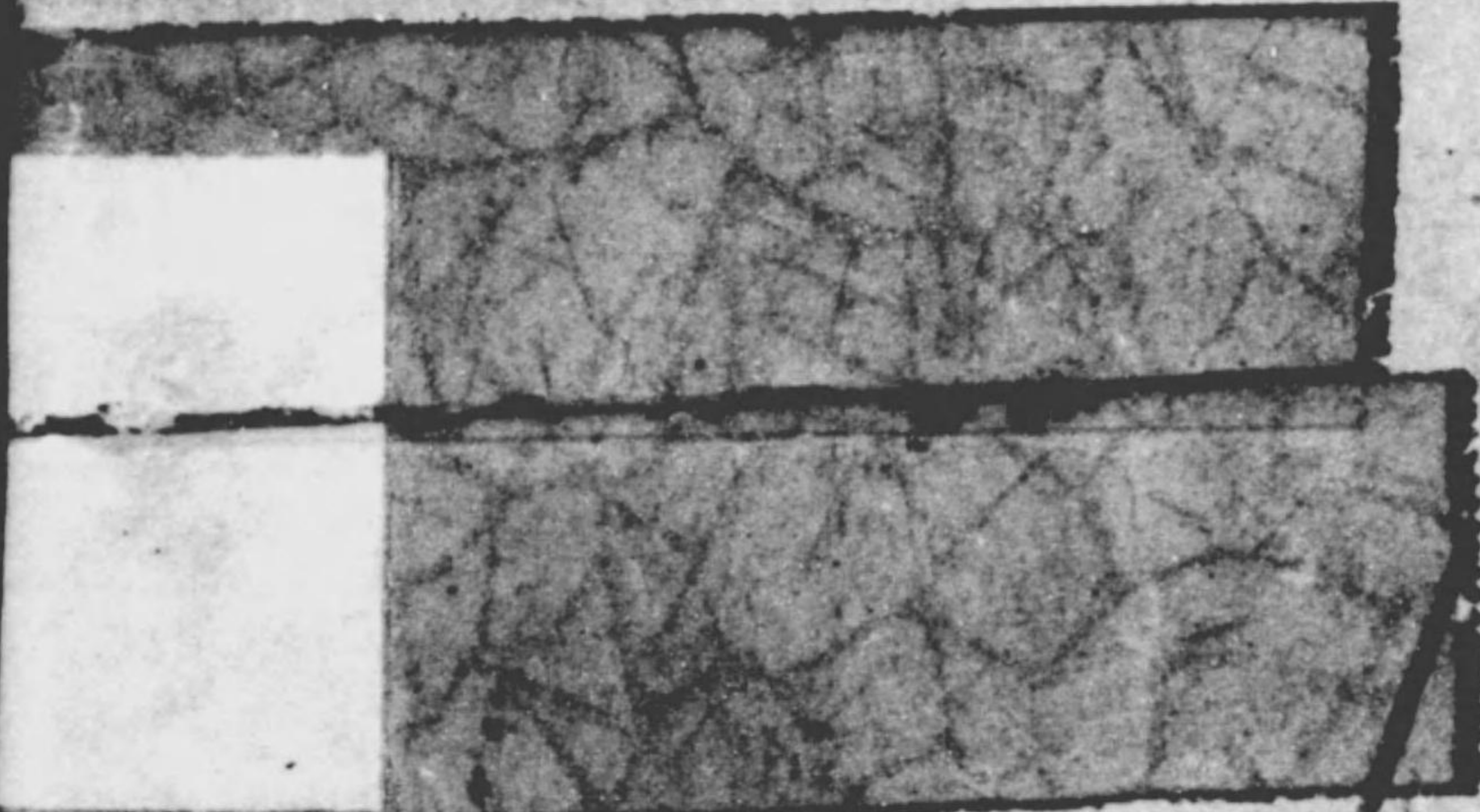
東京牛込区町一(神樂坂通)

電話東京七五三二八
電話牛込一四六一





昭和九年九月十七日 印刷
昭和九年九月二十日 發行



1929
12
207